

湯の口横穴群

菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(1)

1986

山鹿市教育委員会

湯の口横穴群

菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(1)

1986

山鹿市教育委員会

発刊にあたって

このたび、湯の口横穴群調査報告書を刊行しましたので、お届けいたします。
山鹿市東部に位置する当横穴群の調査は、菊池川中流域古墳・横穴群総合調査の一環として昭和59年度に実施したものです。

調査にあたっては、この横穴群が溜池に直面する崖面に、しかも不規則に開口していることから調査時期の制約や段取りの変更を余儀なくされることもありました。しかし、こうした不測の事態に伴う肉体的・精神的労苦を償うには充分な成果をあげることができたようです。

規模においても、開口状況や装飾様式においても、当横穴群と対極する市西部の鍋田横穴群に見られなかつた新しい発見も数多くあるなど、流域の古代文化圏の特色を明らかにしていく上で、重要な位置を占めていることも確認されました。

調査に際し、厳冬のさなか、調査に参加された多くの方々や指導・助言をいただいた県文化課はじめ、貴重な玉稿をお寄せいただいた長崎大学医学部第二解剖学教室に対し、心から感謝の意を表したいと思います。

終りになりましたが、本報告書が学術研究の一資料として活用され、文化財の保存や愛護思想昂揚の一助となれば、これに過ぐる喜びはありません。

昭和61年3月31日

山鹿市教育委員会

教育長 弓掛正久

例　　言

1. 本書は、山鹿市教育委員会が国庫補助事業として実施した菊池川中流域古墳・横穴群総合調査の報告書である。
2. 本調査は、菊池川中流域に所在する古墳、横穴群の実態を把握することを目的としたもので、湯の口横穴群はその初年度の事業にあたる。
3. 調査に際しては、山鹿市教育委員会が主体となり、山鹿市立博物館に於いて実施した。
4. 本書の執筆は、中村幸史郎が行い、人骨に関しては長崎大学医学部より玉稿をいただいた。
5. 本書の横穴、遺物の実測図作成および、製図は挿図目次に示すとおりである。
6. 本書に掲載した写真は、横穴を中村、倉原謙治、坂本重義が、遺物は中村があたり、現像、焼付も中村が行った。
7. 本書の編集は中村が緒方久美子の協力を得て行った。
8. 鉄器の保存処理に関しては佐賀県立博物館の手を煩わせた。
9. 本書の題字は山鹿市文化財保護委員長幸平和氏にお願いした。

本 文 目 次

発刊にあたって

I 調査の経過	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 過去の調査	2
II 立地と環境	5
III 調査の成果	8
1. 横穴群の範囲と分布の概要	8
2. 横穴と遺物	12
IV まとめ	87
V 付 論…湯の口横穴墓群出土の古墳時代人骨	109

図 版 目 次

図 版 1 湯の口横穴群遠景	
2 1 52号横穴人骨出土状況	
2 1 号人骨	
3 2 号人骨	
3 1 53号横穴人骨出土状況	
2 閉塞石（横穴内より）	
3 1 号人骨	
4 1 53号横穴 2 号人骨	
2 3 号人骨	
3 54号横穴	
5 1 54号横穴奥壁（棟持柱を刻んでいる）	
2 1 号人骨	
3 1 号人骨	

- 6 1 124号横穴
 - 2 横穴内より伸びた墓道
 - 3 125号横穴遺物出土状況
- 7 1 131号横穴閉塞石出土状況
 - 2 羨門右側張り出し
 - 3 遺物出土状況
- 8 1 131号横穴閉塞石根固石除去状況
 - 2 133号横穴
 - 3 鉄器出土状況
- 9 1 175号横穴羨門部
 - 2 装飾（レリーフ）
 - 3 羨門上部に施された装飾
- 10 1 182号横穴玄室より羨門を臨む
 - 2 羨門より玄室を臨む
 - 3 羨門側壁に開口する183号横穴との切合部分
- 11 鹿本商工資料 52、59、61、63、101号横穴出土遺物
- 12 102、103、105、122、124号横穴出土遺物
- 13 124、125号横穴出土遺物
- 14 130～132号横穴出土遺物
- 15 133号横穴出土遺物
- 16 134、138、139、143、144、146、147、175、183号横穴出土遺物

插 図 目 次

第 1 図 鹿本商工資料実測図（中村幸史郎実測、大森よう子製図）	4
第 2 図 鹿本商工資料実測図（中村実測、大森製図）	4
第 3 図 周辺の主要遺跡分布図（中村作成）	7
第 4 図 湯の口横穴群配置図（中村作成）	9～10
第 5 図 52号横穴実測図（中村実測、垣田美穂子製図）	12
第 6 図 52号横穴出土木片実測図（中村実測、緒方久美子製図）	12
第 7 図 53号横穴実測図（坂本重義実測、垣田製図）	13
第 8 図 54号横穴実測図（倉原謙治実測、垣田製図）	14
第 9 図 57号横穴実測図（中村実測、垣田製図）	15
第 10 図 57号横穴出土遺物実測図（緒方実測、緒方製図）	15

第 11 図	58号横穴実測図（坂本実測、垣田製図）	16
第 12 図	59号横穴実測図（坂本実測、垣田製図）	17
第 13 図	59号横穴出土遺物実測図（緒方実測、垣田・緒方製図）	18
第 14 図	61号横穴実測図（倉原実測、垣田製図）	19
第 15 図	61号横穴出土遺物実測図（緒方実測、緒方製図）	20
第 16 図	62号横穴実測図（坂本実測、垣田製図）	21
第 17 図	63号横穴実測図（倉原実測、垣田製図）	22
第 18 図	63号横穴出土遺物実測図（緒方実測、垣田製図）	23
第 19 図	63号横穴出土鉄器実測図（坂本実測、田中理恵子製図）	23
第 20 図	64号横穴実測図（中村実測、垣田製図）	24
第 21 図	64号横穴出土遺物実測図（緒方実測、緒方製図）	25
第 22 図	65号横穴実測図（倉原実測、垣田製図）	25
第 23 図	66号横穴実測図（中村実測、垣田製図）	26
第 24 図	66号横穴出土遺物実測図（緒方実測、田中製図）	27
第 25 図	67号横穴実測図（倉原実測、垣田製図）	27
第 26 図	67号横穴出土遺物実測図（緒方実測、垣田製図）	28
第 27 図	68号横穴実測図（坂本実測、垣田製図）	28
第 28 図	69号横穴実測図（倉原実測、垣田製図）	29
第 29 図	69号横穴出土遺物実測図（緒方実測、田中製図）	29
第 30 図	70号横穴実測図（坂本実測、坂本製図）	30
第 31 図	70号横穴出土遺物実測図（緒方実測、田中製図）	31
第 32 図	71号横穴実測図（中村実測、垣田製図）	31
第 33 図	71号横穴出土遺物実測図（緒方実測、田中製図）	31
第 34 図	72号横穴実測図（中村実測、垣田製図）	32
第 35 図	101号横穴実測図（坂本実測、垣田製図）	33
第 36 図	101号横穴出土耳環実測図（中村実測、大森製図）	33
第 37 図	101号横穴出土鉄器実測図（中村実測、田中製図）	33
第 38 図	102号横穴実測図（倉原実測、垣田製図）	34
第 39 図	102号横穴出土鉄器実測図（中村実測、田中製図）	34
第 40 図	102号横穴出土遺物実測図（中村実測、大森製図）	35
第 41 図	103号横穴実測図（坂本実測、坂本製図）	37
第 42 図	103号横穴出土遺物実測図（緒方実測、緒方製図）	37
第 43 図	103号横穴出土鉄器実測図（中村実測、田中製図）	37
第 44 図	104号横穴実測図（坂本実測、垣田製図）	38
第 45 図	104号横穴出土鉄器実測図（中村実測、田中製図）	38
第 46 図	105号横穴実測図（中村実測、垣田製図）	39

第 47 図	105号横穴出土遺物実測図（緒方実測、垣田製図）	39
第 48 図	105号横穴出土鉄器実測図（中村実測、田中製図）	39
第 49 図	106号横穴実測図（倉原実測、大森製図）	40
第 50 図	106号横穴出土遺物実測図（緒方実測、緒方製図）	40
第 51 図	112号横穴実測図（坂本実測、大森製図）	41
第 52 図	114号横穴実測図（坂本実測、坂本製図）	42
第 53 図	115号横穴実測図（坂本実測、垣田製図）	43
第 54 図	115号横穴出土遺物実測図（緒方実測、垣田製図）	43
第 55 図	120号横穴実測図（中村実測、垣田製図）	43
第 56 図	122号横穴実測図（中村実測、垣田製図）	44
第 57 図	122号横穴出土遺物実測図（緒方実測、垣田・緒方製図）	45
第 58 図	123号横穴実測図（中村実測、垣田製図）	45
第 59 図	124号横穴実測図（中村実測、垣田製図）	46
第 60 図	124号横穴出土遺物実測図（緒方実測、垣田・田中製図）	47
第 61 図	124号横穴出土鉄器実測図（中村実測、田中製図）	49
第 62 図	125号横穴出土遺物実測図（緒方実測、垣田・田中製図）	50
第 63 図	125号横穴出土遺物実測図（緒方実測、垣田・緒方製図）	52
第 64 図	125号横穴出土遺物実測図（坂本実測、坂本製図）	53
第 65 図	125号横穴出土鉄器実測図（中村実測、田中製図）	53
第 66 図	127号横穴実測図（中村実測、坂本製図）	54
第 67 図	128号横穴出土遺物実測図（緒方実測、垣田製図）	55
第 68 図	130号横穴実測図（倉原実測、大森製図）	55
第 69 図	130号横穴出土耳環実測図（中村実測、大森製図）	56
第 70 図	131号横穴実測図（坂本実測、坂本製図）	57
第 71 図	131号横穴出土遺物実測図（緒方実測、垣田・田中製図）	59
第 72 図	131号横穴出土遺物実測図（緒方実測、緒方製図）	61
第 73 図	131号横穴出土遺物実測図（緒方実測、垣田製図）	62
第 74 図	131号横穴出土鉄器実測図（中村実測、田中製図）	62
第 75 図	132号横穴実測図（中村実測、大森製図）	63
第 76 図	132号横穴出土耳環実測図（中村実測、大森製図）	64
第 77 図	133号横穴閉塞石実測図（倉原実測、垣田製図）	64
第 78 図	133号横穴出土鉄器実測図（中村・坂本実測、田中製図）	65
第 79 図	133号横穴出土鉄器実測図（中村・坂本実測、田中製図）	66
第 80 図	134号横穴実測図（坂本実測、坂本製図）	68
第 81 図	134号横穴出土鉄器実測図（中村実測、田中製図）	69
第 82 図	135号横穴実測図（倉原実測、垣田製図）	69

第 83 図	136号横穴実測図（倉原実測、大森製図）	70
第 84 図	137号横穴実測図（倉原実測、大森製図）	70
第 85 図	138号横穴実測図（倉原実測、垣田製図）	71
第 86 図	138号横穴出土遺物実測図（緒方実測、垣田製図）	72
第 87 図	138号横穴出土鉄器実測図（中村実測、田中製図）	72
第 88 図	138号横穴出土遺物実測図（中村実測、大森製図）	72
第 89 図	139号横穴実測図（倉原実測、垣田製図）	73
第 90 図	139号横穴出土遺物実測図（緒方実測、垣田製図）	73
第 91 図	140号横穴実測図（中村実測、垣田製図）	74
第 92 図	141号横穴実測図（坂本実測、垣田製図）	74
第 93 図	142号横穴実測図（中村実測、垣田製図）	75
第 94 図	143号横穴実測図（倉原実測、大森製図）	76
第 95 図	143号横穴出土鉄器実測図（中村実測、田中製図）	76
第 96 図	143号横穴出土小玉実測図（中村実測、大森製図）	76
第 97 図	144号横穴実測図（倉原実測、大森製図）	77
第 98 図	144号横穴出土鉄器実測図（中村実測、田中製図）	78
第 99 図	144号横穴出土玉類実測図（中村実測、大森製図）	78
第 100 図	145号横穴実測図（坂本実測、垣田製図）	79
第 101 図	146号横穴実測図（中村実測、垣田製図）	80
第 102 図	146号横穴出土遺物実測図（緒方実測、緒方製図）	80
第 103 図	146号横穴出土鉄器実測図（坂本実測、田中製図）	81
第 104 図	147号横穴実測図（中村実測、垣田製図）	82
第 105 図	147号横穴出土小玉実測図（中村実測、大森製図）	82
第 106 図	175号横穴実測図（倉原実測、大森製図）	83
第 107 図	175号横穴出土鉄器実測図（坂本実測、田中製図）	84
第 108 図	182号横穴実測図（坂本実測、坂本製図）	85
第 109 図	183号横穴実測図（中村実測、垣田製図）	86
第 110 図	183号横穴出土鉄器実測図（中村実測、田中製図）	86
第 111 図	鍋田27号横穴装飾拓影（中村・倉原・坂本作成）	88

表 目 次

表 1	102号横穴出土臼玉集成表	35～36
表 2	102号横穴出土小玉集成表	36

表 3 143号横穴出土小玉集成表	76
表 4 144号横穴出土小玉集成表	78
表 5 147号横穴出土小玉集成表	82

I 調査の経過

1. 調査に至る経過

山鹿市には、チブサン古墳をはじめとして、弁慶が穴古墳、鍋田横穴群等の全国的に著名な装飾古墳が数多く残っており、全国各地から研究者や学生、更には一般観光客と各層にわたって、絶えず見学に訪れている。そのため、山鹿市は機会あるごとに「古墳と灯籠といで湯の街・山鹿」と宣伝しており、観光都市山鹿に於いて、文化財は重要な観光資源の一つとなっている。その結果、九州では宇佐市に次いで二番目に「文化財愛護都市宣言」を、市議会で議決したのが昭和54年9月のことであった。しかし、反面、文化財保護が装飾古墳のみに片寄り、他の古墳や横穴、更には埋蔵文化財等については、軽視される傾向があったことは否めない。

昭和53年4月博物館がオープンし、その運営方針について「菊池川流域を中心とした考古、歴史、民俗資料の調査収集に務め、文化センターの役割を持つべきである。」として、昭和54年度には縄文後期の城、下原遺跡^{註1}、昭和56年度には弥生時代後期の方保田東原遺跡等^{註2}の調査を実施した。しかし、この他にも開発行為に伴う発掘調査を毎年のように実施しており、これらは埋蔵文化財が乱開発によって破壊されていく今日に於いては重要な役割を果していると言えるが、博物館に於ける小規模な調査には限界が見られ、博物館自体のもつ意味からは軌道修正を行う必要があった。

そのような状況の中で、装飾古墳のメッカとも称される山鹿市に於いて、博物館では、装飾古墳はもとより、他の古墳や横穴群についての資料を一切持たず、来館者の要望にも十分対応できていなかった。そこでせめて、市内に所在する古墳、横穴群、更には出土遺物に至るまで、記録、保存していくことを目的として、4ヶ年計画で実測及び測量の調査を実施することとしたものである。

註1 『城・下原遺跡』「山鹿市立博物館調査報告第1集」1980

註2 『方保田東原遺跡』「山鹿市立博物館調査報告第2集」1982

2. 調査の組織

調査主体 山鹿市教育委員会

総括 弓掛 正久（山鹿市教育長）

調査団長 原口 長之（山鹿市立博物館館長）

専門調査員 内藤 芳篤（長崎大学医学部教授）

松下 孝幸（長崎大学医学部講師、現助教授）

分部 哲秋（長崎大学医学部助手、現講師）

中谷 昭二（長崎大学医学部助手）

調査事務 犀木 正斗（山鹿市立博物館副館長）

次木万里子（山鹿市立博物館事務吏員）
調査員 中村幸史郎（山鹿市立博物館学芸員）
倉原 謙治（山鹿市立博物館学芸員）
調査補助員 坂本 重義（山鹿市立博物館臨時）
作業員 前川誠一、吉里勝正、緒方泰男、松本定、吉里盛喜、野田辰起、富田昭一、工藤春喜、立山富士夫、下瀬源吾、下瀬義晴、尾形清喜、大森よう子、垣田美穂子、上妻珠美、緒方久美子、杉本千里、村上イツエ、村上イツ子、吉井あやめ、古閑敬子、下瀬綾子、松山カチ子、立山登美子、立山セイ子、尾形光子
遺物整理 大森よう子、垣田美穂子、緒方久美子、田中理恵子

3. 過去の調査

湯の口横穴群が、初めて文献に著されたのはいつのことであろうか。明和9年（1772）の肥後国誌、中村手永蒲生村の条には次の記載が見られる。

『…前略…当村ノ内猪ノ窪ト云所ニ何レノ比ヨリト伝事ヲモ知サル古墳アリ墓石モ無ク山石一二アリ宝暦ノ始農夫過テ墳塋ヲ崩スニ石棺ノ内ニ齡十六七歳可リノ婦女容顔美麗ナル太タ驚キ直ニ元トノ如ク封シ納タリト云其人ノ素姓ヲ知ル人モナク年代モ不分明形體ノ其儘ニ在事甚タ不審ト伝ヘドモ即今ノ事ニテ里農能ク知レル事故記之……』

これは湯の口横穴群とは別の古墳の可能性が強いが、明治8年（1875）に書かれた山鹿郡誌の蒲生村の条には、肥後国誌を引用して、湯の口横穴群との関連をうかがわせる一文を見出すことができる。

『…陵墓 日岡古墳 村ノ東湯口字山中ニ百塚ト云所アリ、山石二三宛散在シテ塚ノ如クモナシ 肥後志ニ云蒲生村ノ内猪窪……中略……農夫太タ驚キ直ニ元ノ如ク封納タリト伝其人ノ素姓ヲ知人モナク年代モ不分明形體ノ其ママナルコト甚不審ト雖即今ノコトニテ里農能ク知ルコト故記之ト云リ今其事ヲ知者ナシ石棺ノ有シハ此百塚ナラン 此辺ノ岸ニ古屈 多シ』

この時点では、湯の口横穴群という名称は見出せないが、百塚という地名が存在していたことがうかがわれ、崖面に横穴が在ったことも知られていたようである。恐らくこれが湯の口横穴群のことであろう。しかし、横穴群として明確に記されたのは、大正12年（1923）の鹿本郡誌が最初である。これには、横穴群の所在地から、立地地形、横穴分布状況、総数、入口及び内部構造と、詳細にわたって記載がなされており、一応の調査が行われていたことをうかがうことができる。しかし、その総数については60基以上であるとしており、範囲確認が完全に調査されたとは言い難い。

遺物の採集については、明治30年代からの資料が鹿本商工高校資料の中に見ることができる。これらの資料については旧制鹿本中学時代からの貴重な採集品があり、散逸の恐れがあるため、一括博物館で保管しており、その中に湯の口溜池出土とある資料を二三見出すことができる。特に明治23年から大正9年まで鹿本中学で教鞭を執られた波多巣氏による採集品も見ることができる。

氏は大正元年の「肥後国平小城村チブサン古墳」『考古学雑誌』3－2によってチブサン古墳の装飾を全国に初めて紹介されたことで、あまりにも著名であるが、明治38年、「肥後国菊池川流域における横穴及び古墳」と題して『考古界』第5編第3・9・10号に投稿され、長岩横穴群における横穴構造の型態分類を行っている。この中には、残念なことに湯の口横穴群に関しては何ら書かれていないが、氏が湯の口溜池で採集した遺物が在ることからも、横穴群の調査にまで至らなかったとは断言できない。ましてや、鹿本郡誌の記載内容があまりにも詳細にわたっているところから、彼の調査を基礎としていることは容易に理解できる。

その後永い間、この横穴群についての調査は行われず、蒐集家による盗掘が盛んに行われた。特に戦前から戦後においては、地元蒲生村のマニア故長迫孫一氏の蒐集品は質・量共に素晴らしいものであったらしい。現在では、散逸して何ら残っていないのは残念な事である。また、今日でも溜池で採集した遺物を持っている人が多いとのことである。

さて、昭和48年山鹿文化財を守る会で、横穴群の範囲確認調査を実施したが、その際は溜池の東側についての調査をしなかったため41基を確認したに過ぎなかった。昭和51年には鹿本町史が刊行されたが、それによると総数200基を超すであろうとの記載があり、未だ実数の把握されない横穴群である。

次に載せた資料は、鹿本商工資料のうち湯の口横穴群から出土した須恵器である。(図版11-1～5・第1、2図)

1は短頸壺である。口径18.4cm、最大径32.7cm、器高35cmを測る。口縁部は短く外反し、口唇部は丸味を呈し、下端部には凸帶状に張り付けている。胴部は最大径をやや上位に有するため、肩が張った感じがする。底部は丸底で、安定性に欠ける。器面調整は外面は平行叩き目、内面には青海波状文を施している。胎土には砂粒を含み、焼成はあまり良くない。茶灰色をしている。

この資料には、墨書きで「鹿本郡三玉村蒲生湯の口横穴」

松尾亀尾

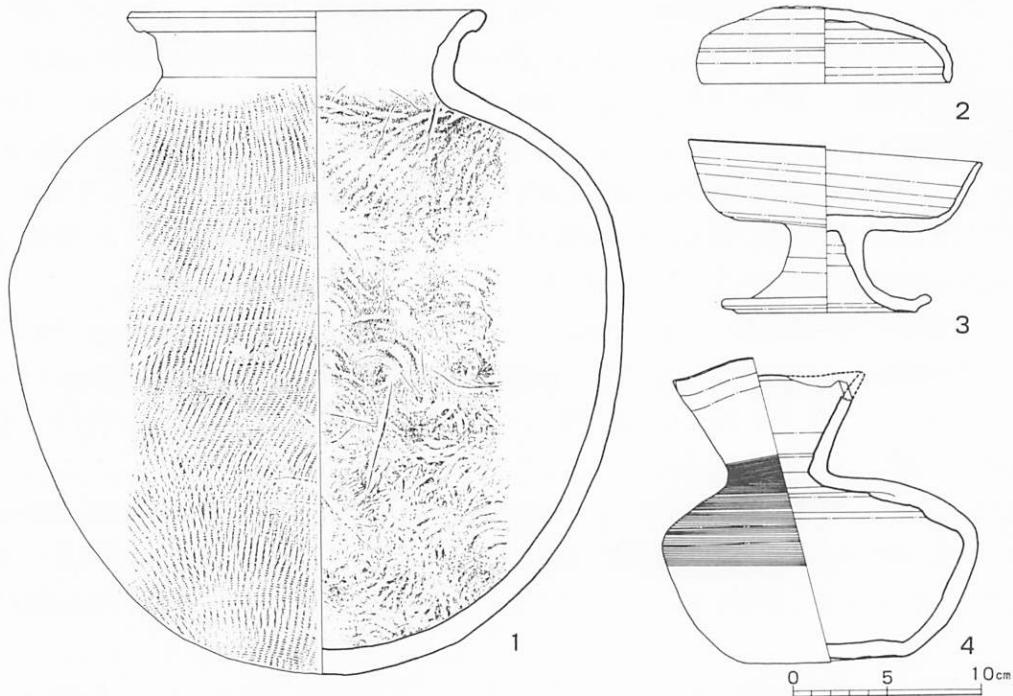
江上忠次

野口舉一郎

とあり、彼達は大正6年から8年にかけて卒業した鹿本中学の生徒である。^{註1}恐らく波多巣氏の指導を受けていたものと思われる。

2は壺蓋である。口径12.4cm、器高4cmで、天井部は不整形だが平坦に近く、口縁部との間に1条の綾を作っている。口縁部は内湾気味に直立し、端部内側で僅かに肉厚となる。天井外面は回転ヘラ削りで、他は全てナデ調整である。胎土はガラス質が器面に噴き出しており、砂粒も含んでいる。焼成は良く、灰褐色をしている。

3は無蓋高壺で、口径15.7cm、裾部径10.2cm、最大器高9.2cmを測る。壺部は水平にならず脚部とほぼ同じ高さで、高さに比べ壺部が大きく感じる。口縁部はやや内湾気味に開き、体部は平坦となっている。脚部は柱状部の径が大きく、3.8cmを測り、裾部ではさらに大きく開いている。端部は反り返り、下端部は摘み出している。全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。茶灰色をしている。

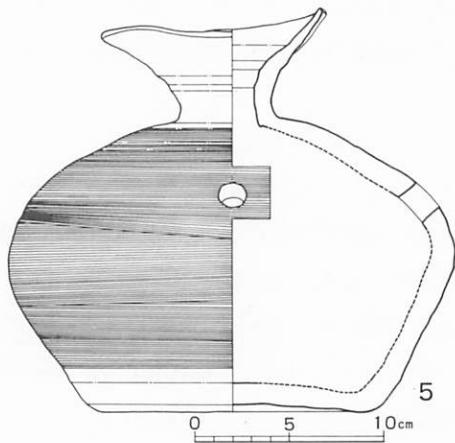


第1図 鹿本商工資料実測図

4は平瓶である。口径10.2cm、最大径16.8cm、器高16.2cmを測る。口縁部は歪んでいるが、直線的に開いて長い。端部は平坦となっている。胴部は肩が張り、やや角張っている。底部は平底で、指頭圧痕が残っている。肩部にはカキ目を残し、底部近くでヘラ削りも残っている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。暗茶褐色を呈している。

5は波多巖氏採集の大型壺である。口径12cm、最大径23.7cm、器高21.3cmである。口縁部は歪んでいるが、頸部から大きく開き、中位に2条の段をめぐらしている。胴部は最大径を中位よりやや上に有し、肩が盛り上がったようになっている。底部はやや上げ底気味の平底で、大きく安定性に優れている。孔は径1.5cmで、器高のほぼ中位に穿っている。胴部には、全面にカキ目を残している。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。暗灰色をしている。

註1 「会員名簿」熊本県立鹿本高等学校同窓会 1983



第2図 鹿本商工資料実測図

II 立地と環境

山鹿市街地から北東に約5kmの所には、標高389mの山腹にそそり立つ不動岩が存在している。ここは古くから民話「彦岳権現と不動岩の首引き話」として里人に親しまれ、また、山伏達の修験場としても信仰の対象となっていた山で、この地方のシンボルとなっている。ここからの眺望は東は阿蘇山、南は金峰山から、遠くは九州山地の峯々。西には有明海から雲仙岳を望むことができる。足下に目を転ずれば、東は菊池市から西は山鹿市まで、菊池川の流れとその流域に発達した広大な菊鹿平野、さらに平野をとり囲むように伸びた洪積台地を見ることができる。不動岩の南麓には、西側の日岡山（標高312m）裾部を基部として東から西に伸びる全長4km、幅1kmの洪積台地が存在する。これが湯の口横穴群の在る御宇田台地である。この台地は北側の日岡山とは東側の鳥越峠で連なるが、東端部は鹿本町津袋で、菊池川支流の内田川とその氾濫原に面している。南側には御宇田井手によって潤う水田が広がり、西端部は山鹿市大字久原で吉田川流域の水田に面している。北側は日岡山裾部と台地との谷に造られた湯の口溜池によって潤う水田で在り、舌状台地を呈している。またこの台地は、北側に阿蘇火碎流堆積層が軽石や火山灰層となって露出しており、ここに湯の口横穴群が構築されている。

湯の口横穴群は山鹿市大字蒲生字湯の口に位置し、その多くは湯の口溜池の中に開口するため破損が著しく、存在そのものについては古くから知られていたようである。湯の口溜池は、安政4年（1857）中村手永総庄屋遠山弥二兵衛によって完成している。水源は東側の鳥越峠を越えた内田川から約3kmにわたって水路を築いた大規模なもので、溜池自体の規模はもとより、灌漑面積も県下有数の溜池である。この工事の際にも数多くの横穴が破壊されたり、埋没したりした。そのため、横穴群の規模については未だ不明な点が多く、大正12年の鹿本郡誌によれば「……全部の穴数幾何なるか正確ならざれども確かに60個までは数ふるを得べし。……」とあるように全体の規模の解明は今後の大きな課題として残っている。

御宇田台地には湯の口横穴群をはじめとして、数多くの古墳や遺跡が残されており、これらを地区別に概観してみることとしよう。

台地東側は、地理的に最も高く標高116.5mを測り、漸次西側に向って低くなっている。ここは東北端が日岡山と鳥越峠で接しているが、東側には谷が複雑に入り込んで、その傾斜も急である。ここには古墳時代前期から中期にかけての古墳が密集しており、北から朱塚頂塚古墳、五社宮古墳、津袋大塚古墳、やや西に寄って小町塚古墳、さらに最も展望のきく茶臼塚古墳等が存在している。裾部には弥生時代後期の集落遺跡の津袋大塚遺跡も見られ、遠くは内田川流域に発達した平野に面對して対峙するように、県下最大の規模を誇る瀬戸口横穴群や、鞠智城等も存在している。

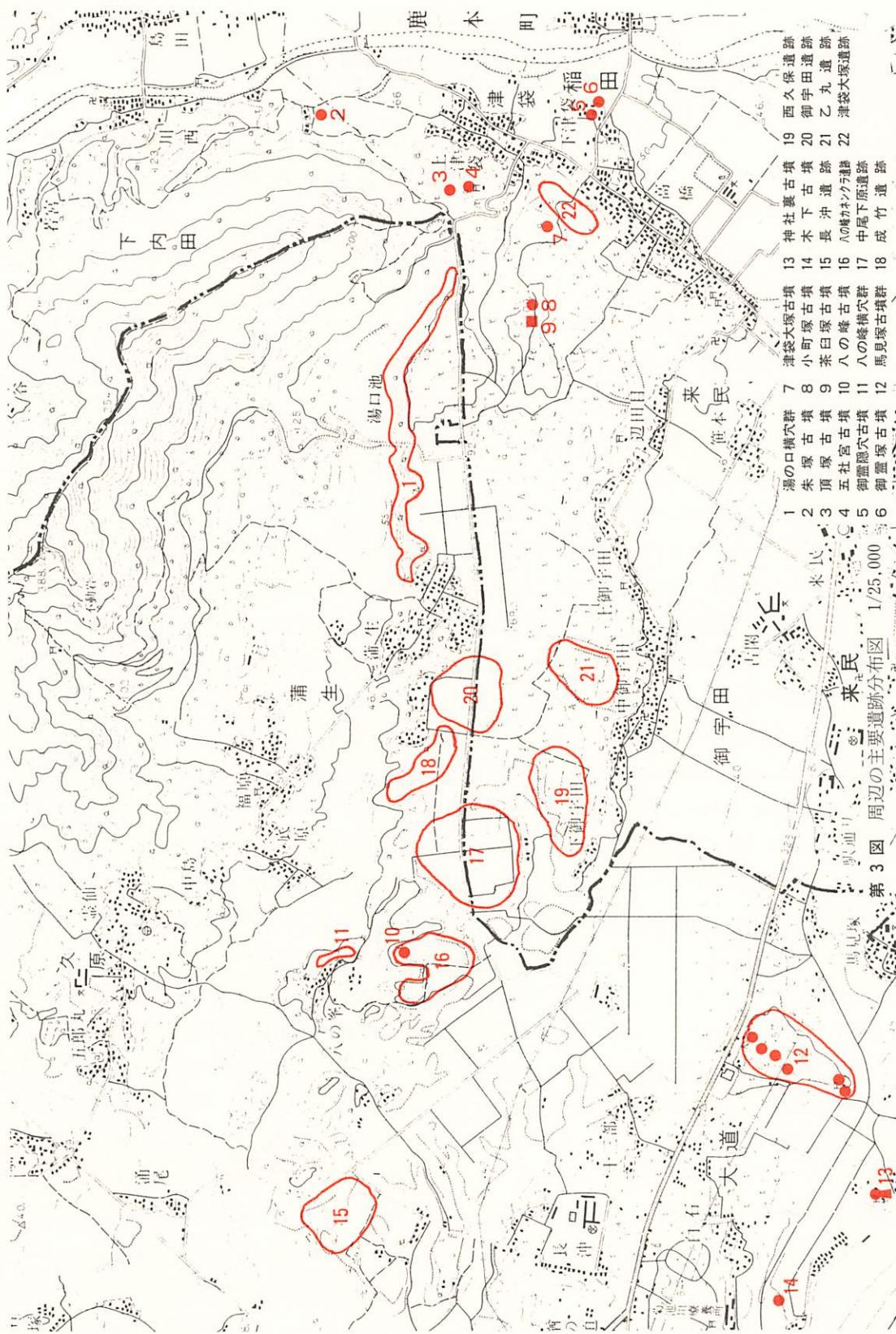
台地中央部は、ほぼ平坦で、台地北側と南側に僅かに谷が形成されている。ここは山鹿市の蒲生と鹿本町の御宇田の集落に挟まれた地域で、裾部には湧水池も多いところから、旧石器時代から弥生時代にかけての遺跡が多く見られる。旧石器時代の遺物を出土した蒲生下原遺跡は、台地北寄りで、蒲生の西側にあたる。ここからは縄文時代早期の押型文土器と後期、晩期の遺物も数多く出土

している。成竹遺跡は、蒲生の集落の西側を中心に広がる遺跡で、ここからは縄文時代の早期と後期の遺物を主に出土し、その中には蛇頭土製品が見られた。^{註1} 中尾下原遺跡は、蒲生下原遺跡の南側に位置し、弥生時代中期の甕棺群である。この中には銅戈片が1点出土している。さらに小さな谷を挟んで南側には西久保遺跡があり、弥生時代後期の遺物が出土している。現在、圃場整備事業に伴い県文化課の手によって発掘調査が進められており、住居跡等遺構の検出も行われている。

台地西側は、標高60m～40m程度で、複雑に谷が入り込んでいる。ここは山鹿市大字久原字八の峰と一部大字古閑字長沖とにまたがった地域である。ここも旧石器時代の遺物が出土する長沖遺跡^{註2}がある。この遺跡は淡水産貝塚を有し、縄文時代早期の押型文土器と、弥生時代終末の住居跡が検出されている。この遺跡から東に寄った位置に、八の峰遺跡がある。ここは工場建設に伴い、昭和61年1月から3月初旬まで調査された遺跡で、縄文時代早期の押型文土器、後期の北久根山式土器、さらに弥生時代後期の集落、古墳1基、中世地下式横穴等の遺構が検出されている。この遺跡の北側の崖面には八の峰横穴群があり、湯の口横穴群の西側に位置している。このように御宇田台地は全域で古くから人々が生活した痕を残しており、今日まで引続いているのである。また、台地周辺においても重要な遺跡を数多く見ることができる地域である。

註1 隈昭志「熊本県成竹出土の蛇頭型土製品」『考古学雑誌』57巻4号 1973

註2 平岡勝昭「熊本県発見の無土器文化資料の一例」『熊本史学』第19、20合併号 1960



3 図 周辺の主要遺跡

III 調査の成果

1. 横穴群の範囲と分布の概要

横穴群の分布については、先に述べたようにその実態が把握されておらず、溜池の中に開口する横穴と堤防より西側の崖面に開口する横穴が、全てであろうと考えていた。しかし、今回の調査では溜池東側の山中に、かなりの数の横穴が存在していることが判明し、現在196基を確認することができ、このうち53基の横穴については実測を終了することができた。

横穴群の範囲については、東は御宇田台地基部の鳥越峠の西側から始まっている。行政区は山鹿市大字蒲生字湯の口の東端部で、馬の背越になっていて、ここが鹿本町との境界である。この西側の谷に面した崖面に横穴が見られ、1号横穴とした。横穴群の在る崖面は、単純に一面とはならず溜池堤防までに大小16の谷を形成している。

さらに堤防西側には5の谷を見る事ができる。これらの谷の全てに横穴を確認することができ、1号横穴の在る谷は、溜池堤防から東に直線で640mを測る。西端部の横穴は、蒲生の集落の直下まで達しており、堤防から西に490mの地点である。全体的には溜池を中心として弧状を呈し、東西端部は直線で1km強の範囲で、横穴群を確認することができた。なお実際の崖面の総延長は2km以上に達すると思われる。

横穴群の配置図は、現場での作成が困難を極めたため見取図的性格が強くなってしまった。特に地形図は谷の状態が複雑で、第2図に示したものでは現地の状況を伝えきれていない。そこで横穴の配置について東側から概観していくこととする。

堤防の東側に在る谷は16を数えるが、これらの谷の左右には、腕のようにならだかな尾根を伸ばしている。横穴の多くは、この尾根の周辺に存在し、谷の最奥部では崖崩れを生じたためか開口している横穴は少なく、埋没状態で確認できたものが多い。なお尾根の周囲においては、基本的に谷に面している所で区分し、場合によっては先端部は後の谷に含めて記載する。

東端の谷と次の谷には、1号横穴から17号横穴までが、標高100m～110mといった谷の上位に存在している。これらは3～4基がまとまって存在し、それぞれ2～3mの高低差をもって4段にわたり構築されていた。3番目の谷では、左右の尾根裾部と谷最奥部に18号横穴から26号横穴までが存在し、4段にわたって見ることができるが、横穴はいずれも個別に存在している。次の谷では、前の谷の尾根裾部と連続する形で、27号横穴から41号横穴が見られる。ここでは左右尾根裾部を中心に分布しており、3段にわたって構築している。5番目の谷では、尾根の上位と谷奥壁の上位とに、42号横穴から51号横穴、さらに56号横穴から58号横穴までが谷に面して存在する。これらは、4段にわたり崖最上部から裾部近くまで分布している。5番目と6番目の谷の間の尾根にが、最も多く分布している。ここでは、52号横穴から54号横穴が最も高い位置にあり、その下段に55号横穴、さらに1段下に59号横穴から64号横穴が存在している。この列の直下に60-B号横穴1基が、埋没の



状態にあるのを確認できたため、他にも同レベルで横穴が存在するものと推察された。最下段には、65号横穴から72号横穴が開口しており、これらは戦前軍隊によって倉庫として利用されたとの話を古老から聞いている。谷の奥壁上部には、73号横穴と74号横穴が上下に存在している。7番目の谷にも、奥壁上部に75号横穴から79号横穴が存在している。8番目の谷は、左右尾根裾部のみに見られ、東側の尾根には78号横穴から87号横穴が3段、西側では88号横穴から99号横穴が並んで存在している。この谷は、溜池の東端部に接している。9番目の谷では、奥壁最上部に2段にわたって95号横穴から97号横穴が確認されたに過ぎず、分布状態も疎になってくる。10番目の谷では、僅かに98号横穴が1基尾根裾部に存在するのみである。次の谷からは、溜池に面する101号横穴から106号横穴と112号横穴から115号横穴が、上下2段に開口しており、それらの上段には99号横穴と100号横穴、さらに107号横穴から111号横穴が2段にわたって存在している。この横穴に接して117号横穴から119号横穴が並び、12番目への谷へと続いている。この谷の西側尾根の裾部に、120号横穴が1基存在し、周辺からは、横穴の確認はできなかった。13番目の谷でも、3基しか見られず、尾根の基部に121号横穴、溜池に面した尾根先端に122号横穴と123号横穴が並んで存在する。124号横穴と126号横穴は、同じ尾根の西側に並んでおり、14番目の谷の東側に位置する。この谷は浅くて崖面が垂直に近く、僅かに谷奥で126号横穴を1基確認できた。これから西側へは溜池に面して崖面がそり立っており、僅かに小さな谷として、15番目から16番目の谷が見られる。ここには127号横穴から147号横穴が存在し、3段から、所によっては4段にわたって横穴が存在している。これらは毎年水中に没するため破損がひどく、その多くは羨門を欠いている。

溜池堤防の西側には、大きな谷が3、小さな谷が2つあり、尾根の多くは崖がそり立った状態であった。1番目の大きな谷は、堤防に対峙して尾根が伸びている。この堤防の斜面においては148号横穴から153号横穴が存在している。ここは人工的な堤防と考えていたが、実際に藪の中に分け入ってみると、尾根を利用して堤防を築いているため、横穴6基が開口している。この尾根と次の尾根の間には、2基が存在しているに過ぎず、谷の最奥部と尾根裾部に154号横穴と155号横穴が在る。これより西側は尾根が大きく張り出しており、横穴の確認はできなかった。2番目の大きな谷には左右の尾根づたいに156号横穴から158号横穴が確認された。ここから西には、小さな谷を1つ挟んで崖面がほぼ一直線に約180mの長さで伸び、この上位に159号横穴から189号横穴までが開口していた。190号横穴から196号横穴までは、蒲生の集落北側に位置し、先の横穴との間には大きな谷を1つ挟んで直線で170m程離れて存在している。この地域で標高60m程度の高さに位置しているようである。

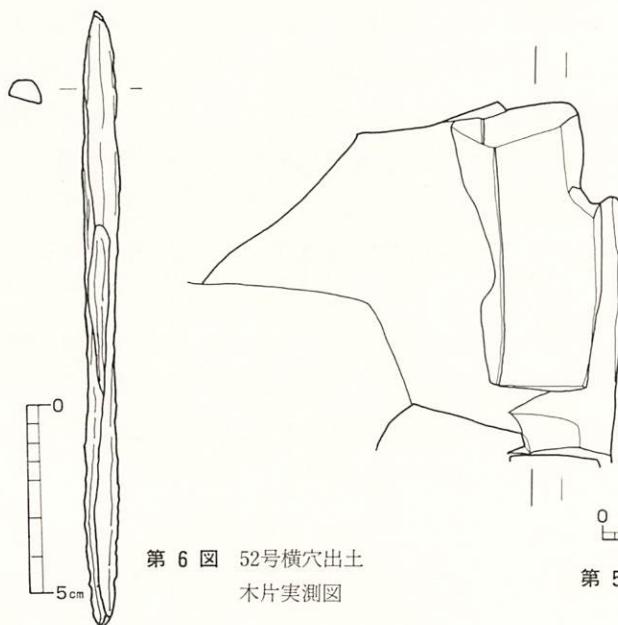
このように横穴群の分布状況は谷によって大きく異なっていることが判る。これは本来の分布状況では無く、崖壊れ等の自然環境の変化に伴なって生じた分布であり、今後の調査を実施することにより湯の口横穴群本来の姿を現わすことができるのである。その意味では今後の調査に期待する点は大きいと言えよう。

2. 横穴と遺物

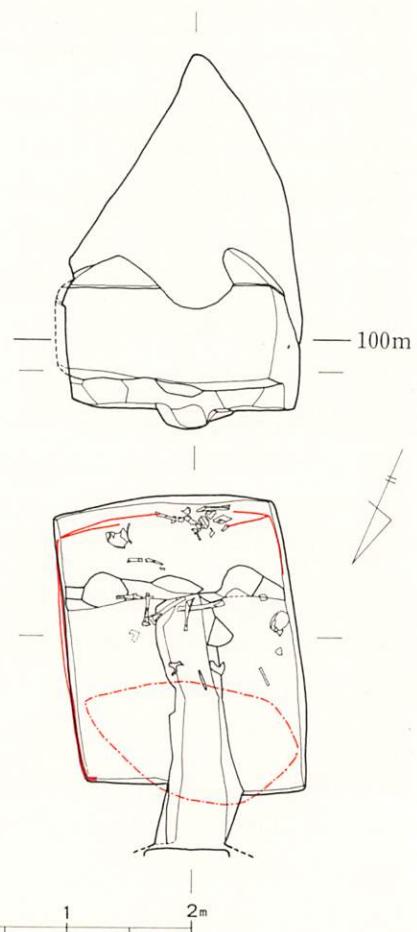
52号横穴（図版2第5図）

標高100mの狭いステップに位置し、崖面下端より約20mの高さに立地している。隣には53、54号横穴が並んで存在する。主軸はN24°Wをとるが、羨門と玄室の方向が異なり、「く」字状に折れる格好である。北北西に向って開口する。羨門には凝灰岩切石の閉塞石を残していて、盗掘の跡は見られなかった。しかし、岩盤が軟弱な凝灰岩のため天井部の崩壊がひどく、玄室内には土砂が厚く堆積し、羨門上部が開口する形となっていた。羨門部は上部と左側を崩し、不整形なアーチ形をしていた。羨門から玄室までは約50cmを測る。玄室は長方形を呈し、壁面はほぼ直線に掘られている。玄室幅185cm、奥行232cmを測る。屍床は「コ」字形で仕切は無く、一部破損している。左右の屍床では幅に差が見られ、幾分右側屍床が狭く造られている。これは、右側屍床を造る際に、すでに右側に隣接する53号横穴が存在しているため規制が加わったものと考えられた。天井の大部分は落ちているが、切妻造で妻入りになるとされる。前庭部については未調査である。

遺物（図版1-6、第6図） 右側屍床より土師器小片1点が出土したが、排土中に紛失した。他に木片1点が出土した。この木片は通路埋土中より出土したもので、後世に於ける混入の可能性は少ない。全長16.3cm、幅1.05cm、厚さ0.72cmで両端を尖らせている。木芯を除いた部



第6図 52号横穴出土
木片実測図



第5図 52号横穴実測図

分で加工し、全体に仕上げは粗く、両端のみが丸味をおびて尖っている木は年輪界が明瞭で炭化していた。木質は広葉樹で種の判定は出来なかった。さらに、人骨3体分が検出された。奥屍床に一体分（1号人骨）、右屍床に一体分（2号人骨）、左屍床から通路上にかけて1体分（3号人骨）を出土した。特に通路の人骨は、通路埋没後安置されており、横穴天井部が追葬の段階から剝落していたものと推察された。1、2号人骨も頭骨の方向から移動していると考えられた。

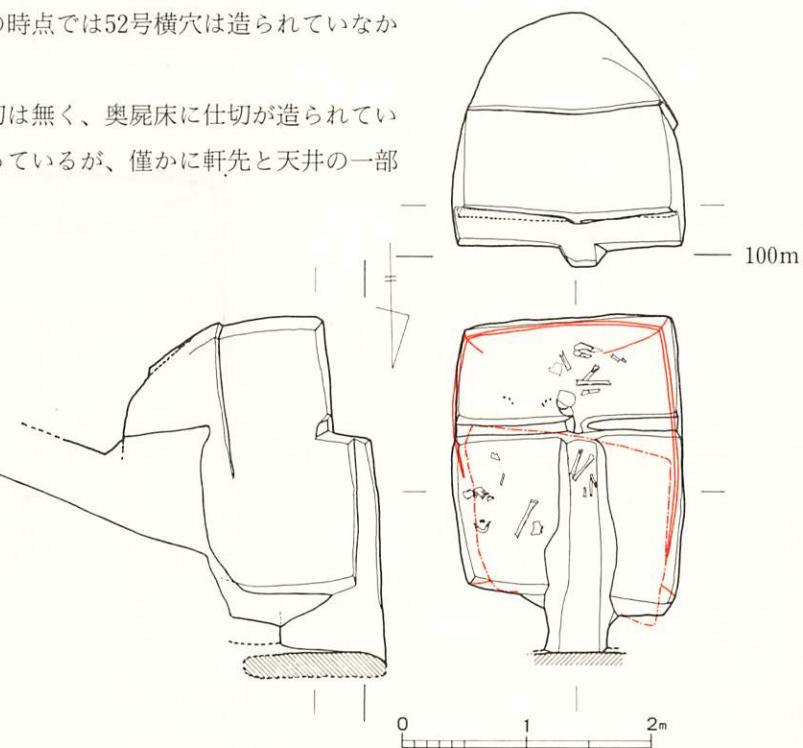
註1 熊本大学教育学部助教授 大迫靖夫氏の鑑定による。

53号横穴（図版3.4-1～2第7図）

52号横穴と共に標高100mの小さなステップに立地し、52号と54号横穴の間に位置する。主軸はN1°Wと、ほぼ南北に向け、北に向って開口する。アーチ形をした羨門には凝灰岩切石の閉塞石が立っている。この横穴も52号横穴と同じく、天井の落盤がひどく、埋土も厚く堆積し、羨門上部が開口する形となっていた。羨門から玄室までは50cmを測る。玄室は長方形を呈しており、壁面は僅かに曲線を描いている。幅187cm、奥行220cmを測る。通路を中心に、左右の屍床の幅が異なり、奥屍床も幾分左に寄った形となっている。更に、左右の側壁でも長さに差が見られる。この横穴もコ字形屍床で52号横穴と同じく、玄室右側が未発達の状態であることは、53号横穴を造った時には、すでに54号横穴が存在していたものと考えられた。左側の屍床は十分に広さを確保しており、この時点では52号横穴は造られていないかったものと判断できる。

なお、左右の屍床には仕切は無く、奥屍床に仕切が造られていた。天井の殆どを落盤で失っているが、僅かに軒先と天井の一部を残していく、ドーム型をしていたことが判る。前庭部については未調査である。

遺物 副葬品はないが、人骨4体分が出土した。奥屍床に1体（1号人骨）、左屍床に2体（2号A・B人骨）を安置し、通路にも1体（3号人骨）が置かれていた。これらは、いずれも原位置を保っていなかった。恐らく追葬の段階で移動したものであろう。



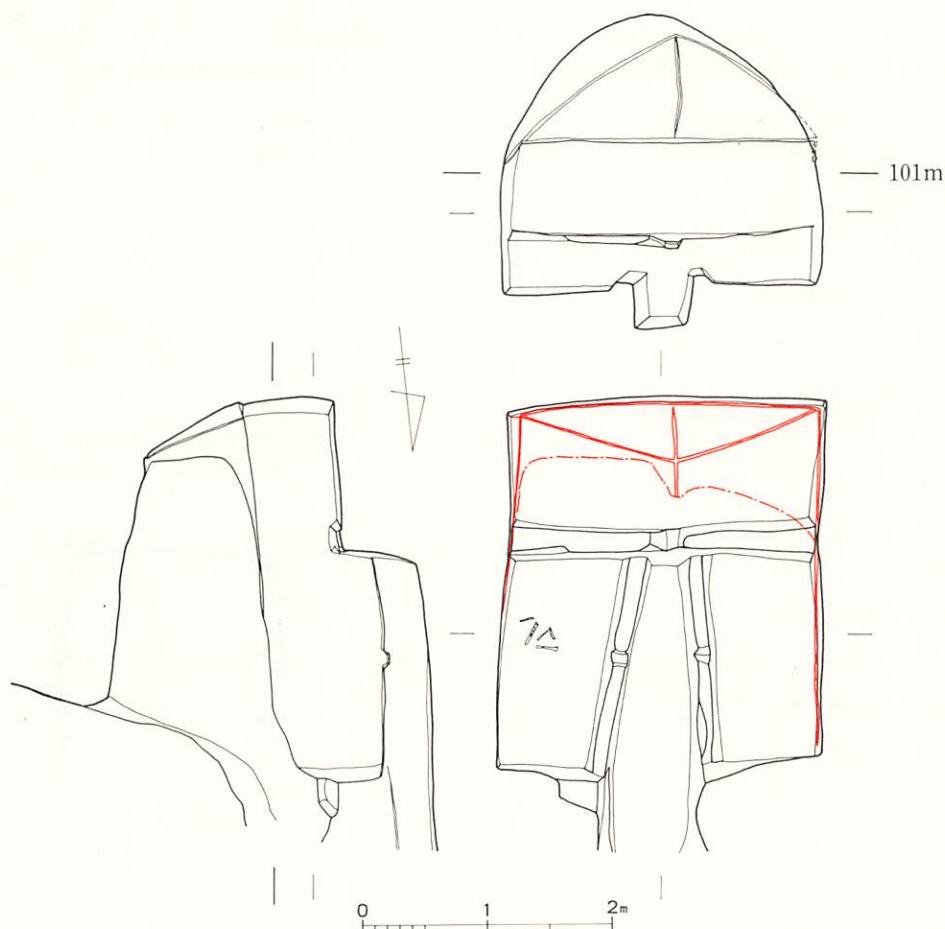
第7図 53号横穴実測図

54号横穴（図版4-3.5第8図）

52、53号横穴の右側に位置している。主軸はN 6°Eに向けており、ほぼ北に向って開口する。羨門については未調査で、現段階では閉塞石は確認できなかった。52、53号横穴とともに、ここにも天井部の落盤がひどく、羨門上部が開口していた。玄室には奥屍床が顔をのぞかせる程度に埋土が堆積していた。

玄室は直線的な壁面で長方形を呈し、幅260cm、奥行297cmを測る。52、53号横穴に比べると多少大きくなっている。屍床は「コ」字形を呈し、通路の高さに比べると左右の屍床が高く造られ、奥屍床は更に一段高く、通路から60cmの高さを測る。それぞれの屍床には仕切を造り、ほぼ中心に排水溝を刻んでいる。天井の殆どを落盤で欠いているが、切妻造で妻入りである。奥壁に軒持柱を陰刻している。前庭部については未調査である。

遺物 副葬品は玄室内では無く、左屍床から人骨が出土したが、保存状態は悪い。



第8図 54号横穴実測図

57号横穴（第9図）

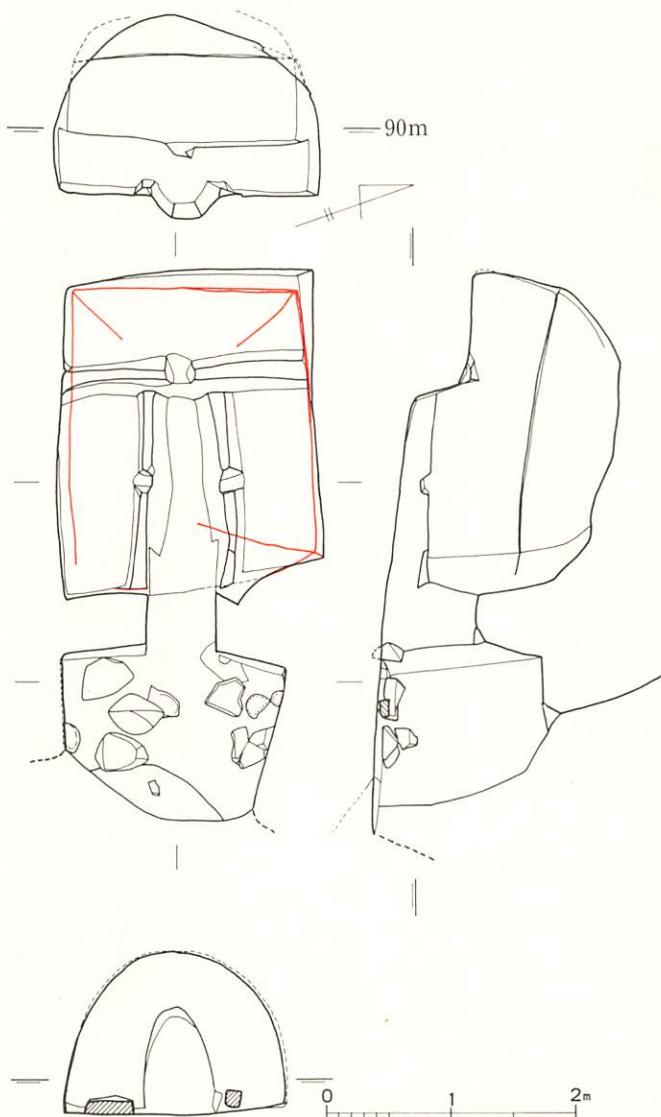
52号～54号横穴が存在した地は北に伸びる尾根の西側斜面であった。57号横穴はこの尾根の東側に位置し、標高90mと約10m低い位置である。このレベルで尾根を取り囲むように狭いステップが細長く伸びており、この段には他にも10基近くの横穴が確認されている。

主軸はN71°Wをとり、東南東に向って開口する。羨門はアーチ状を呈し、高さ74cm、幅54cmを測り、玄室までは50cmを測る。前庭部には凝灰岩の礫が散在しており、閉塞石の根固めに使用していたものと推察された。玄室は長方形を呈し、入口部分で幅210cm、奥壁196cm、奥行き255cmを測る。壁面は直線的である。屍床は「コ」字形で仕切を有しており、仕切の中央には排水溝を刻んでいる。奥屍床は、左右の屍床に比べ約40cm程高く、羨門天井と同じ高さに造られている。天井の殆どを剝落しており、その部分には樹根と毛根が張り付いていた。僅かに残った軒先線等から寄棟造で、妻入りとなっていた。

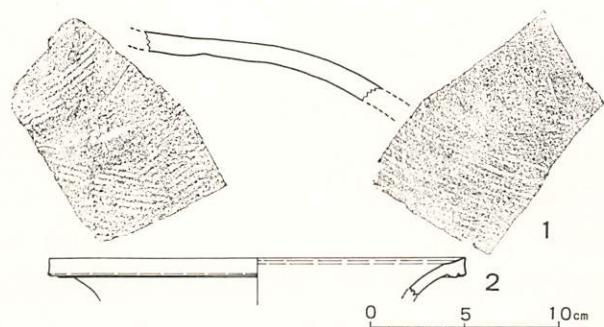
遺物 副葬品は前庭部より須恵器が2点出土したのみである。

須恵器（第10図1・2）

1は平瓶の破片で肩部から頸部にかけてのものである。表面には叩き後轍目を残している。器形としては大き



第9図 57号横穴実測図



第10図 57号横穴出土遺物実測図

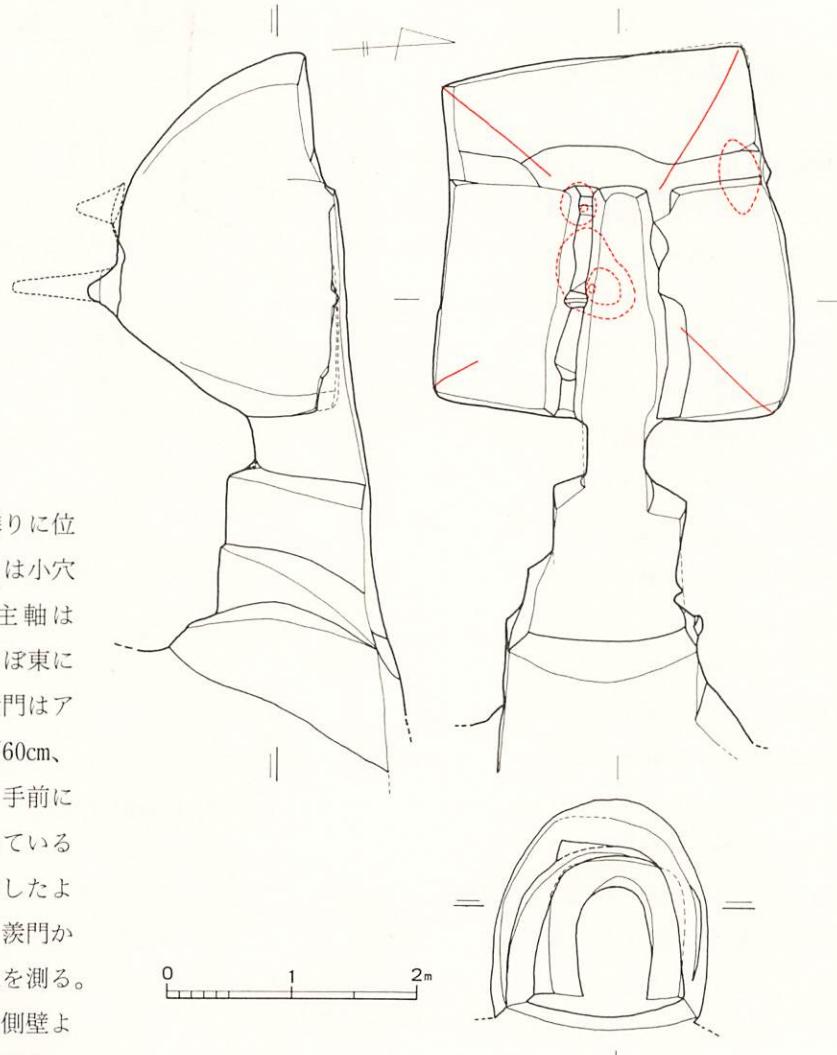
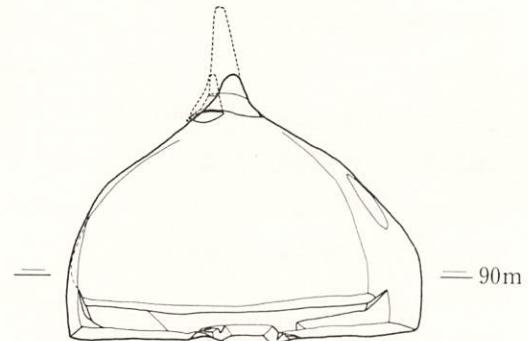
くなるようだ。2は口縁部の破片で甕になる。直径22cmになり、口唇部を内側に摘み上げ、下部は肉厚となり凸帯を直下にめぐらしている。全体に轆轤目を残している。胎土には砂粒を僅かに含み、茶褐色をしている。

その他の遺物

さらに奥屍床右側から、人歯数本が出土した。

のことから、

奥屍床では右側に頭を置き、左側に足を伸ばして死体を安置したものと判断された。



58号横穴

(第11図)

57号横穴の北隣りに位置し、59号横穴とは小穴で接している。主軸はN86°Wにとり、ほぼ東に開口している。羨門はアーチ状をなし、幅60cm、高さ85cmを測る。手前に二重の飾縁を造っているが、右側では退化したようになっていた。羨門から玄室まで約55cmを測る。玄室は右側壁が左側壁より約50cm長く全体に左へ曲線を描くように造られ

第11図 58号横穴実測図

ている。そのため奥壁も羨門に対し直角にならず右側が奥に入った形となっており、入口部分幅271cm、奥壁243cm、奥行238cmを測る。内部は破壊がひどい。そのため「コ」字形の屍床にはそれぞれ仕切が造られていたが、僅かに左側屍床の一部のみが原形を保っているに過ぎない。特に奥屍床で

は仕切の痕跡が壁面に残っているのみで全てを欠いていた。

天井はドーム状を呈し中心に2個の孔が穿っている。孔は直径35cm、深さ70cmの孔と、直径35cm、深さ30cmの孔で、先端に向って細くなり、円錐状を呈している。

右側壁には59号横穴と接する穴が開いていた。そのため59号横穴は未完成となっていた。

遺物 須恵器破片が少数出土した。須恵器は大型壺の破片が9点と壺蓋受部分が1点、赤焼けの大壺破片3点、中世瓦質土器の擂鉢片が出土した。尚図化するには破片が小さかったので、図化しなかった。

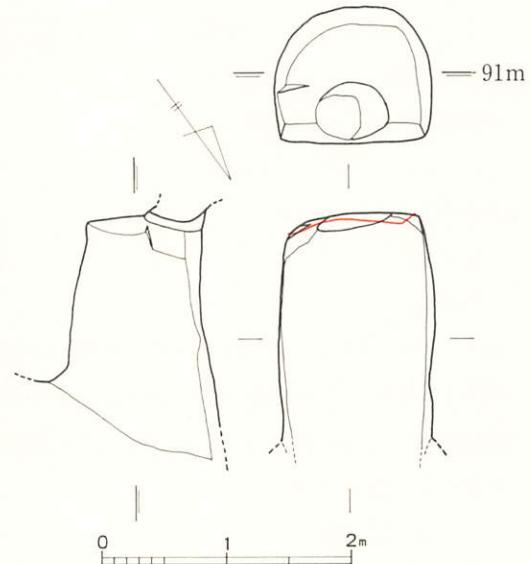
59号横穴（第12図）

58号横穴の北側に位置し、58号横穴玄室右側壁と奥壁が直径60cmの穴で接しており、未完成の横穴である。主軸はN36°Eに向け、南東に開口している。羨門は無く、幅125cm、奥行約200cmを測る。プランは長方形だが、奥壁は隅丸に近い。この横穴は床面の凹凸が顕著で、規模が小さい。更に奥壁左端の調整が不十分であり、奥壁には58号横穴を穿った穴が残っているところから、作りかけの未完成の横穴であると考えた。その理由については、レベル的には58号横穴より高い位置に在り、開口する方向が尾根を挟んで直角に変わるため、58号横穴の存在に気がつかず掘り始めたものと判断された。そのため、約2m掘り進んだ時点で58号横穴と接したため中止の已むなく至ったものであろう。天井はカマボコ形をしている。遺物が数点出土しており、あながち未完成の横穴といつても、未使用であったとは断言できない横穴である。

遺物 須恵器、土師器が床面より10cm程の高さで、出土している。

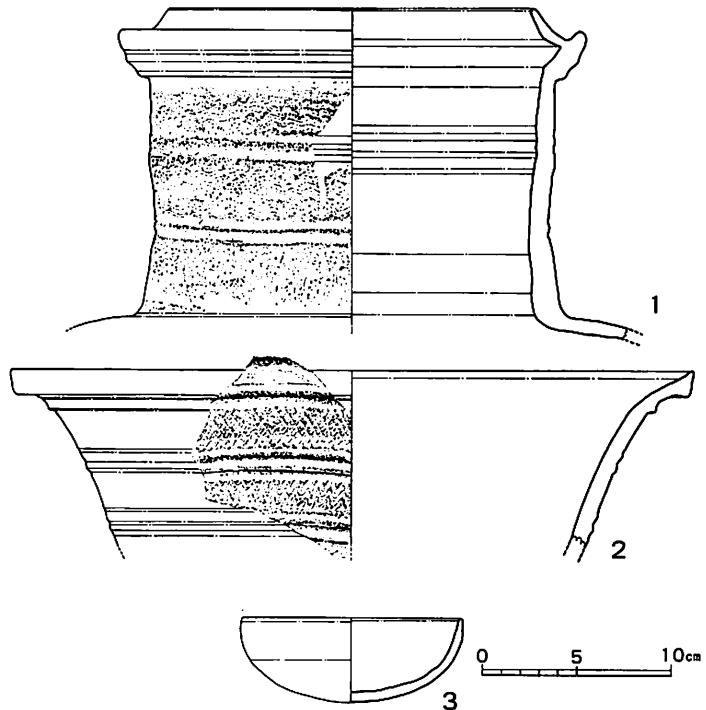
須恵器（図版11-7 第13図1~2）

1は有蓋壺の破片で、口縁部から頸部にかけて残っている。この横穴からは口縁部のみが出土していたが、63号横穴と69号横穴から口縁部及び頸部が出土し、同一個体であることが判明した。そのためここで一括して記するものである。63号横穴と69号横穴は比高差7mの上下関係に在り、恐らく63号横穴から転落したものと推察される。しかし、59号横穴と63号横穴はほぼ同レベルで東西に15m程離れており、人為的に分けて置かれたものと考えられる。壺の頸部はほぼ直立し、口縁部との間には二本の凹線と櫛描波状文を二段めぐらしている。口縁部は外反し、中位から蓋受が内傾する形で付いており、口径は19cmを測る。器面には自然釉が付着しており、頸部は輜轆仕上げで、



第12図 59号横穴実測図

胴部内面は叩き目が残っている。胎土には砂粒を含まず、明灰色をしている。2は大型壺の口縁部片である。口径36cm、口縁部は朝顔状に大きく開いている。口唇部は山形に摘み上げ、断面は三角形を呈している。口縁部直下には三角凸帯を1本めぐらし、2.5cm下には2本の凸帯、さらには2.1cm下にも2本の凸帯をめぐらし、それらの間には櫛描波状文を描いている。胎土には砂粒を含まず、焼成はあまり良くない。そのため中心部は淡褐色、表面は灰色をしている。



第13図 59号横穴出土遺物実測図

この他に、図化し得なかつたが、平瓶の破片が見られたため、特徴のみを記しておく。この平瓶の破片は、口縁部の一部と胴部の一部を残すのみである。口縁部は、僅かに開き気味に直口し、口唇部は丸味を帶びている。器面調整は、外面はカキ目を、内面にはナデ調整を施している。胎土には僅かに砂粒を含むが、焼成は良好で、暗灰色をしている。

土師器（第13図3）

3は土師器の坏で、直径11.7cm、器高4.4cmになる。口縁部は直口し、器壁は厚い。底部は丸底で安定感が少なく、器面は全面ヘラ研磨で仕上げている。胎土には砂粒をあまり含んでおらず、焼成は良好、色は茶褐色をしている。

61号横穴（第14図）

59号横穴の西側に位置し、60号横穴を挟んで存在する。60号横穴は埋没しているため未調査。この横穴は59号横穴より約2m程低い所に存在し、これから64号横穴までは、ほぼ同レベルに存在している。主軸はN51°Eに向け、ほぼ北東方向に開口する。羨門はアーチ形をし、幅76cm、高さ94cmを測り、二重の飾縁を造る。前庭部から羨門まで3mを超える。また玄室までは60cm程度を測る。玄室は入口部分の幅が246cm、奥壁幅180cm、奥行294cmを測り、隅丸台形を呈している。屍床は「コ」字形をしているが、破損がひどく、仕切については奥屍床右端に僅かに痕跡を残しているのみであ

る。左右屍床には仕切は見られず、右側には「L」字形の溝が掘り込まれていた。天井はドーム状をなし、170cmの高さを測る。なお中央部に直径45cm、深さ50cmの円錐状の孔が穿たれている。

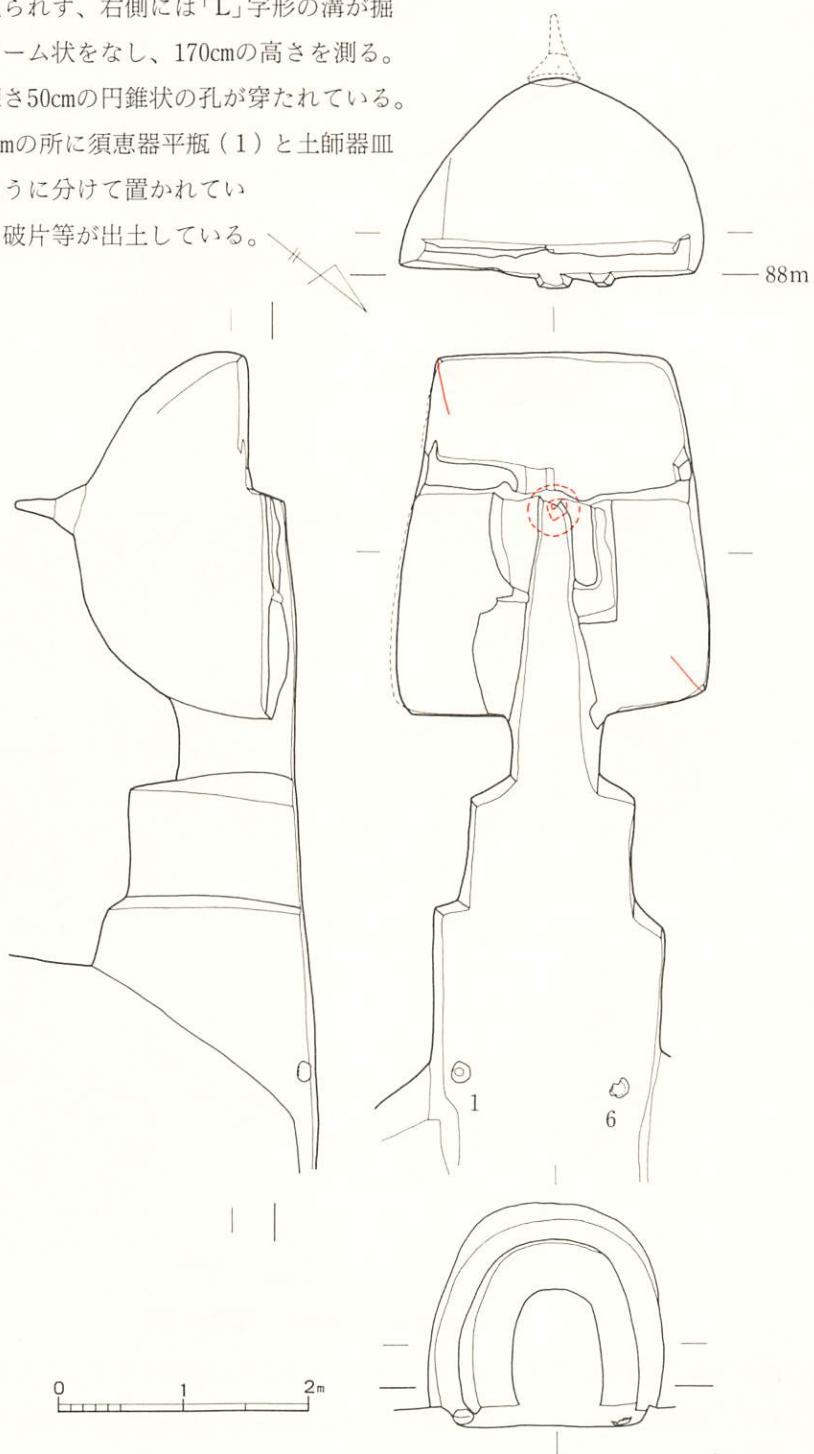
遺物 羨門から外へ250cmの所に須恵器平瓶（1）と土師器皿（6）を左右対称になるように分けて置かれていた。横穴内部からは大甕の破片等が出土している。

須恵器（図版11-8第

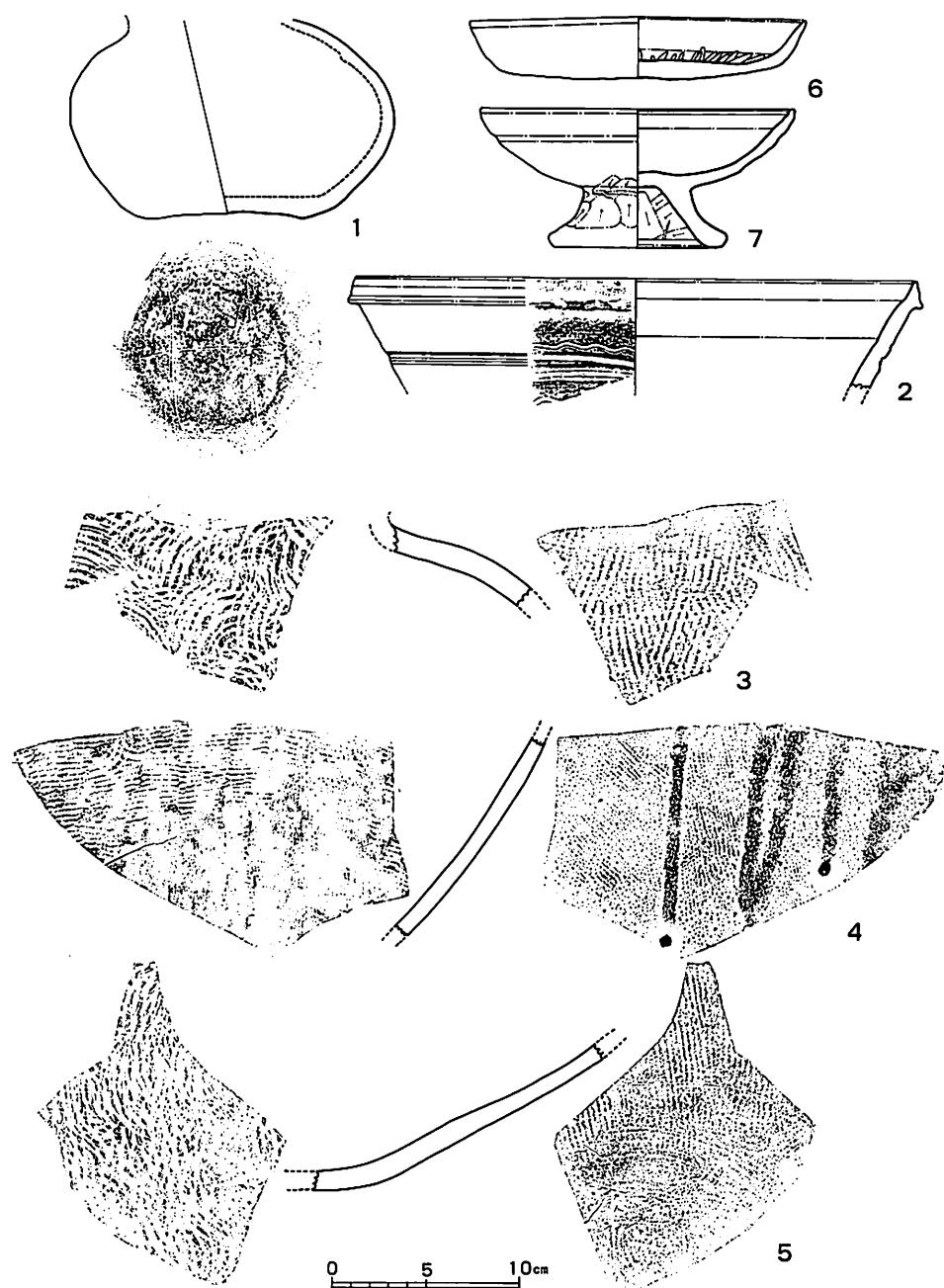
15図1～5）

1は羨門左側から出土した平瓶である。口縁部を欠いているが、胴部は完全な形で残っていた。現高10.6cmで、最大径17.4cmは胴部中位に有している。器面は全面ナデ調整だが、僅かに肩部で叩き目の跡を残している。胎土には砂粒を含み、焼成も良くない。明灰色をしている。底部にヘラ記号を有している。2～5は、横穴内埋土中より出土した大型甕の破片である。2は口縁部のみで口径が30cmになる。口唇部は摘み上げ、断面が三角を呈しており、直下には櫛描波状文と沈線をめぐらしている。器面はナデ調整で、胎土には砂粒を含んでいる。焼成は良く、暗灰色をしている。3は肩部の破片で僅かに頸部の立ち上がりが残っている。

る。外面には格子目、内面には青海波状文を残し、胎土には砂粒を含んでいる。焼成はあまり良くなく、明灰色をしている。4は脚部片である。胴部中位よりやや下に位置するものと思われる。器



第14図 61号横穴実測図



第15図 61号横穴出土遺物実測図

面は外面にカキ目、内面に叩き目を残し、外面には自然釉が5条垂れている。器壁は0.8cmと薄く仕上げ、胎土には砂粒を含んでいない。焼成は良く、黒色の光沢がある。5は底部の破片である。丸底で胴部へ大きく開いている。外面は叩き目の後ナデ調整を施し、内面には青海波状文を残している。器壁は0.9cm～1.3cmを測る。胎土には砂粒を含むが、焼成は良く、暗灰色をしている。

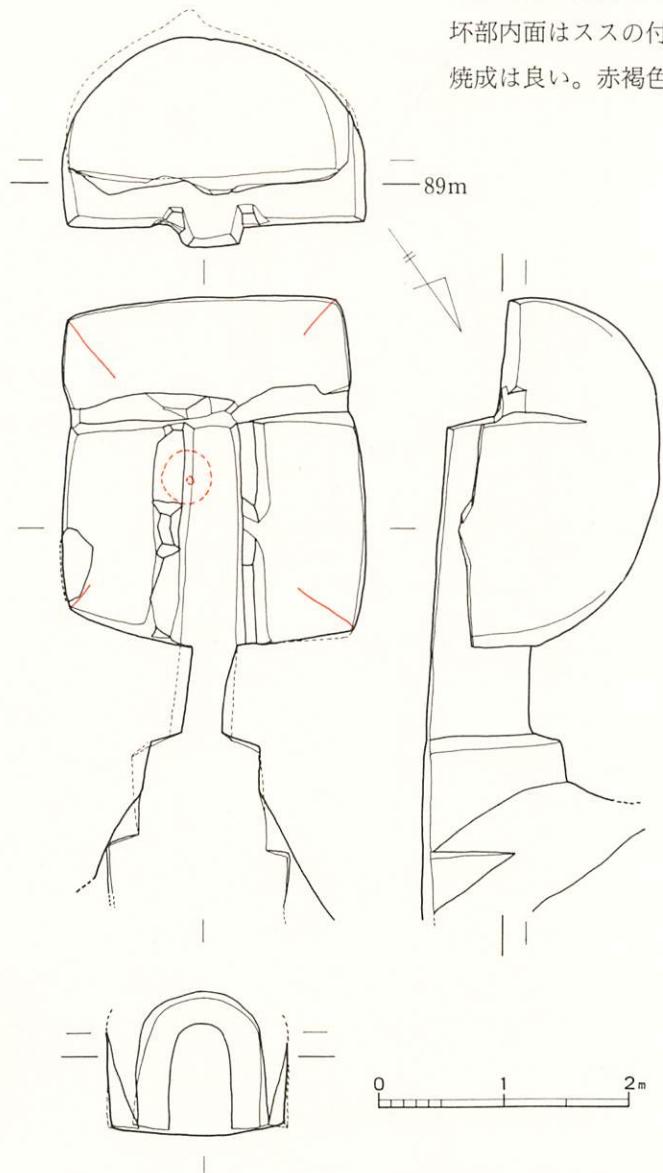
土師器（図版11-9 第15図6・7）

6は羨門右側から出土した土師器の皿である。口径18cm、器高3.2cmを測り、口縁部は外反しつつ

開き、口唇部は丸味を呈している。底部は平底だが、内側では僅かに盛り上っている。器面は底部外面がヘラ削りで、他はナデ調整を施し、特に内面はその後ヘラ研磨仕上げを行っている。器面には、内外面共にススが付着している。胎土には砂粒を含むが焼成は良い。茶褐色をし、一部に黒斑が見られる。なお底部には器面が剥離した中に、枠圧痕が見られるが、恐らく皿製作の段階で混入し、焼成の際破損したものと考えられる。このため土器製作の時期は、米収穫後に行ったものと推察された。7は羨門より外側で出土した土師器の高坏である。坏部の殆どを欠くが口径16.8cmになる。器高は7.3cmで、坏部と脚台部が3:2の比率となっている。坏部は内湾気味に大きく開き、口唇部は摘み上げて平坦になっている。脚台は小さいが、裾部に向って大きく開いている。器壁は厚

く、坏部は全面ナデ調整、脚台はヘラ削りを施している。

坏部内面はススの付着が見られる。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。赤褐色をしている。



第16図 62号横穴実測図

62号横穴 (第16図)

61号横穴の西側に位置し、61-6号横穴を挟んで存在する。主軸はN35°Eにとり、北東に向って開口している。閉塞石は見られない。羨門は幅53cm、高さ84cmでアーチ形をなし、飾縁を造っているが、前庭部近くでは多少自然崩壊していた。羨門から玄室までは75cmを測る。玄室は方形を呈し、入口部分幅240cm、奥壁幅238cm、奥行280cmを測る。壁面はやや曲線を描いている。屍床は「コ」字形で、仕切を造っている。仕切は一部破損しているが、中央部に排水溝を刻んでいる。62号横穴左側屍床に直径60cmの穴が開口しており、当初61号との間には横穴は確認できなかつたが、別の横穴の存在が明らかになった。そのため61-B号としたものである。なおこの横穴は右

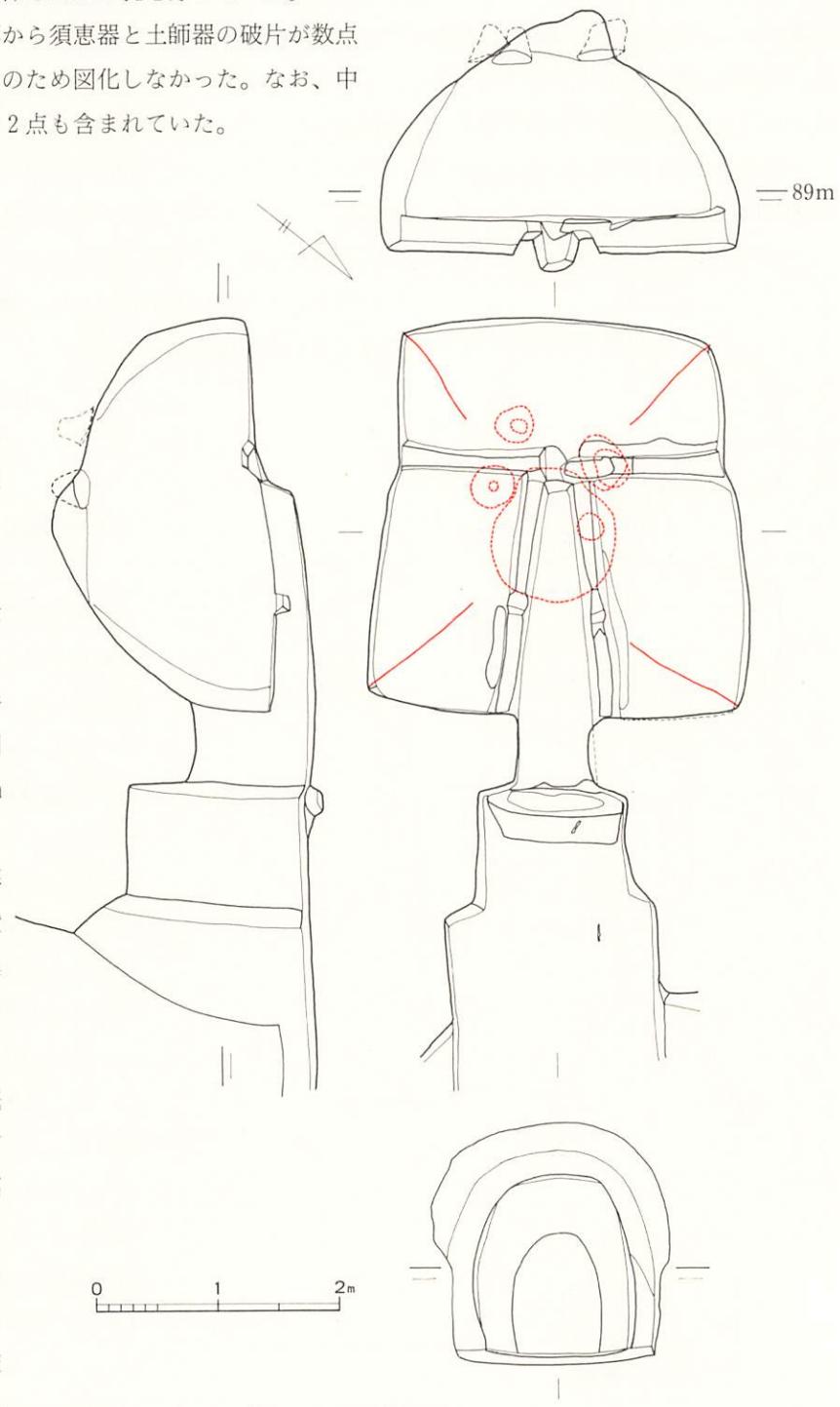
側天井部を開口しており床面のレベルは62号横穴より150cm程低くなるものと推察された。このことから更に一段低い位置に横穴の列が存在する可能性が大になったのである。天井はドーム状をなし、中央部に直径45cm、深さ13cmの孔を穿っていた。

遺物 羨門と内部から須恵器と土師器の破片が数点出土したが、小破片のため図化しなかった。なお、中に赤焼けの甕の破片2点も含まれていた。

63号横穴

(第17図)

62号横穴の西隣に位置し、64号横穴との間に存在する。主軸はN52°Eに向かって北東方向に開口していた。前庭部から羨門まで200cmを測り、飾縁をもつアーチ形の羨門である。羨門は幅74cm、高さ100cmで、玄室まで60cmを測る。床面には閉塞石を受ける溝が階段上に幅45cm、長さ114cm、深さ12cmにわたりて掘られていた。しかし、閉塞石は残っていないかった。玄室は入口部分で幅306cm、奥壁255cm、奥行327cmを測り、やや台形に近いプランを呈している。屍床は「コ」字形で、各屍床には仕切を造り、



第17図 63号横穴実測図

ほぼ中央に排水溝を刻んでいる。また、仕切は端部が反り気味に上っており、僅かにゴンドラ形に近くなっているようだ。玄室内では通路幅が狭く、屍床のスペースが大きいようである。天井はドーム形をなし、中央には大小4個の孔が穿たれている。大きいものは直径110cm、深さ28cmを測る。

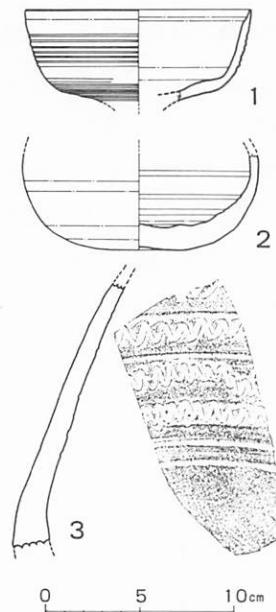
遺物 羨門部より須恵器高坏片と鉄器6点が出土した。そのうち4は閉塞石受けの溝より出土し、7は羨門右側飾縁近くから、それぞれ床面直上より出土した。横穴内からは須恵器大甕の破片わずかづつが、数個体分が出土している。

須恵器（第18図1～3）

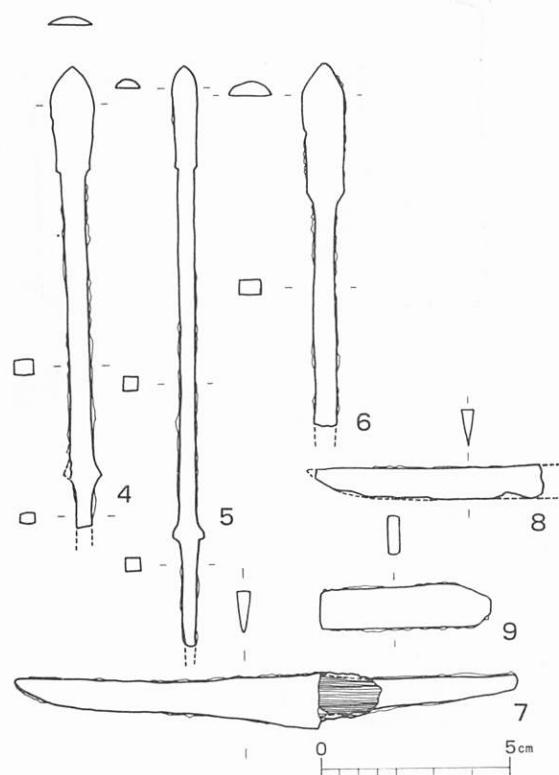
1は前部から出土した高坏の破片である。坏部のみであるが、口径12cmを測る。口縁部は直口気味に開き、口唇部は摘み上げている。外面には7本の沈線をめぐらし、脚部近くはカキ目を残している。内面は全面ナデ調整で仕上げ、器壁は薄い。胎土には砂粒を含まず、焼成は良い。青灰色をしている。2は横穴内より出土した壺の破片である。口縁部を欠くが、恐らく短頸有蓋壺になると思われる。器面は全面ナデ調整で、底部外面はその後ヘラ削りを行っている。胎土は砂粒を含まず、焼成は良い。暗灰色をしている。3も横穴内出土の大型甕の口縁部片である。口唇部を欠くため口径は不明。外面には凹線文と波状文を交互に4段めぐらしている。器面は全面ナデ調整で仕上げており、胎土には砂粒を含んでいる。焼成は良く、暗茶褐色をしている。この他にも、胴部破片が数点出土していた。なお、この横穴からは59号横穴出土有蓋壺（第13図）と同一個体の頸部が出土し、更に69号横穴から出土した破片とも同一個体であると判明した。そのため59号横穴で一括して取扱った。同一遺物を人為的に破損し、分けて入れている点は、今後の課題となければならない。

鉄器（図版11-10～15第19図4～9）

鍔（4～6）と刀子（7・8）と不明品（9）とが出土した。

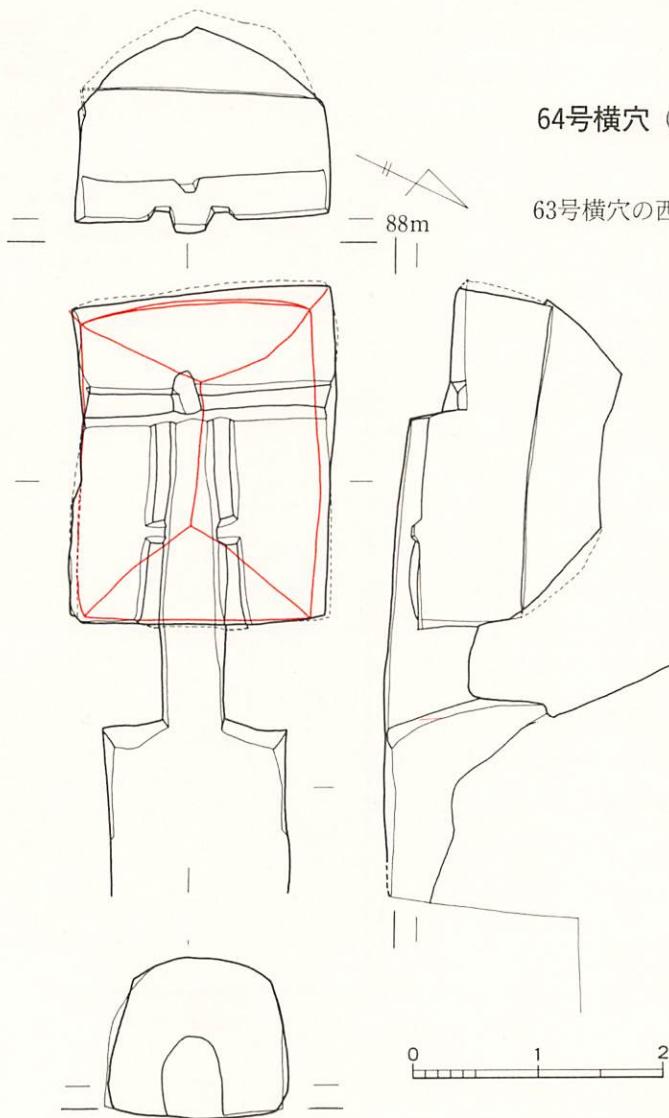


第18図 63号横穴出土
遺物実測図



第19図 63号横穴出土鉄器実測図

4は尖根式で、現長12.2cmを測る。茎基部を欠いているが、ほぼ完全な形をとどめている。籠被との間に棘突起を有し、籠被は5mm～6mm方形で、長さ7.7cmになる。関は小さく柳葉形の身へと続く。身は片丸造りで、長さ2.8cm、幅1.1cmになる。5も尖根式で現長15.3cmを測る。茎基部を僅かに欠くが、完全な形に近い。棘突起を有し、籠被は4mm方形で、長さ9.4cmを測る。関は小さく両側に有し、身は柳葉式で長さ2.7cm、幅0.6cmの片丸造りである。6も尖根式で現長9.6cmを測るが、籠被下位と茎を欠くため全長は不明。籠被は5mm方形で、関を両側に有している。身は圭頭式に近く、長さ3.5cm、幅1.2cmの片丸造りである。7は刀子で、全長13.3cmを測る。身は細く平造りである。茎には柄の木質が付着している。茎は長さ5.2cmを測り、関も残っている。8も刀子だが、腰以下を欠いている。身は平造りで、現長6.1cmを測る。9は用途不明の鉄器で現長4.5cm、幅1.1cm、厚さ3mmを測る。刃部は形成していない。



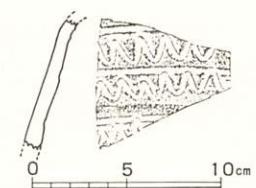
第20図 64号横穴実測図

64号横穴 (第20図)

63号横穴の西側に位置し、この段に在る横穴では西端部に当る。ここは52～54号横穴の直下にあたり55号横穴が中間に位置する。主軸はN63°Eをとり、東北東に向けて開口していた。羨門には飾縁をもたず、閉塞石も見られなかった。また、他の横穴に比べても入口が小さく、幅48cm、高さ65cmのアーチ形をしている。それに比較すると玄室までは長さ80cmを測る。玄室は長方形をし、入口部分は205cm、奥壁208cm、奥行264cmを測る。壁面は直線で、コーナーも直角に近くなっている。屍床は「コ」字形をし、仕切を造っている。仕切にはそれぞれ排水溝を刻んでいるが、奥屍床では中心より僅かに左側に、左右屍床では入口側に寄った位置に設けている。

見方を変えると、通路延長線上に奥屍床仕切排水溝があり、屍床全体が左側を小さく造り、右側へ拡げたような格好である。左右対称に造られなかつた理由が存在するとすれば恐らく63号横穴が左側に在るところからその配慮が原因となるであろう。左右屍床の仕切は通路から15~18cm程度だが、奥屍床のそれは、45cmを測り、レベル的には羨門上端と等しくなっている。天井は寄棟造で、妻入りとなっており、軒先線も明瞭に残っていた。屍床と羨門の関係や、天井の構造、更に玄室プラン全体を見ても57号横穴と構造上の類似点を多く見出すことができる。

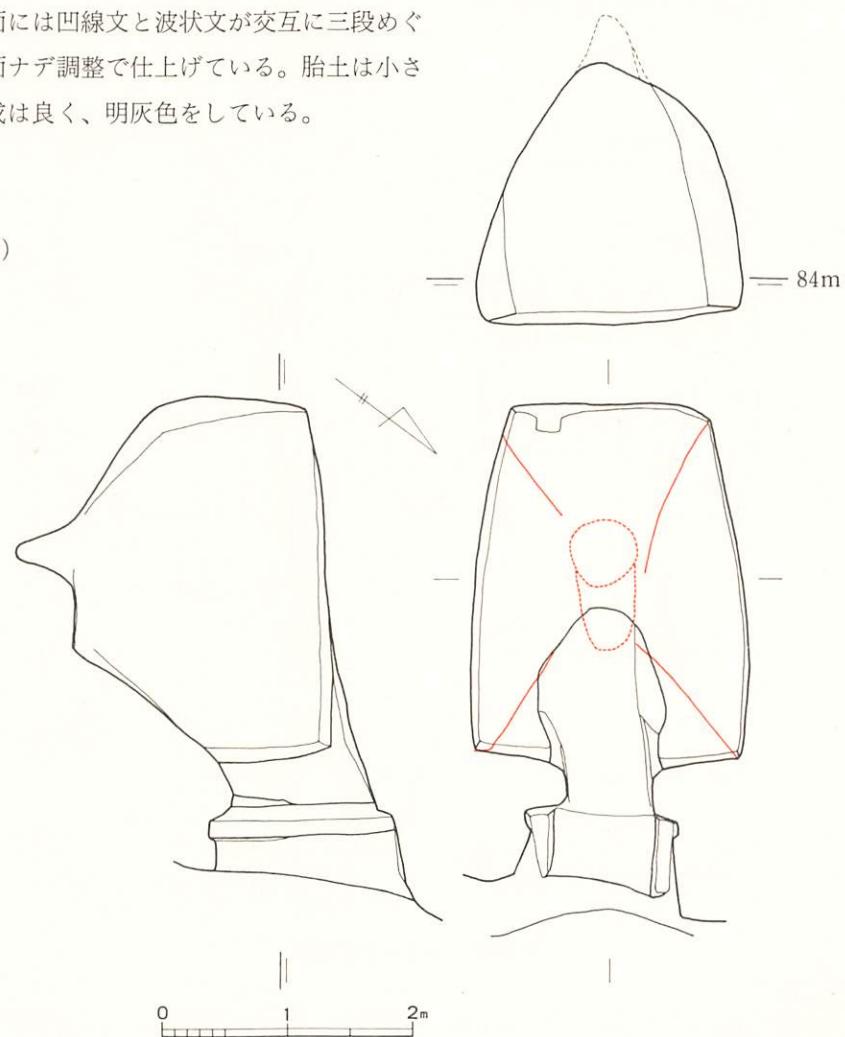
遺物 右側屍床の側壁寄りの地点から須恵器片が出土した。須恵器は大甕の口縁部片で周囲を欠き、口径等不明、表面には凹線文と波状文が交互に三段めぐっている。内面は全面ナデ調整で仕上げている。胎土は小さな砂粒を含むが、焼成は良く、明灰色をしている。



第21図 64号横穴出土
遺物実測図

65号横穴（第22図）

65号横穴から72号横穴までは、52号横穴から64号横穴が存在した尾根の裾部に存在する。古の話によれば、この附近一帯は戦前から戦中にかけて軍隊が使用していたとのことで、殆ど開口し入口部分や内部に手が加えられていた。65号横穴はその東端に位置している。主軸を N54°E にとり、北東方向に開口していた。羨門は軍隊による加工

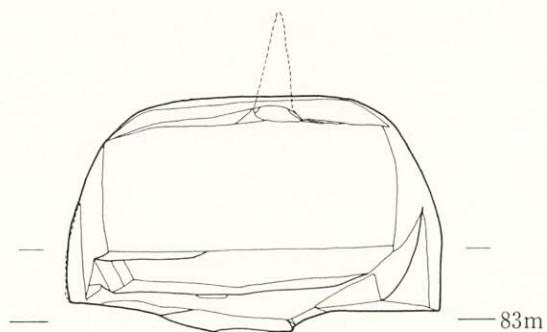


第22図 65号横穴実測図

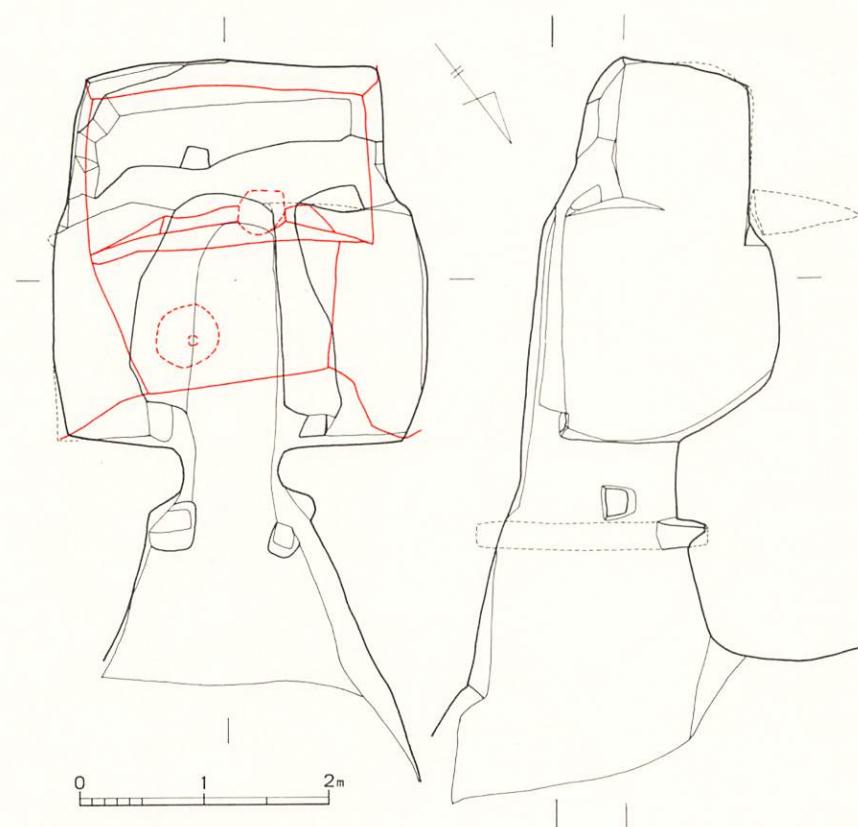
が著しく、アーチ形をした羨門の外側には、入口に扉を付けた時の掘り込みが見られた。羨門は幅69cm、高さ110cmで、玄室まで45cmを測る。玄室は、台形に近い長方形を呈し、入口部分で幅215cm、奥壁160cm、奥行280cmを測る。床面は全てを欠き、僅かに壁面にかつての屍床の痕跡を残している

のみである。それから判断すると、「コ」字形屍床で、奥屍床も左右の屍床も仕切をもたなかつたようである。天井は方形造に近いが、寄棟造、妻入りである。天井中央には直径55cm、深さ48cmの孔が穿たれていた。

遺物 出土しなかつた。



66号横穴 (第23図)



65号横穴の北隣で、67号横穴との間に位置する。

主軸を N35° E にとり、北北東に向って開口していた。この横穴も軍隊によって手を加えられており、羨門には扉枠用の掘り込みが上下左右4ヶ所で見られた。また羨門自体は飾縁が無く、八字形に開いている。また、玄室内は床面の破損が著しく、かなり乱れた状態で残っていた。玄室は入口部分

第23図 66号横穴実測図

で幅270cm、奥壁235cm、奥行364cmの長方形をしている。床面は「コ」字形屍床で、奥屍床は左右屍床より47cm程高かったことが、壁に残された床面痕跡より明らかになった。屍床に仕切が造られたか否かは現段階では不明。なお、奥屍床に対し、右側屍床は張り出した様になっていた。天井は平坦になっており、奥屍床部天井が一段低く造られている。通路直上には直径35cm、深さ90cmの孔が穿たれている。

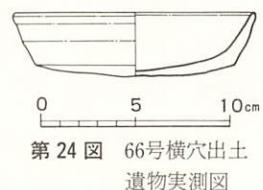
遺物 羨門部から土師器片や須恵器片等が出土した。

土師器（第24図1）

1は土師器の皿の破片で、口径12.8cm、器高3.4cmになる。口縁部は短いが大きく開き、中位で肉厚となっている。口唇部は僅かにふくらんでいる。底部は平坦で、ヘラ削りを行い、他は全てヘラ研磨調整である。器面は内外面共にススの付着が著しく、断面にまでススが付着しているところから、破損後火を受けたものと推察される。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。本来は赤褐色であるが、現在は黒色である。

その他の遺物

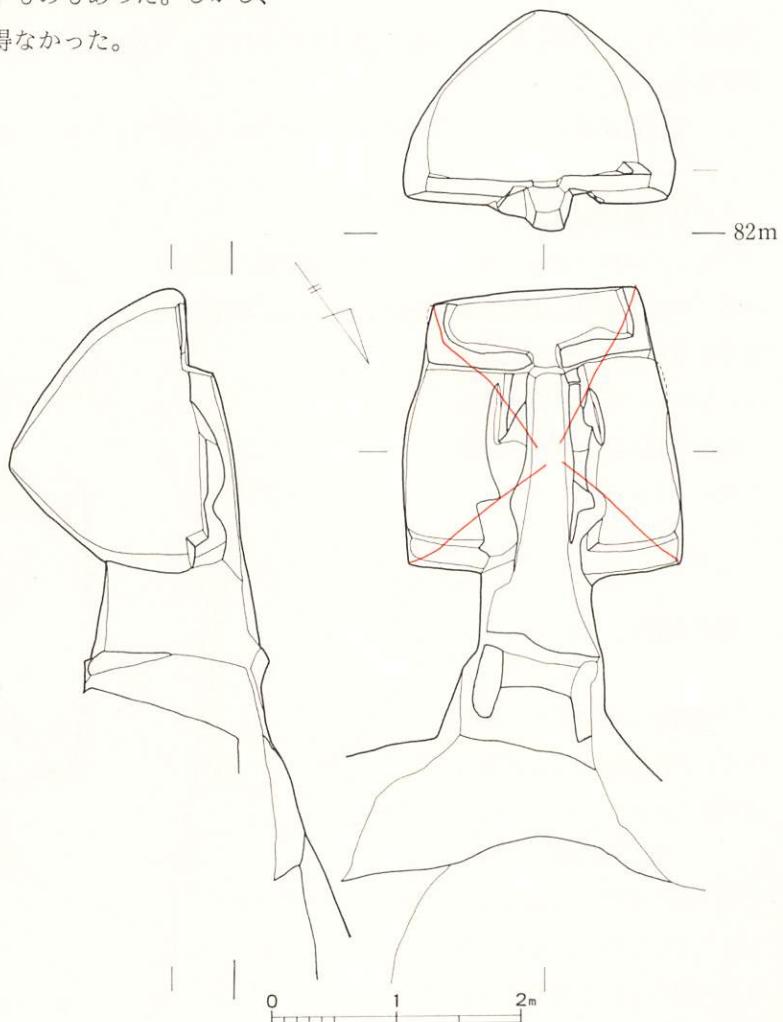
須恵器は細片ばかり8点出土し、この他に近世染付2点や砥石、さらには泥人形（人面）等も出土し、明らかに混入した可能性が強いものもあった。しかし、いずれも細片のため図化し得なかった。



第24図 66号横穴出土
遺物実測図

67号横穴（第25図）

66号横穴の北側で一段低い位置に在り、62号横穴が直下に存在する。主軸もN38°Eにとり、北東に向って開口していた。この横穴も軍隊によって羨門に扉を付けた痕があり、今では内部を塵穴として利用されていた。羨門から前庭部にかけて墓道の確認を行ったが、岩盤が前方に傾斜しているのみで確認されなかった。羨門は加工されたため長方形になっていたが、残存部から幅100cm、高さ135cm、玄室まで90cmを測ることができた。玄室は、入口部分で幅216cm、奥壁163cm、奥行228cmを測り、台形をして



第25図 67号横穴実測図

いた。内部は「コ」字形屍床で、通路を中心に見ると右側屍床に比べ、左側屍床が幾分狭く造られている。各屍床には仕切と枕を連続して「L」字形に造り出していた。尚右側屍床では一部破損している。奥屍床は両側に枕を造り、仕切中央には排水溝が刻まれていた。天井は方形造で、高さ181cmを測り、軒先線は見られない。

遺物 前庭部より出土したが、埋土中であった。

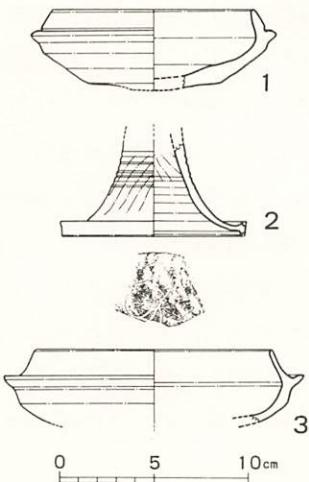
須恵器（第26図1・2）

1は須恵器壺の破片である。口径10.8cm、器高4cmになり、器壁は厚く、粗悪な出来である。口縁部蓋受けは1.2cmと短く、基部外面には浅い凹線がめぐるようである。胎土には砂粒を多く含み、焼成も悪い。暗灰色をしている。2は須恵器高壺脚部片である。裾部直径は9.7cmで、器高は不明だが、脚としては低くなり、裾部下端は摘み上げている。上部ではひねり上げており、内面にはヘラ記号を有している。胎土には砂粒を僅かに含むが、焼成は良く、明灰色をしている。

この他には大甕の破片等、須恵器が数点出土したが図化しなかった。

土師器（第26図3）

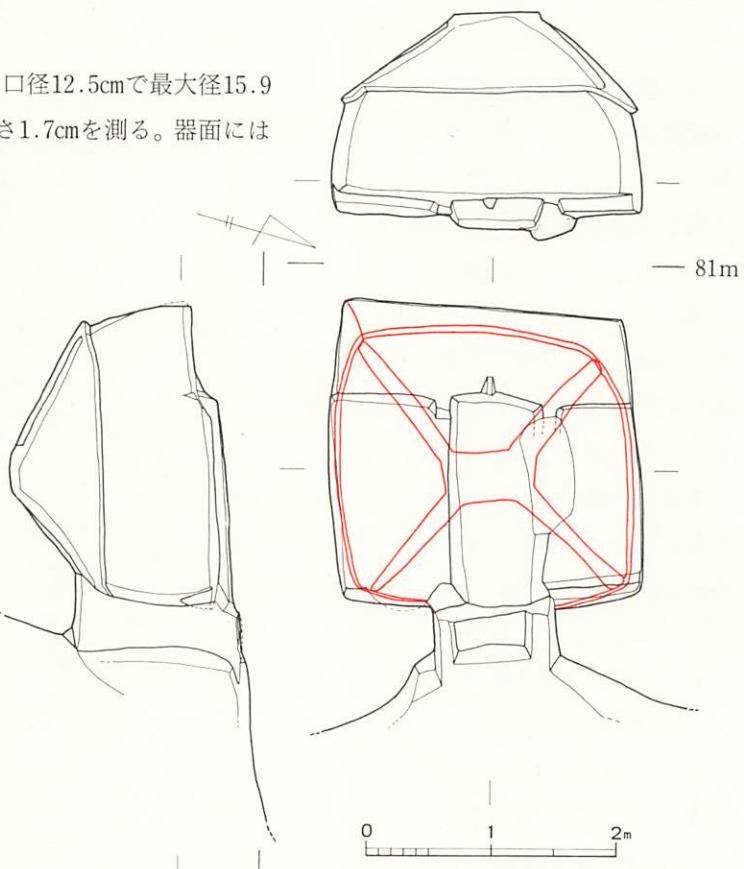
3は土師器壺の破片である。口径12.5cmで最大径15.9cmで、器高は不明。蓋受けは高さ1.7cmを測る。器面には黒漆を施している。器面調整は、底部をヘラ削り、他面はナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。



第26図 67号横穴出土遺物実測図

68号横穴（第27図）

67号横穴に隣接して、69号横穴との間に存在し、上部に63号横穴が在る。主軸をN75°Eにとり東北東に向て開口していた。羨門は軍隊によって加工されて四角を呈し、今日では塵穴として利用されていた。玄室のプランは方形で、入口部分で幅240cm、奥壁220



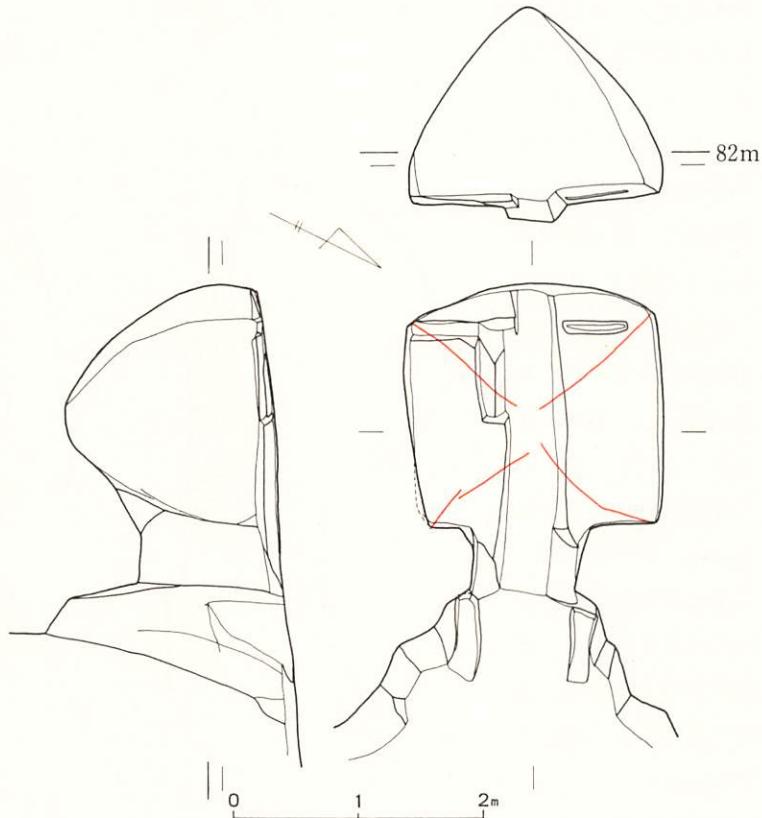
第27図 68号横穴実測図

cm、奥行240cmを測る。屍床は、「コ」字形屍床で、左右屍床には仕切が存在していたが、現在は一部を残して殆ど削り取られていた。天井は寄軒造の平入りで、軒先線をめぐらしている。

遺物 羨門部から浮いた状態で須恵器が出土しているが、上部に63号横穴等も在るところから上から落下した可能性も強く残っている。須恵器は甕胴部の破片が主で図化しなかった。

69号横穴（第28図）

68号横穴の北側で、70号横穴に挟まれており直上に64号横穴が存在する。主軸をN64°Eにとり東北東に向け開口していた。こり横穴も羨門が加工されており、僅かに二重の飾縁が存在したことがうかがえる。玄室は方形を呈しており、幅は入口部分で183cm、奥壁で198cm、奥行は195cmを測る。壁面は奥壁のみ曲線を描き、他の面は直線である。屍床は通路を挟んで左右に見ることができる。屍床には仕切は見られず、床面には軍隊による掘り込みが見られた。天井は方形造で、軒先線は無い。



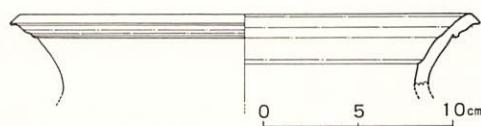
第28図 69号横穴実測図

遺物 羨門部から前庭部にかけて須恵器片数点が出土したが、戦前の軍隊が使用していた面より上から出土したことから、上位に存在する横穴の前庭部より転落したものと判断された。

須恵器（第29図）

甕の口縁部片である。上に向って大きく開く口縁部で、口径24cmになる。口唇部は折り返して平坦になっている。器面はナデ調整で、胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。黒色をしている。

他にも大甕の破片等が出土しているが、図化しなかった。

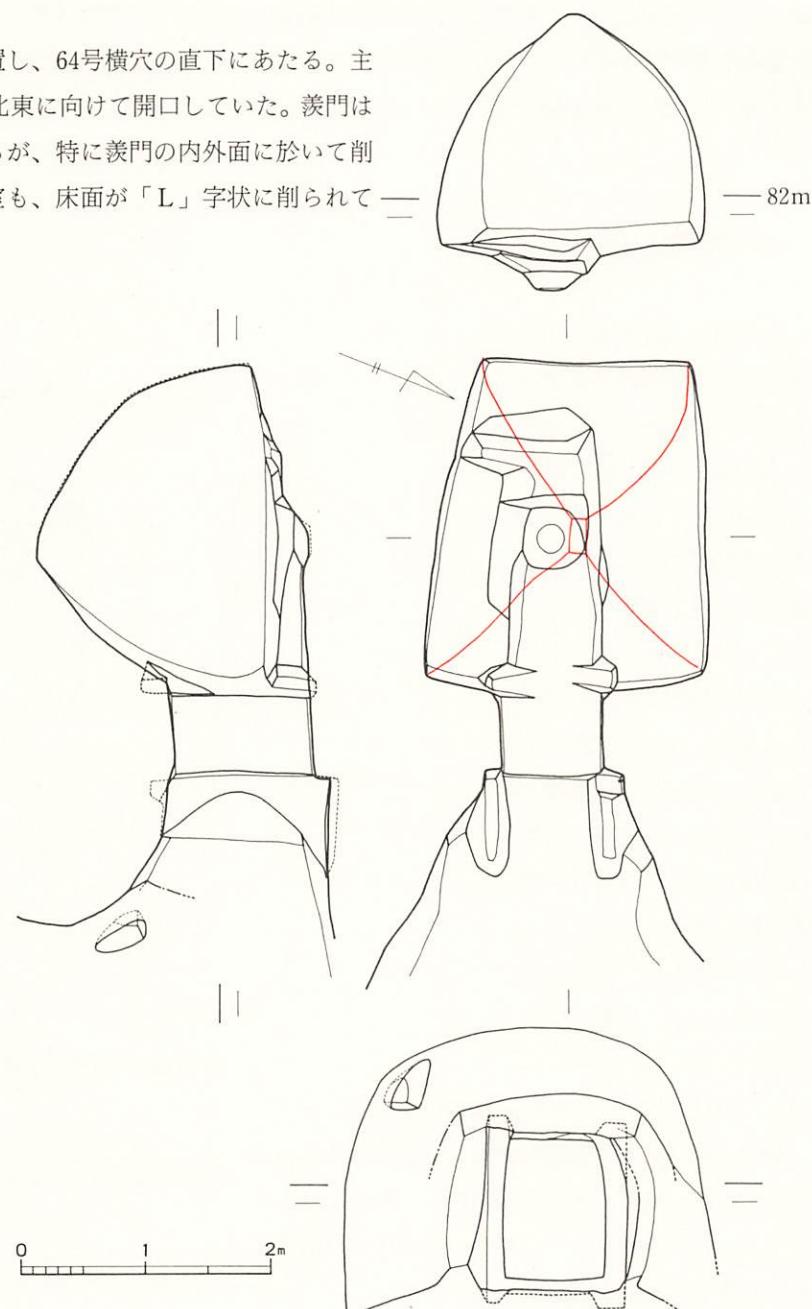


第29図 69号横穴出土遺物実測図

70号横穴（第30図）

69号横穴の北側に位置し、64号横穴の直下にあたる。主軸をN69°Eにとり、東北東に向けて開口していた。羨門は軍隊により削られているが、特に羨門の内外面に於いて削り込みが見られた。玄室も、床面が「L」字状に削られており、屍床については恐らく平坦であったろうと思われる。プランは65号横穴と似ており、台形に近い長方形で、幅は入口部分で220cm、奥壁で165cm、奥行265cmを測る。天井も方形造に近いが、僅かに棟を造っているところから寄棟造で妻入りである。尚、羨門右側の上部には灯明台状の掘り込みが見られたが、軍隊使用時のものか、横穴に伴うものか判断できなかった。

遺物 前庭部より須恵器片や土師器片が出土しているが、上からの転落も考えられ、直接横穴と結びつくかは疑問が残った。とくに1は須恵器提瓶であるが、同一個体が69号横穴からも出土しており、



第30図 70号横穴実測図

69号横穴では層位的に転落してきたものと判断されており、70号横穴においても上方からの落下物と見るべきであろう。

須恵器（第31図1）提瓶

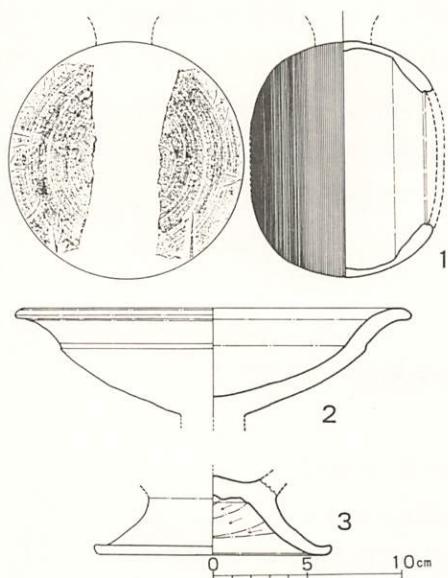
1は口縁部を欠き、胴部も一部であるが、全体に球形をした胴部である。外面にはカキ目を施し、

内面はナデ調整である。胎土にはあまり砂粒を含まず、焼成は良い。灰色をしている。

他にも須恵器が見られるが、胴部片で図化しなかった。

土師器（第31図2・3）

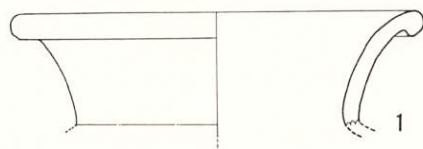
2は土師器の高坏である。脚部を欠き、口縁部から坏部にかけての破片である。口縁部は外反し、坏部は浅い。口径は20cmを測り、器壁は厚い。器面は全面ヘラ研磨で、胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。茶褐色をしている。3は土師器の脚台である。上部を欠いているため器高は不明。裾部では径12.2cmを測る。脚台としては低く、裾部は大きく開いている。内面ではヘラ削り、外面はナデ調整。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良い。裾では黒色で、上部は茶褐色をしている。



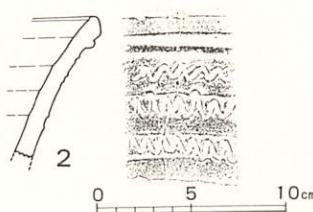
第31図 70号横穴出土遺物実測図

71号横穴（第33図）

70号横穴の北側で、72号横穴に挟まれており、直下には64号横穴が在る。主軸をN64°Eにとり東北東に向けて開口する未完成の横穴である。プランは砲弾形を呈し、幅112cm、奥行160cm、高さ98cmを最大としている。床面は未完成のため



第32図 71号横穴実測図



第33図 71号横穴出土遺物実測図

平坦で、隣接する他の横穴に比べると40cm程高くなっている。天井は、ドーム形をしている。

遺物 前庭部より須恵器片が出土しているが、上部横穴からの転落の可能性が強い。横穴内からも須恵器4点が出土しており、図化し得たのは2点であった。

須恵器（第33図1・2）

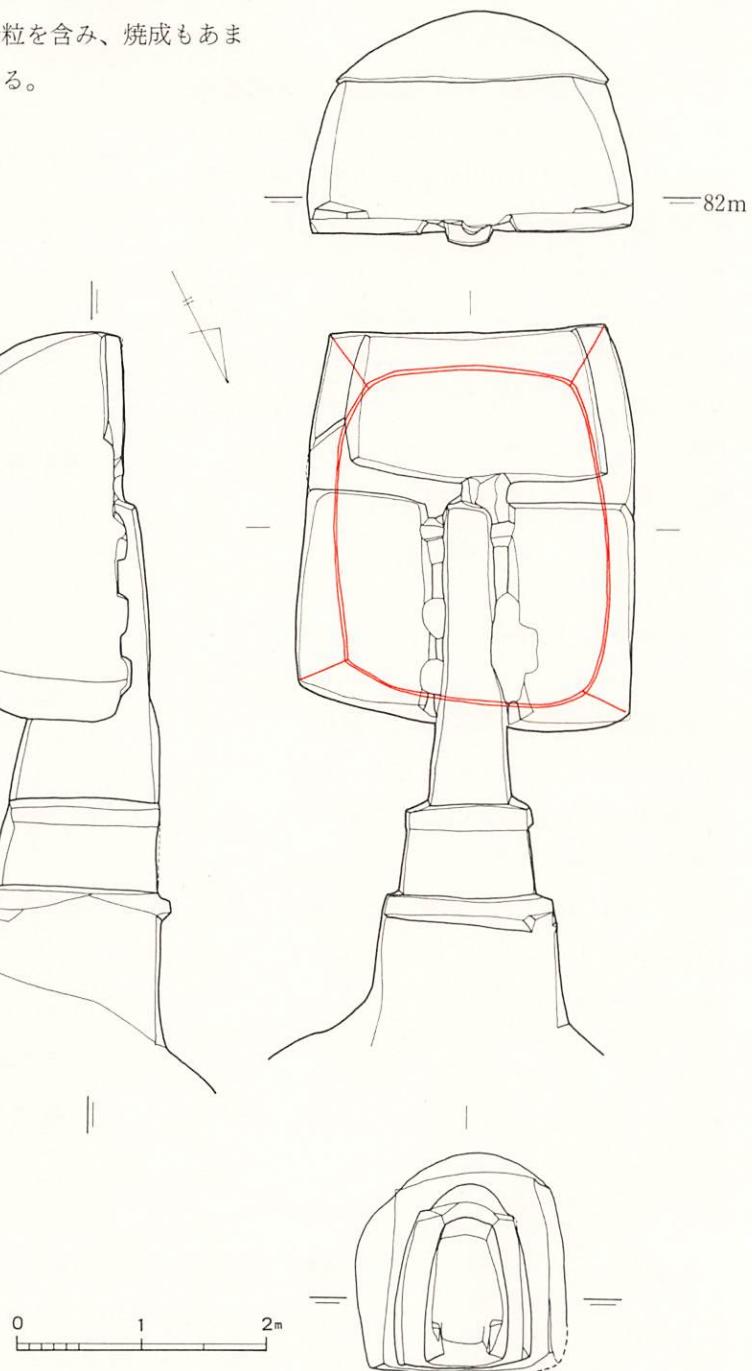
1は前庭部より出土した壺の口縁部片である。頸部から口唇部

に向かって大きく開き、口径21cmになる。口唇部は丸味を帶びている。胎土には砂粒を多く含み、焼成も良くない。暗灰色をしている。2は横穴内より出土した甕の口縁部片である。直線的に大きく開く口縁部で、口唇部は平坦で、直下は三角形になり、さらに凸帯をめぐらしている。また、外面には浅い凹線と波状文を交互に三段めぐらせている。

内面はナデ調整で、胎土には砂粒を含み、焼成もあまり良くない。暗茶褐色をしている。

72号横穴（第34図）

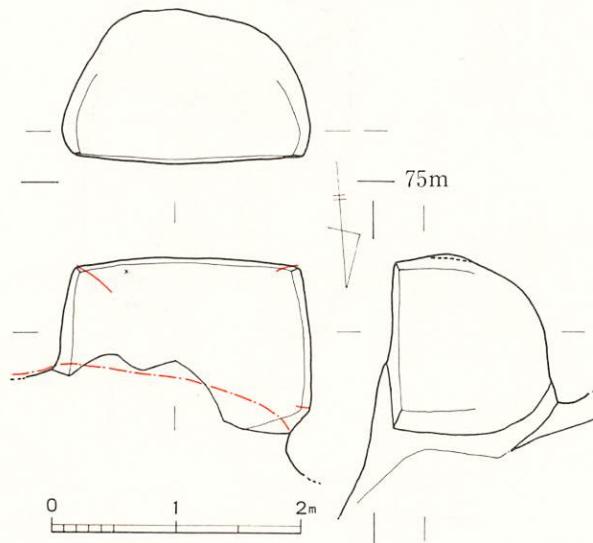
71号横穴の隣で、
64号横穴の直下に位
置する。主軸をN27°
Eにとり、北北東に
向けて開口していた。
この横穴も羨門が加
工されていたが、他
の横穴に比べると羨
道が長く、二重の飾
縁を造っていたこと
が判る。羨道は、玄
室まで265cmを測り、
玄室の奥行が310cm
と比べてもその大き
さが理解できる。玄
室は台形に近い長方
形をしており、横幅
は入口部分で266cm、
奥壁が222cmを測り、
壁面は僅かに曲線を
描いて掘られている。
屍床は「コ」字形で
仕切を造っているが、
一部破損していた。
奥屍床には、仕切か
ら連続して両側に枕



第34図 72号横穴実測図

が造られている。奥屍床には、仕切中央に排水溝を刻んでいるが、左右屍床では奥屍床の直前に刻んでいた。天井には軒先線をめぐらしており、ドーム形を呈する。玄室壁面には、45cmの高さで埋土の痕がくつきりと見られ、開口した後この高さまで土砂が堆積し、その後、軍隊の手によって排土されたものと判断された。尚、前庭部で、床面より約40cm低い位置に、小穴が在り、その中には礫が詰まっている。別の横穴の存在をうかがわせるが、近くに溜池用暗渠が通っているため破損する恐れがあり、確認するに至らなかった。

遺物 出土しなかった。

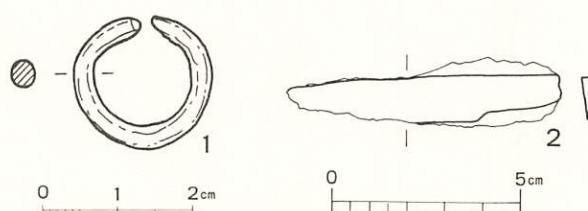


第35図 101号横穴実測図

101号横穴 (第35図)

溜池東南に位置し、満水時には水没する。103号まで隣接して存在する。この横穴は羨門部から玄室前半に至るまで崩壊していた。主軸はN 5°Eとほぼ北に向けて開口している。玄室は奥壁幅180cm、右側壁114cmを測り、横広い方形のプランであったことからうかがえる。床面は平坦で天井はドーム状をなしていた。床面に僅かに朱の痕跡が認められた。横穴としては、小型のものである。毎年水没し、開口しているため、遺物は無いものと思っていたが、思いもよらず遺物が出土したことに驚いた。

遺物 (図版11-16、第36、37図) 奥壁左側から金環が出土し、この他排土水洗で鉄器が出土した。1は直径1.87cmの銅地金の耳環である。表面には恐らく金を張っていたものと思われるが、残りが悪く不明。2は刀子である。茎基部を欠くが、現長7.2cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmを測る。



第36図 101号横穴出土 耳環実測図 第37図 101号横穴出土鉄器実測図

102号横穴 (第38図)

101号横穴と103号横穴に挟まれた位置で、毎年水没するため羨門部の侵蝕が著しい。主軸をN 32°Eにとり、北北東に向けて開口していた。羨門は侵蝕のため全体的になだらかな線でアーチ形をしていた。玄室は長方形のプランで、幅は入口部分で188cm、奥壁205cm、奥行275cmを測る。壁面はや

や張り出し気味であった。屍床は「コ」字形であるが、左右屍床は羨門側で「ハ」字形に仕切が開いていた。仕切の中央には排水溝を刻んでいる。奥屍床は左右屍床より35cm程高く、左側には枕も造っていた。天井は、ドーム状に近いが、軒先線をめぐらし隅棟線等から寄棟造で妻入りとなっている。

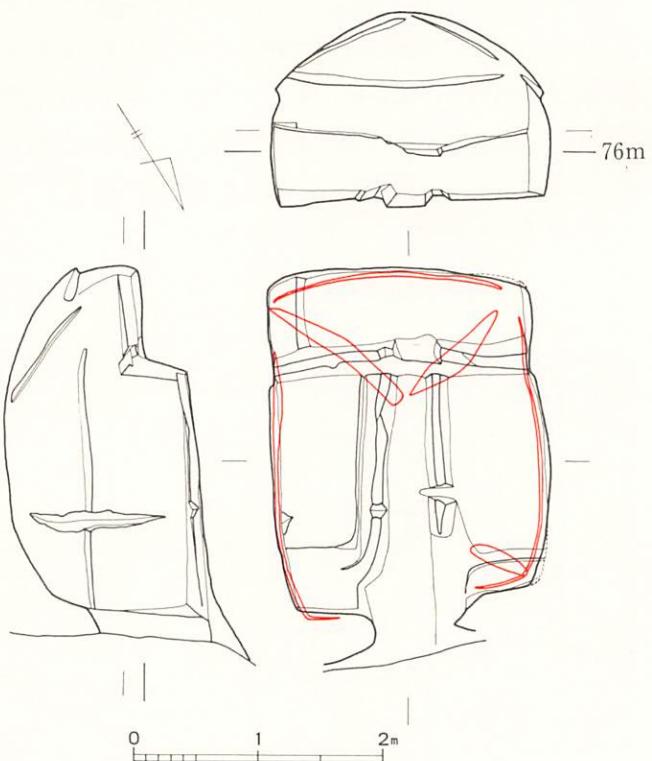
遺物 右側屍床から集中して出土した。残念なことに、当初横穴の状態から遺物が残っていると予想されなかつたので、排土していたが、念のため屍床別に水洗を行ったところ出土したものである。鉄器(1~5)銀製耳環(6・7)滑石製白玉(8~62)ガラス製小玉(63~65)等が出土した。

鉄器(図版12-1~4 第39図1~5)
すべて鉄鏃である。

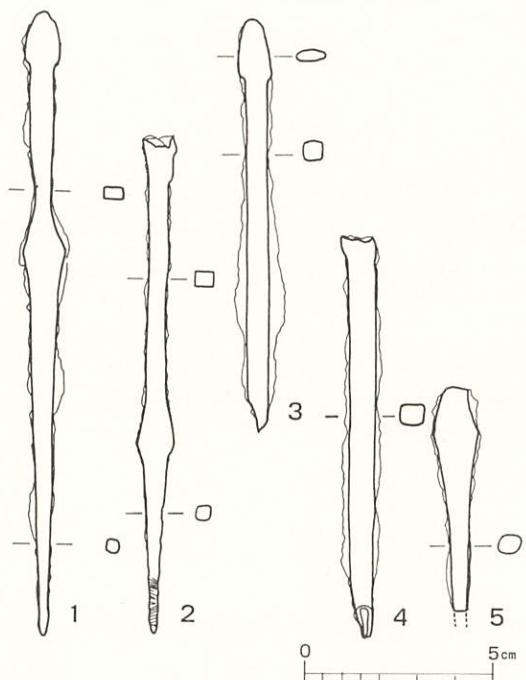
1は尖根式で全長16.5cmを測る。籠被には棘突起を有し、闊も小さい。身は三角形になり、片丸造りである。2も尖根式で現長13.1cmを測る。茎と籠被の間には棘突起を有している。身は欠いているため形は不明だが、片側に闊が見られるところから片刃式になると思われる。なお茎には樹皮の付着が見られる。3も尖根式で、茎を欠き現長10.9cmを測る。籠被は長く下部は欠いている。両側に小さな闊をもち、身は柳葉式で長さ1.5cm、幅0.9cmで両刃造りである。4も尖根式だが、身と茎を欠き現長10.6cmになる。籠被の断面は方形で、小さな闊を両側に有している。5も尖根式であろう。棘突起と茎の一部を残すのみで、現長5.9cmになる。なおこの他にも4片程茎部分があるが図化しなかった。

銀製耳環(図版12-5・6 第40図6・7)

6は直径2.1cm、7は直径2cmとほぼ同じで

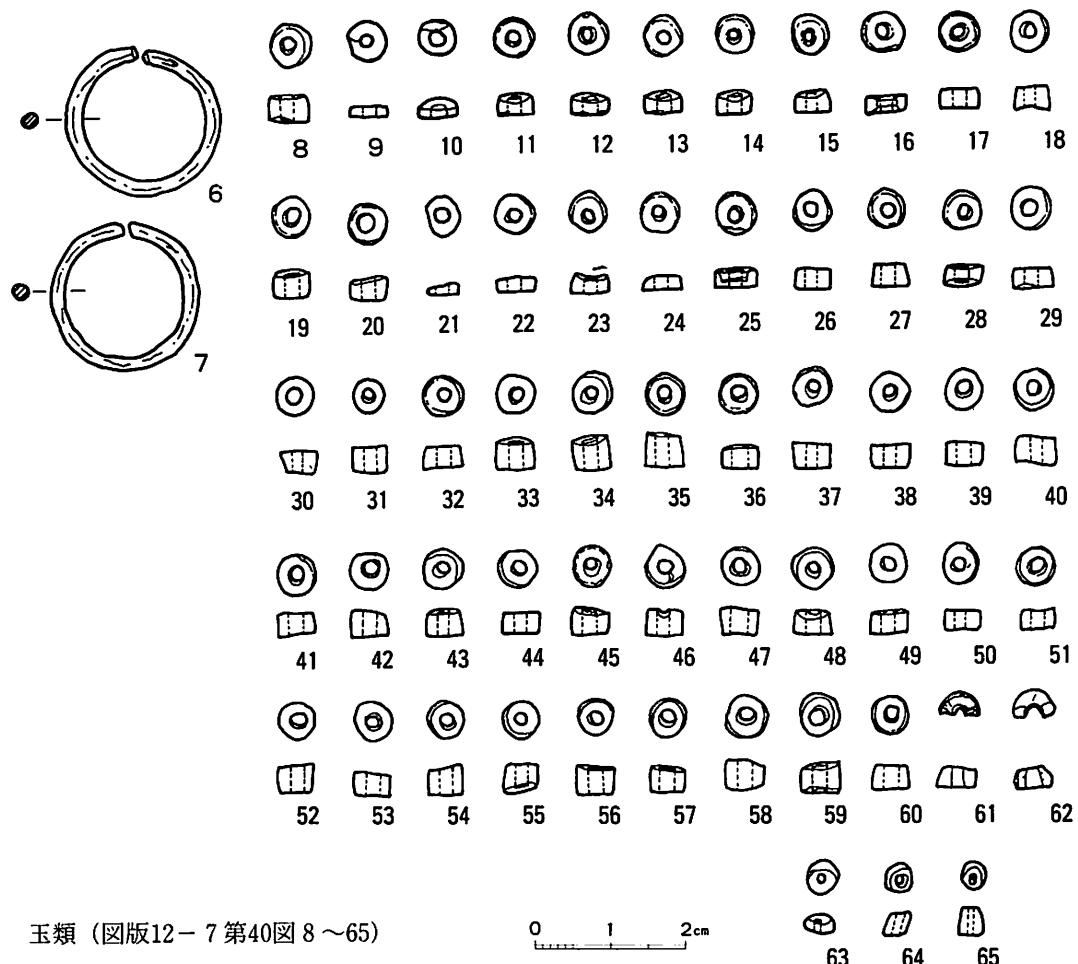


第38図 102号横穴実測図



第39図 102号横穴出土鉄器実測図

ペアになると思われる。共に銀を板状に伸ばし、その後こより状に丸めて更に曲げている。



玉類 (図版12-7 第40図 8~65)

8~62までは滑石製臼玉で、63~65は
ガラス製小玉である。詳細については別
表に譲る。

第40図 102号横穴出土遺物実測図

表1 102号横穴出土臼玉集成表

番号	図版番号	材質	色調	高さ(ミリ)	直径(ミリ)	孔径(ミリ)
1	第40図-8	滑石	灰色	3.50	5.25	2.10
2	9	滑石	灰色	1.25	5.05	1.75
3	10	滑石	灰色	2.50	5.10	2.00
4	11	滑石	灰色	3.20	5.05	1.75
5	12	滑石	灰色	2.45	5.30	1.80
6	13	滑石	灰色	3.00	5.00	1.75
7	14	滑石	灰色	2.60	5.00	1.90
8	15	滑石	灰色	2.90	5.00	1.95
9	16	滑石	灰色	2.30	5.35	1.80
10	17	滑石	灰色	2.65	5.35	1.80
11	18	滑石	灰色	3.25	5.20	1.95
12	19	滑石	灰色	3.20	5.15	2.10
13	20	滑石	灰色	2.90	5.25	1.90
14	21	滑石	灰色	1.40	5.05	2.05
15	22	滑石	灰色	1.85	5.20	1.75
16	23	滑石	灰色	2.45	5.20	1.80
17	24	滑石	灰色	2.15	5.00	1.80
18	25	滑石	灰色	2.45	5.40	1.85

番号	図版番号	材質	色調	高さ(ミリ)	直径(ミリ)	孔径(ミリ)
19	第40図-26	滑石	灰色	2.70	5.30	1.85
20	27	滑石	灰色	3.10	5.10	1.70
21	28	滑石	灰色	2.90	5.05	1.90
22	29	滑石	灰色	2.95	5.25	1.90
23	30	滑石	灰色	2.80	5.35	1.85
24	31	滑石	灰色	3.50	4.70	1.95
25	32	滑石	灰色	2.85	5.10	1.95
26	33	滑石	灰色	3.30	5.40	1.95
27	34	滑石	灰色	4.65	5.20	1.75
28	35	滑石	灰色	3.90	5.20	2.10
29	36	滑石	灰色	3.05	5.20	1.75
30	37	滑石	灰色	3.60	5.05	1.80
31	38	滑石	灰色	2.85	5.05	2.10
32	39	滑石	灰色	3.30	5.20	1.80
33	40	滑石	灰色	3.70	5.20	1.95
34	41	滑石	灰色	2.90	5.30	1.90
35	42	滑石	灰色	2.85	5.05	1.90
36	43	滑石	灰色	3.35	5.30	1.85
37	44	滑石	灰色	3.10	5.05	1.85
38	45	滑石	灰色	3.65	5.15	2.00
39	46	滑石	灰色	3.45	5.10	2.05
40	47	滑石	灰色	3.50	5.20	1.90
41	48	滑石	灰色	3.10	5.20	1.85
42	49	滑石	灰色	2.95	5.05	1.95
43	50	滑石	灰色	2.85	5.00	1.90
44	51	滑石	灰色	2.70	5.15	1.90
45	52	滑石	灰色	3.70	4.65	2.10
46	53	滑石	灰色	3.45	5.10	1.95
47	54	滑石	灰色	3.65	5.20	2.30
48	55	滑石	灰色	3.20	5.00	2.05
49	56	滑石	灰色	3.80	5.10	1.95
50	57	滑石	灰色	3.25	5.00	2.05
51	58	滑石	灰色	3.70	5.50	2.10
52	59	滑石	灰色	3.75	5.15	2.15
53	60	滑石	灰色	2.00	5.05	1.75
54	61	滑石	灰色	2.55	4.90	—
55	62	滑石	灰色	—	5.10	—

表2 102号横穴出土小玉集成表

103号横穴（第41図）

番号	図版番号	材質	色調	高さ(ミリ)	直径(ミリ)	孔径(ミリ)
1	第40図-63	ガラス	濃青	2.60	3.85	0.90
2	64	ガラス	淡青	2.40	3.15	1.15
3	65	ガラス	青	3.50	3.00	0.85

102号横穴の北西に位置し、主軸はN37°Eをとり、北東に向けて開口している。毎年水没するため羨門部を浸蝕によって欠いている。玄室

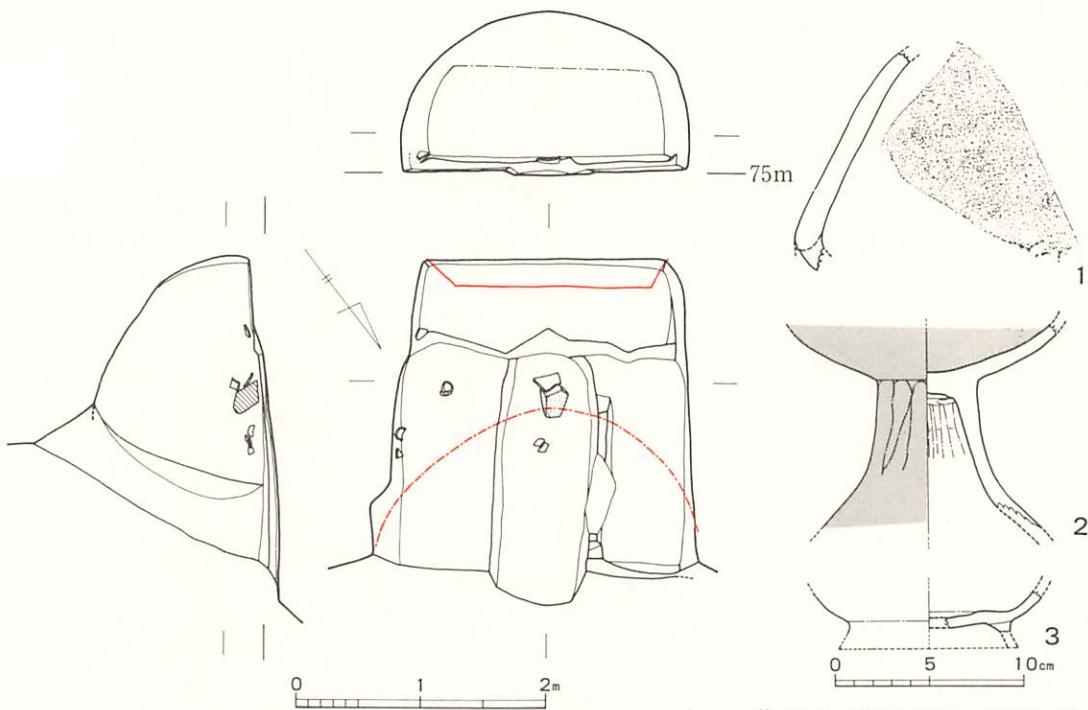
は長方形のプランで、奥壁のみ195cmを測り、他は計測できなかった。屍床は「コ」字形になり、右側屍床には仕切の一部を残している。他の屍床については仕切の確認はできなかった。天井はドーム形で、奥壁には軒先線が僅かに残されていた。

遺物 通路、左屍床、奥屍床より須恵器や土師器片等が出土している。

須恵器（第42図1）

1は奥屍床左端から出土した須恵器大甕の口縁部片である。口唇部を欠くため口径等は不明。外面に乱れた波状文が2列見られる。器面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含むが、焼成は良く、明灰色をしている。この他に大甕胴部破片が出土している。

土師器（第42図2・3）



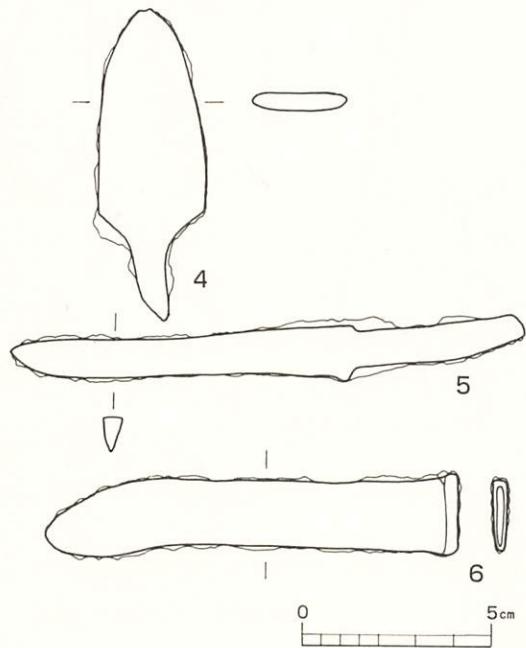
第41図 103号横穴実測図

2と3は左屍床より出土した土師器で、2は丹塗りの高壺で器高等不明である。脚内面にヘラ削りを施している。他は全面にヘラ研磨で仕上げている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。赤色である。3は高台を有する皿である。これも口縁部と高台裾部を欠いているため、口径、器高等は不明。器面は全面ナデ仕上げで、胎土には小さな砂粒を含むが、焼成は良く、褐色をしている。

鉄器(図版12-8～10第43図4～6)鎌(4)
刀子(5)鎌(6)の3種が出土した。

4は広根式の鎌である。茎を欠くため現長8.2cmを測る。関は丸味をもち、身は三角形式で、長さ5.4cm、幅2.9cmを測り、両丸造りとなる。5は全長13.6cmの刀子で、左側屍床より出土している。6は鎌で全長11cmを測る。

右端を折り返し、刃部は内湾している。身は背折返しで、中空となっていた。しかも身は細く平造りである。



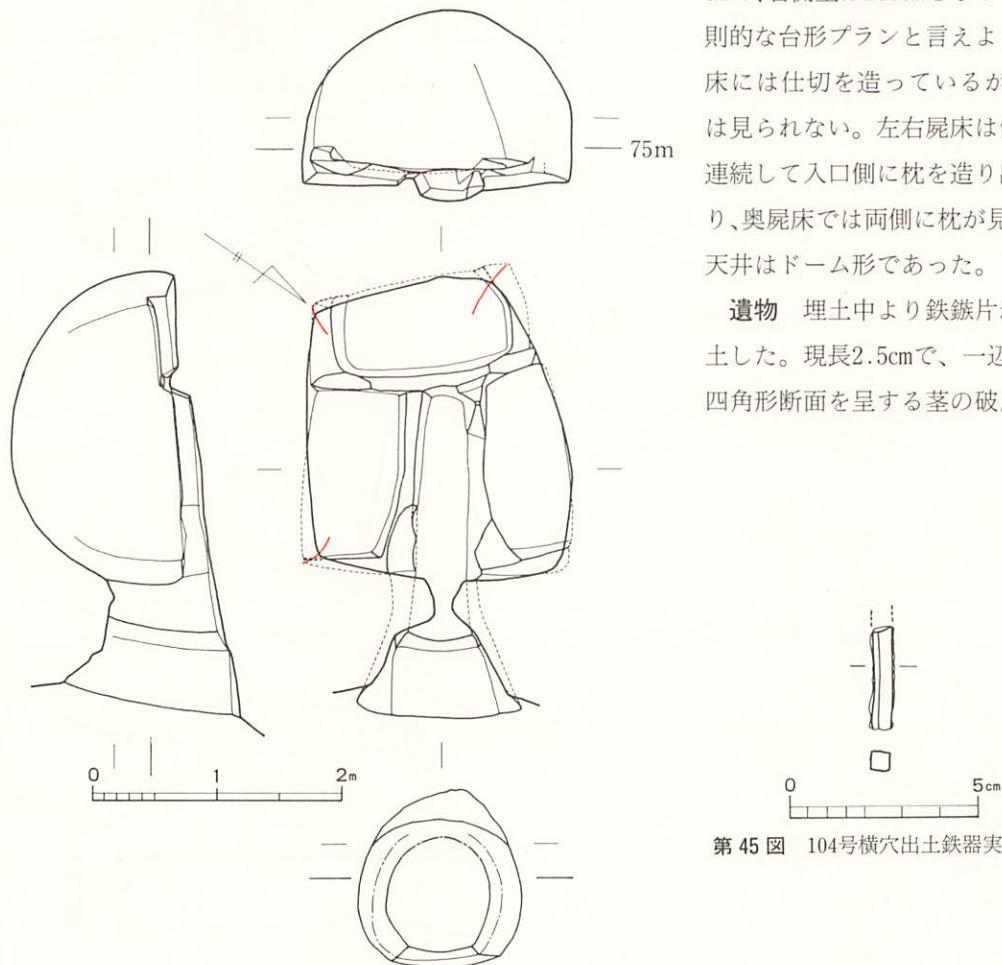
第43図 103号横穴出土鉄器実測図

104号横穴（第44図）

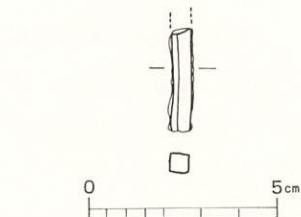
溜池南側には堤防から約270mの所が、山林から溜池に向かって尾根が伸びており、その裾部を中心いて104号横穴から119号横穴までを確認することができた。104号横穴は、裾部東側に位置しており、主軸をN55°Eにとり、北東に向けて開口している。羨門は水没するため明瞭な線ではないが飾縁を有しており、幅73cm、高さ94cmの円形をしている。玄室は通路を中心に左側はきちんと造られているのに対し、右側はかなりいびつになっている。「コ」字形屍床の中でも右側屍床は奥に行くに従って壁面が中に入り込み、先細りの屍床となっている。奥屍床に至っては、羨門に比較しても右側が奥に入り込み、斜めの状態で造られていた。入口部分の最大幅が215cm、奥壁最大幅は148cm、左側壁が205

cmで、右側壁は246cmとなっており変則的な台形プランと言えよう。各屍床には仕切を造っているが、排水溝は見られない。左右屍床は仕切から連続して入口側に枕を造り出しており、奥屍床では両側に枕が見られた。天井はドーム形であった。

遺物 埋土中より鉄鎌片が1点出土した。現長2.5cmで、一辺0.5cmの四角形断面を呈する茎の破片である。



第44図 104号横穴実測図



第45図 104号横穴出土鉄器実測図

105号横穴（第46図）

104号横穴の北側に位置しており、主軸をN60°Eにとり、東北東に向かって開口している。水没す

るため羨門は浸蝕を受けているが、羨門自体は狭くて幅53cm、高さ102cmのアーチ形をしている。飾縁は無く、玄室まで42cmを測る。玄室は基本的には長方形だが、104号横穴と同様右側壁面が極端に曲がっているため台形状を呈している。入口部分で幅202cm、奥壁171cm、奥行260cm程度である。屍床は「コ」字形をし仕切をもたない。奥屍床には両側に枕を有していた。尚通路及び屍床の破損が著しい。天井は隅棟線を有するドーム形であった。

遺物 前庭部からの出土である。須恵器（1）土師器（2）鉄器（3）が出土した。

須恵器（第47図1）

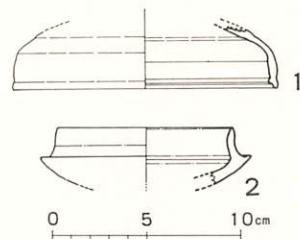
1は須恵器壊蓋の破片である。口径14.1cmを測り、器高不明。口唇部を僅かだが、外側に摘み上げている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。淡灰色をしている。

土師器（第47図2）

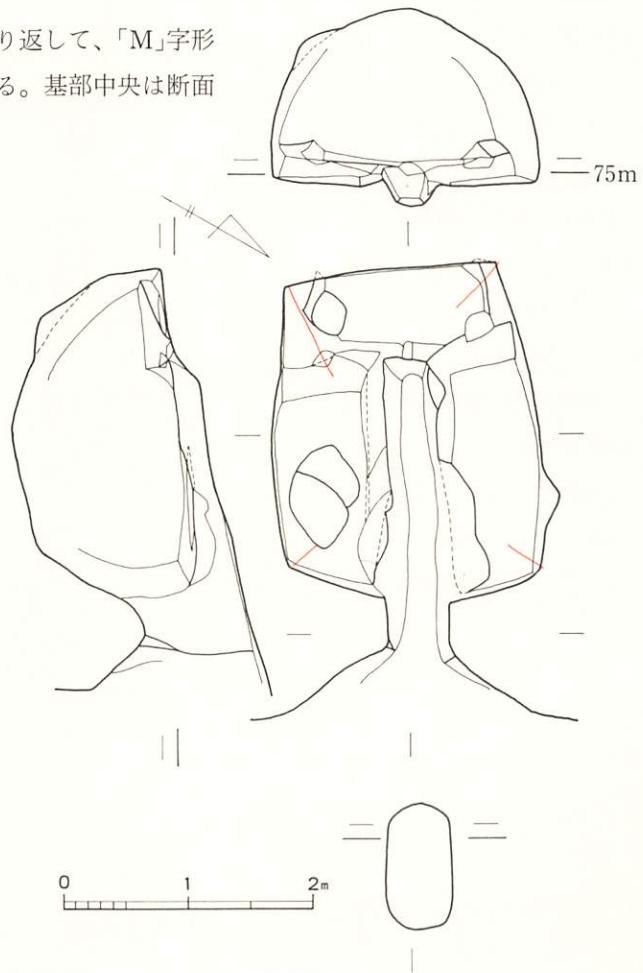
2は土師器壊片である。口径は9.3cmになるが、器高は不明。蓋受部は高さ1.6cmで、垂直気味に立ち上がっている。器面には全面ナデ調整の後、黒漆を塗っている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。

鉄器（図版12-11第48図3）

鉸具である。三角形の頂点を内側に折り返して、「M」字形になっている。長さ3.7cm、幅4.9cmを測る。基部中央は断面円形で細く、他は四角である。



第47図 105号横穴出土遺物実測図



第48図 105号横穴出土鉄器実測図

第46図 105号横穴実測図

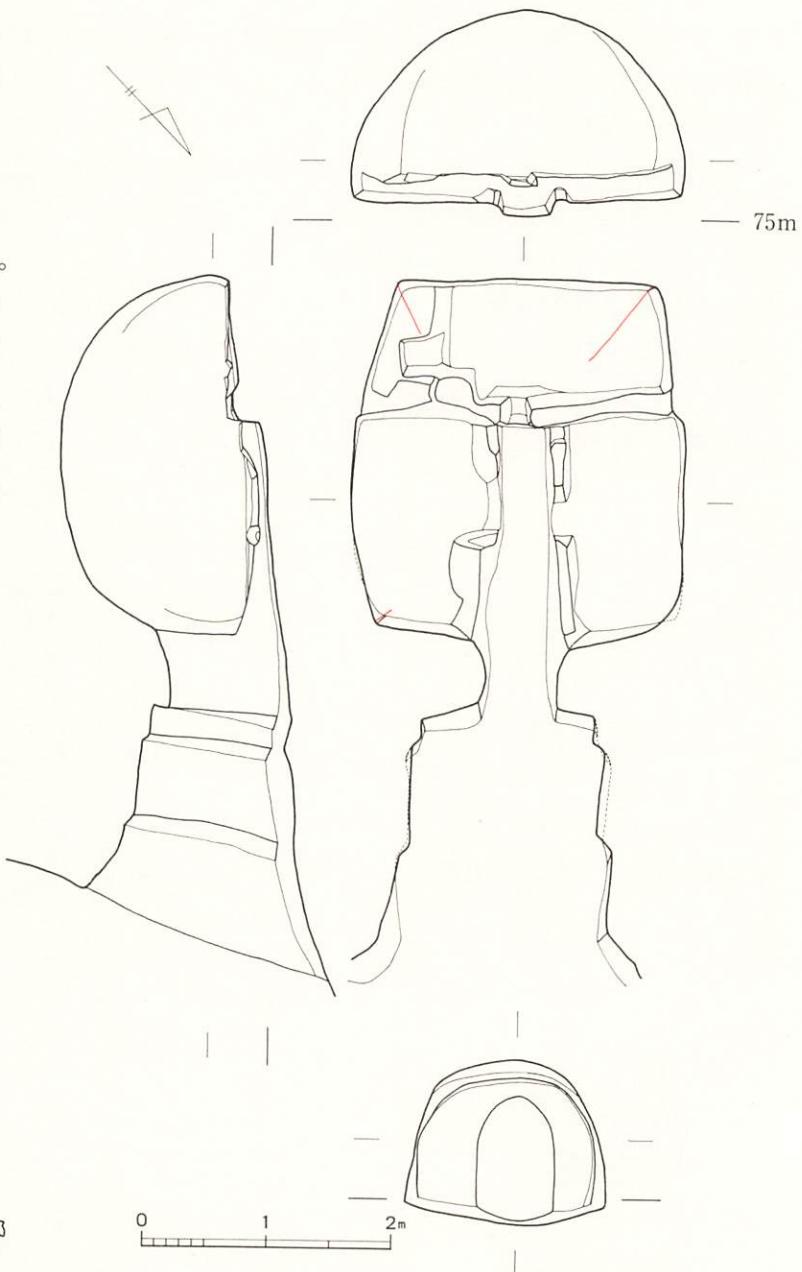
106号横穴（第49図）

105号横穴に隣接する横穴である。水没する場所に在る割には保存状態の良い横穴であった。主軸をN44°E にとり、北東に向けて開口している。羨門には二重の飾縁を造り、前庭部から羨門まで175cmを測る。羨門は幅62cm、高さ99cmのアーチ形で、玄室まで60cmを測る。玄室は隅丸方形のプランで、胴張りが見られる。入口部分で幅235cm、奥壁206cm、奥行280cmを測る。屍床は「コ」字形で各屍床には仕切が見られ、中央部分に排水溝を配している。奥屍床では、左側に枕を造っている。尚仕切については、一部破損している。天井はドーム形で、奥壁に隅棟線が僅かに確認できる。

遺物 前庭部より須恵器破片数点が出土したが、細片のため図化したのは1点だけである。須恵器は高壇脚台部の破片で、裾部直径14.4cmを測る。脚部の殆どを欠いているが、4ヶ所に透しを入れている。透しは上部がないため、その形は不明である。裾端部には沈線を1条めぐらせ、下端は摘み上げている。胎土には砂粒を含み、焼成も良くなない。そのため淡灰色をしている。



第50図 106号横穴出土遺物実測図

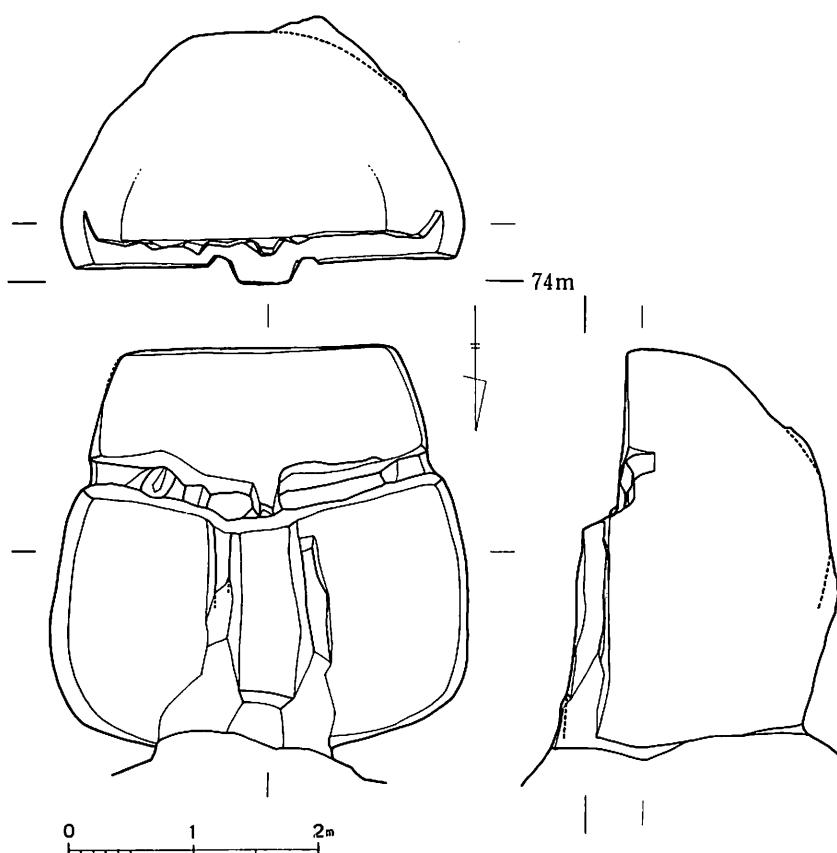


第49図 106号横穴実測図

112号横穴（第51図）

溜池に張り出した尾根の先端に位置し、106号横穴の西側に存在する。主軸はN 1°Eと真北に向けて開口していた。羨門からは通路の一部は水没するため浸食されていた。玄室は羨門側左右壁面隅が大きく曲線を描き、隅丸台形とでも言う形態を示していた。そのため入口部分幅は307cm、奥壁216cm、奥行はおよそ320cm程度になろう。屍床は「コ」字形で仕切を造っている。現在奥屍床仕切にのみ排水溝を確認することができる。尚、奥屍床仕切両端はゴンドラ状に造出していた。天井は落盤を生じているが、ドーム形になることが判る。

遺物 出土しなかった。



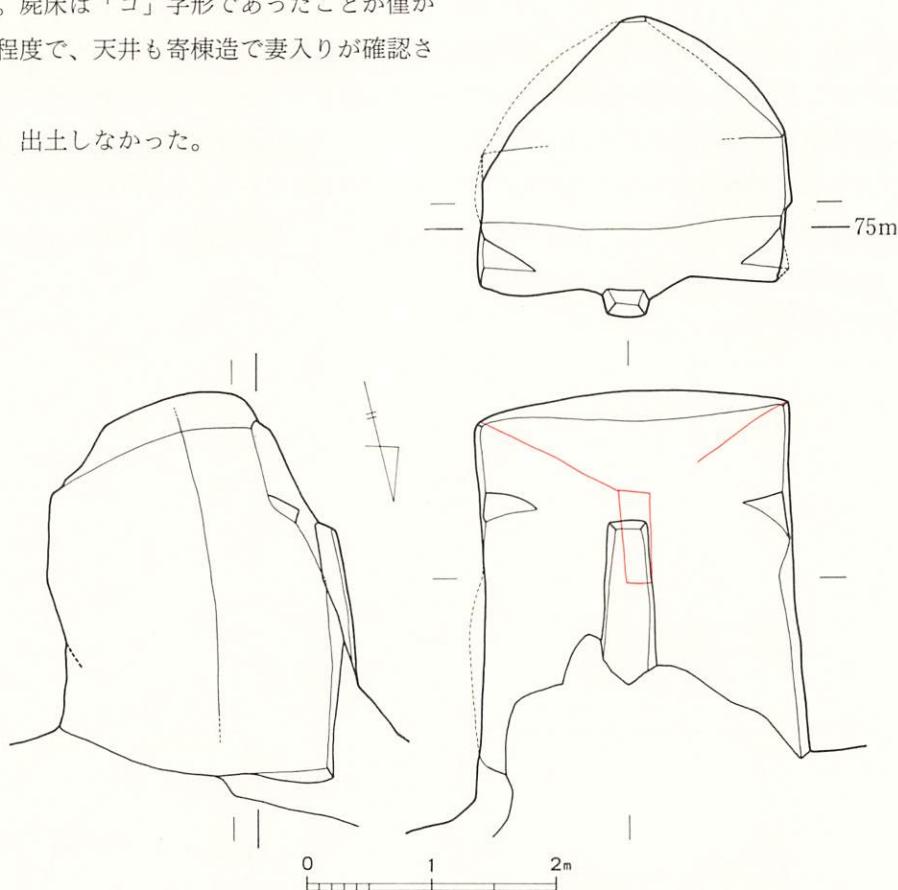
第51図 112号横穴実測図

114号横穴（第52図）

112号横穴の右斜上に位置し、直下に113号横穴がある。尚この113号横穴は調査期間中に水没してしまったために実測出来なかった。主軸はN 13°Eにとり、北北東に向けて開口している。羨門と玄室の一部を欠いており、床面や天井の破損も著しかった。プランは長方形で、壁面は直線的であつ

た。この横穴では奥壁幅251cmだけを測ることができた。屍床は「コ」字形であったことが僅かに判る程度で、天井も寄棟造で妻入りが確認された。

遺物 出土しなかった。



第52図 114号横穴実測図

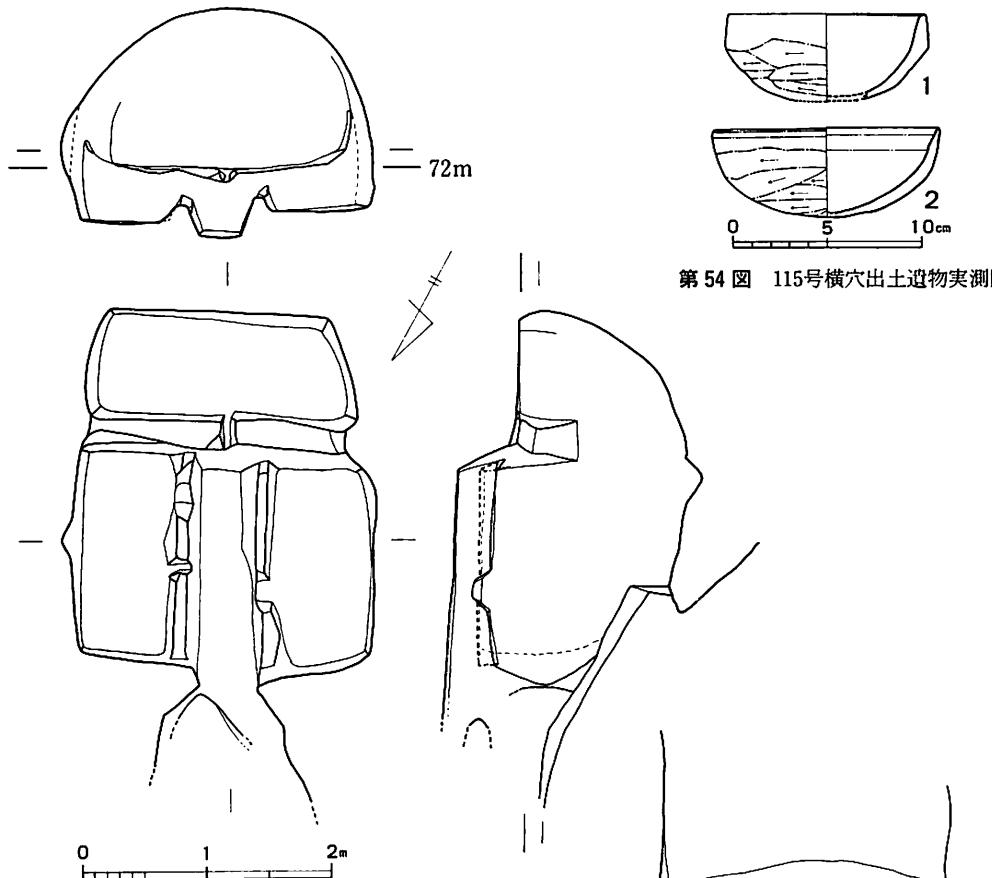
115号横穴 (第53図)

114号横穴の約3m低い右下に位置し、左側には113号横穴が接するよう存在する。主軸はN31°Wにとり、北北西に向けて開口していた。羨門及び玄室の一部が浸蝕されて欠いていた。羨門には凝灰岩切石の閉塞石が倒れていたが、水際のため一部の確認しか出来なかった。玄室は隅丸長方形のプランで、入口部分で幅233cm、奥壁で170cm、奥行は282cmを測った。屍床は「コ」字形で各屍床には仕切を造り、ほぼ中央に排水溝を刻んでいた。尚、仕切は両端を高くした「ゴンドラ形」をしている。天井はドーム形をしていた。

遺物 閉塞石の上面より土師器塊片2点が出土した。

土師器 (第54図1・2)

1・2共に半欠の状態で、1は正円にならず歪んでいる。器壁が厚く、底部近くの外面は粗いヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は良い。黄褐色をしている。2は1に比べ、器壁がやや薄くなっている。1と同様、底部近くをヘラ削りで、他は全面ナデ調整で



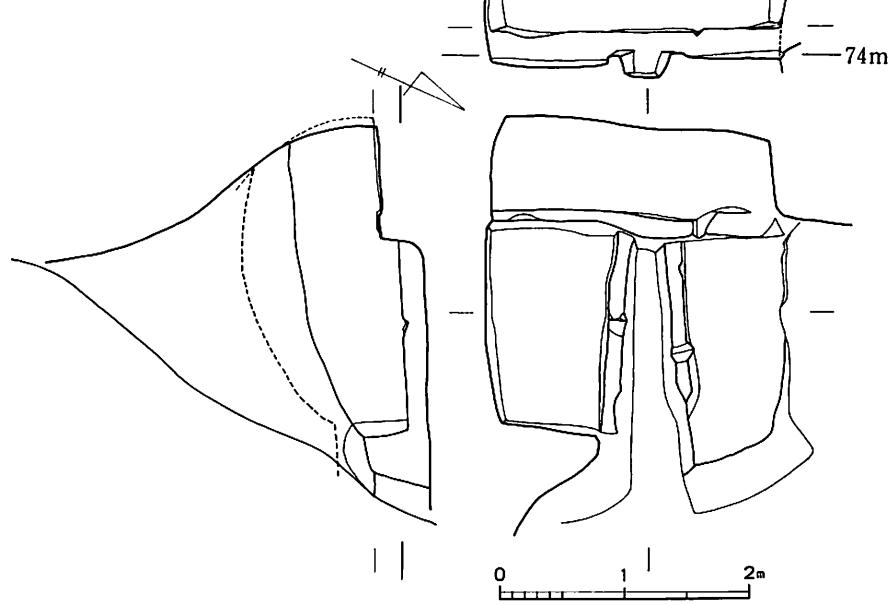
第 53 図 115号横穴実測図

ある。胎土には
砂粒を含むが、
焼成は良く、茶
褐色をしている。

120号横穴

(第55図)

溜池南側に大
きく伸びた尾根
の西側に、小さ
な入江を形成し
ており、その西



第 55 図 120号横穴実測図

側に位置している。主軸をN66°Eにとり、東北東に向かって開口している。この横穴は床面と壁面の一部を残し、他は欠いていた。玄室のプランは長方形で、床面での計測で、入口部分幅218cm、奥壁211cm、奥行約250cmを測った。壁面は直線的で、屍床は「コ」字形を呈している。屍床には仕切を造り、それぞれに排水溝を刻んでいるが、その場所は一定でない。天井は欠いているため不明。

遺物 出土しなかった。

122号横穴（第56図）

120号横穴の西側約30mに位置し、溜池堤防より143m東側の地に存在する。西隣には123号横穴も在る。主軸をN13°Wにとり、およそ北に向けて開口していた。浸食のため羨門及び玄室前半分と天井部の半分まで欠き、保存状態は悪かった。玄室は長方形のプランで、壁面は直線的に造られ、奥壁幅のみが254cmを測ることができた。屍床は破損が著しく、「コ」字形で仕切は見られないことが、かろうじて確認された。尚、床面より約10cmの高さの面に凝灰岩角礫が敷き詰められていたが、不注意から作業中排除したため図化し得なかった。恐らく、屍床の破損状況及び遺物から、追葬の際より、中世における二次使用の段階で敷かれたものと推察された。天井は奥壁に軒先線を残し、ドーム形をしていた。

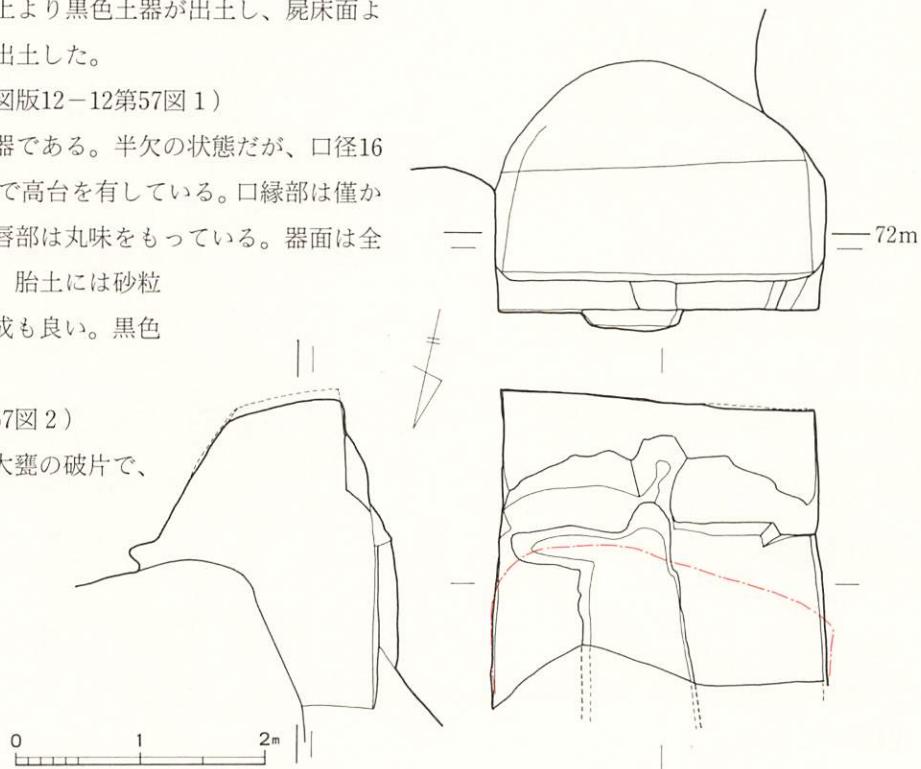
遺物 角礫上より黒色土器が出土し、屍床面より須恵器片が出土した。

黒色土器（図版12-12第57図1）

1は黒色土器である。半欠の状態だが、口径16cm、器高5.4cmで高台を有している。口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸味をもっている。器面は全面ナデ調整で、胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。黒色をしている。

須恵器（第57図2）

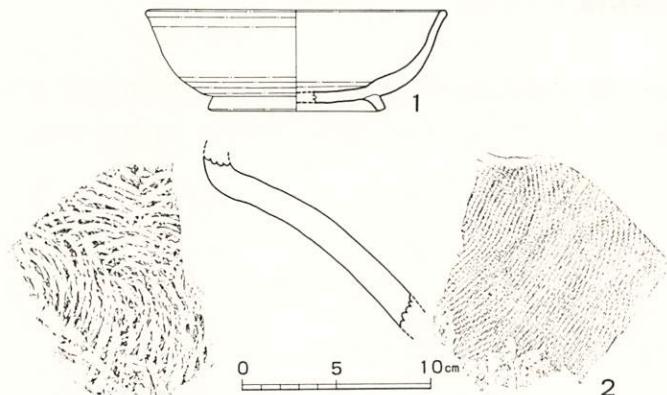
2は須恵器大甕の破片で、



第56図 122号横穴実測図

肩部のみである。器面調整は外面に叩き目を施し、その後カキ消している。内面は青海波状文を施している。器壁は厚いが、胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。暗灰色をしている。

この他にも数点破片が出土している。

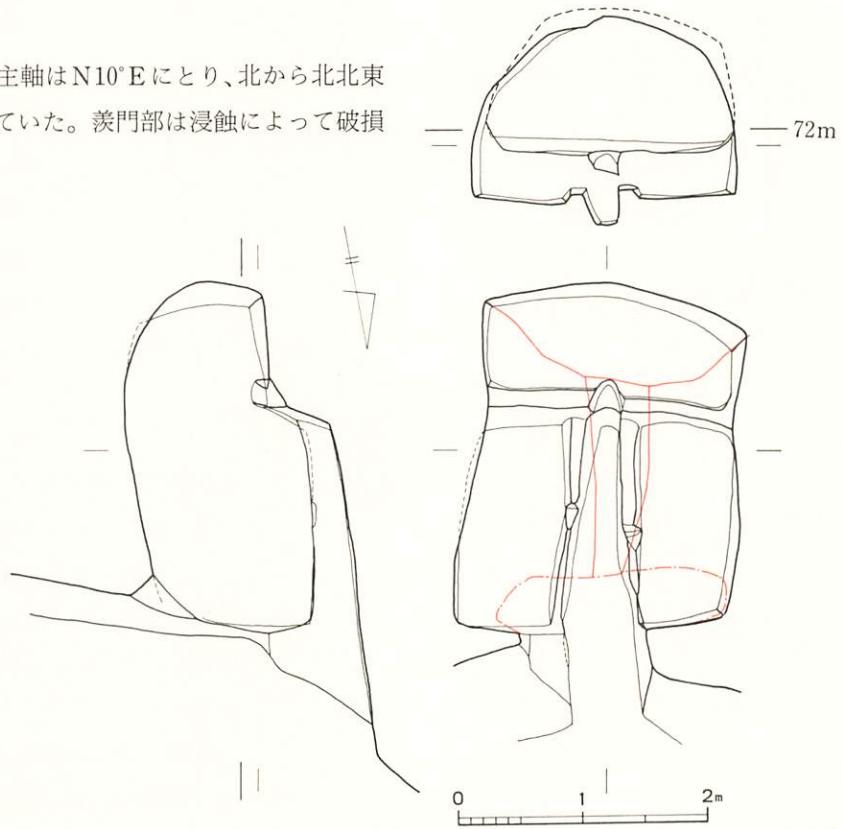


第57図 122号横穴出土遺物実測図

123号横穴（第58図）

122号横穴の西隣で、主軸はN10°Eにとり、北から北北東の方向にかけて開口していた。羨門部は浸蝕によって破損し、122号横穴と共に大きく口を開けた状態であった。玄室はやや変形した長方形で、左右側壁は奥壁に向かって「S」字状に曲がっており、奥壁も右側半分が羨門の方に近くなっていた。入口部分で幅は215cm、奥壁215cm、奥行274cmを測る。屍床は「コ」字形で各屍床には仕切を造り、排水溝も刻んでいた。左右の屍床に比べ奥屍床は約50cm程高く造られ、恐らく羨門天井とほぼ同位に造られていたものと思われる。天井は寄棟造で妻入りとなっている。

遺物 出土しなかった。



第58図 123号横穴実測図

124号横穴（図版6-1、2第59図）

123号横穴の西約20mに位置し、溜池堤防から120mの地に存在する。主軸をN46°Wにとり、北西に向けて開口していた。毎年、溜池に水没するため羨道を浸食により欠いているが、凝灰岩切石による閉塞石が盗掘のため引き倒された状態で検出された。羨道は床面幅100cmで、長さ350cmまで確認された。

その先は水際のため浸水し始め、時間がなくなり図化していない。しかし、5mまでは軽石角礫が層となして積まれており、別の横穴の閉塞石根固めであろうと思われ、礫層の一部を掘り下げたところ、明らかに別の横穴の羨道が切り込まれており、124号横穴より新しいことが確認され、125号横穴とした。

玄室は長方形で、幅は入口部分で238cm、奥壁190cm、奥行275cmを測るが、羨道とは僅かに方向が異なっているようである。屍床は「コ」字形で、各屍床には仕切を造っているが、一部破損している。屍床に比べ通路は深く、左右屍床から約40cm、奥屍床からは約50cmを測る。天井はドーム形である。

遺物 横穴内通路に、鉄器（9）1点が出土した他は、全て羨道より出土している。閉塞石の下からも須恵器が出土した。特に先端部は125号横穴の礫内からも多量に出土しており、その区別が現場では不明確であったが、明らかにこの横穴から出土したものについてのみ記しておき、他は、125号横穴として取り扱う。

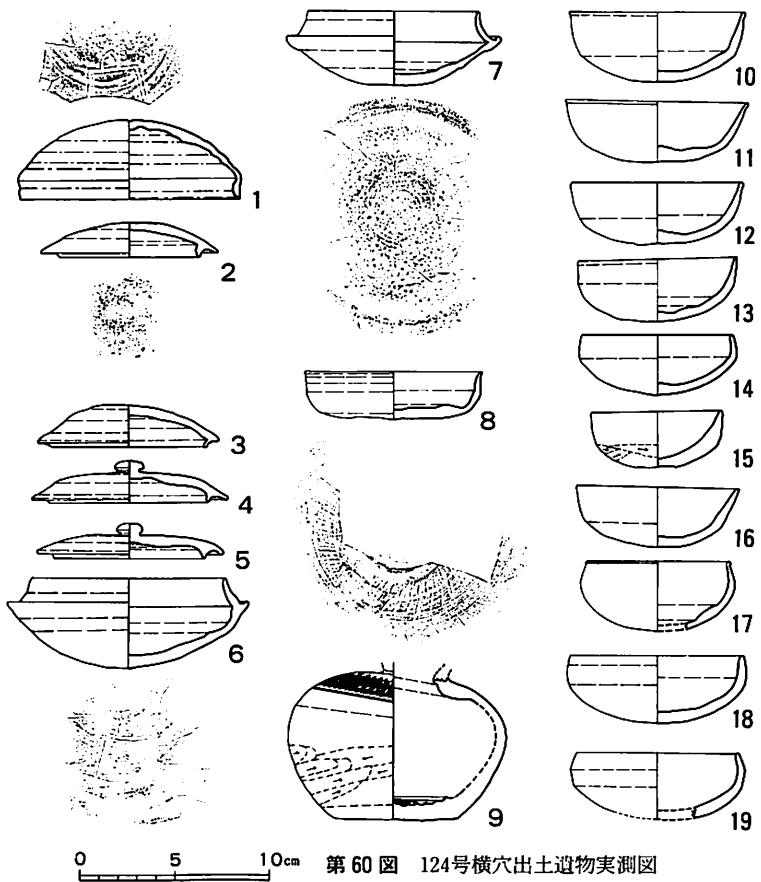


第59図 124号横穴実測図

須恵器 (図版12-13~19・13-1~3 第60図 1~9)

壺蓋 (1~5) 大きく3種が見られ、かえりを有しないもの (1)、かえりを有するもの (2・3)、かえりを有し、かつつまみを有するもの (4・5) に分けることができる。1は口縁部分の一部を欠くが、口径11.4cm、器高4.2cmになる。口縁部は肉厚で垂直に立ち、体部との接点は丸く脹んでおり、天井も大きく丸味をもっている。器面調整は全面ナデ調整で、外面には人物の抽象画のようなヘラ記号を書いており、壺身6と同一記号でセット関係が考えられる。胎土は砂粒を含まず、黄色と灰色の縞模様を呈している。焼成も良い。全体的に黄灰色をしている。2はかえりを有し、口径7.4cm、最大径9.4cm、器高1.9cm、かえり高0.5cmを測る。天井部は丸味を持つが、やや平坦で、内湾気味に口縁部へと開いている。かえりは内傾気味で短く、先端は山形を呈している。天井外面は回転ヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土は砂粒を含むが、焼成は良い。暗灰色をしている。内面にヘラ記号を有している。尚、口縁部には8cmの間隔を保ち、幅1.8cmと2.1cmの規模で欠けており、断面も手擦を生じているところから、拇指と人差指で挟みつけるように打ち欠いたものと思われる。3もかえりを有し、口径8cm、最大径9.6cm、器高2.2cm、かえり高0.2cmを測る。天井部は丸く、内湾気味に開き、かえりは内傾して短い。天井部外面は回転ヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。暗灰色をしている。4は口径8.2cm、最大径10.3cm、器高2.2cm、かえり高0.3cmを

測り、天井部に釦状のつまみを有している。天井部は平坦で、口縁部は外反気味に開いている。かえりは内傾して短く、器壁が全体に厚く仕上がっている。天井部は回転ヘラ削りで、他は全面ナデ調整である。胎土には僅かに砂粒を含むが、焼成はあまり良くない。黒色をしている。5は口径7.9cm、最大径9.9cm、器高1.9cm、かえり高0.4cmを測り、天井部には釦状のつまみを有している。天井部は平坦で口縁部は大きく開いている。かえりは短く、やや内傾している。器壁は全体に厚く仕上がっている。天井部は回転ヘラ削りで、他は



ナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成は良くない。暗灰色をしている。

坏身（第60図 6～8） 坏身は僅かに3個が出土した。

6は口径10.3cm、最大径12.9cm、器高4.8cm、立上り高1.4cmを測る。立上りは基部で内傾し、上部は直口し、器肉は薄い。受け部は内湾気味に開いていて、底部は丸底である。底部に回転ヘラ削りを残し、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、黄色と灰色の縞文様を呈している。焼成は良く、底部外面には人物の抽象画のようなヘラ記号を書いており、坏蓋（1）とセット関係と考えられる。7は口径9cm、最大径11.4cm、器高3.9cm、立上り高1.5cmを測る。立上りは反り気味に直口し、中位では肉厚になっている。受け部は内湾気味の開き、体部との接点は段を形成している。底部は小さく平坦になっている。底部は回転ヘラ削りで、他はナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。黒灰色をしている。底部にはヘラ記号を有している。8は、口径9.3cm、器高2.5cm、口縁部は外反気味で、胴部が張らみ底部は平底である。底部は回転ヘラ削り、他はナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良くない。褐色をしており、坏蓋1、もしくは2とセットになると思われる。

平瓶（第60図9）

一見壺と思えるが、口縁部が中心より僅かに移動し、胴部形成時の口縁部と、頸部接合時の中心がずれているところから平瓶であると判断した。口縁部を欠くため、口径、器高等不明。最大径は11.6cm、現高7.9cmを測る。肩部は大きく張り、丸味をもっている。底部は平底である。器面は肩部ではカキ目の後、列点文を施している。胴部ではヘラ削りが見られ、内面はナデ調整である。胎土は砂粒を含まず、焼成も良い。灰色をしている。

土師器（図版13-4～12第60図10～18） 全て小形の塊である。

10は半欠状態だが、口径9.3cm、器高3.7cmになる。口縁部は直口し、口唇部で僅かに反っている。底部は扁平な丸底で器壁が厚い。器面は全面ヘラ研磨で、口縁部は内面に黒漆が塗られている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。暗褐色をしている。11は口径9.7cm、器高3.3cmを測る。口縁部は僅かに内湾気味に開き、口唇部では小さく外反している。底部は扁平な丸底で、器壁はやや厚手である。器面は全面ヘラ研磨で、口縁部の両面に黒漆が塗られている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。黒色と茶褐色とに分かれ。12は口径9.1cm、器高3.3cmを測り、口縁部は内湾気味に直口する。底部は扁平な丸底で、器壁もやや厚手である。器面は全面ヘラ研磨で、内面と口縁部外面は黒漆塗りである。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。黒色をしている。13は口径8.6cm、器高3.3cmを測る。口縁部は直口し、底部は扁平な丸底である。器面はやや厚手で、全面ヘラ研磨を施している。更に全面黒漆を塗っていて、口縁部外面では枠圧痕も残っていた。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。黒色をしている。14は口径8cm、器高3.2cmを測る。口縁部は内湾し、底部は扁平で丸底である。器壁は薄く、底部ではヘラ削りの後、全面にナデ調整を行っている。口縁部の両面には黒漆を塗っている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。暗茶褐色をしている。15は口径6.9cm、器高3cmを測る。口縁部は直線的に僅かに開き、底部が粗いヘラ削りのため不整形な丸底で、口縁部との間に陵線を残している。底部以外はナデ調整で、口縁部にはススの付着が著しい。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。黒色と茶褐色に分かれている。16は口径8.5cm、器高3.3cmを測る。口縁

部はやや内湾気味に開き、口唇部では僅かに反っている。底部は扁平な丸底で、ヘラ削りを行った後、全面にヘラ研磨を施している。更に全面黒漆塗りである。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。黒色である。17は半欠状態だが、口径7.6cmで器高は3.7cm程度になる。口縁部は内傾し、底部は扁平な丸底になる。器面は全面ヘラ研磨で黒漆を塗っていた。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。暗茶褐色をしている。18も半欠状態だが、口径9.2cm、器高3.7cmになる。口縁部は内湾気味

に直口し、底部は扁平な丸底をしている。器面は全面ヘラ研磨で、口縁部では両面黒漆を塗っていた。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。暗褐色をしている。

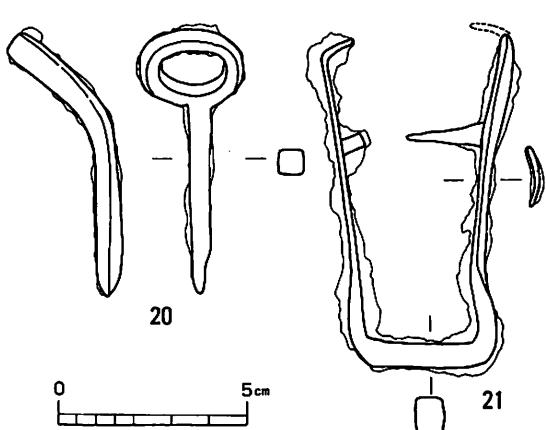
19は半欠状態だが、口径8.5cm、器高3.5cm程度になる。口縁部は短く、内傾し、底部は扁平な丸底になっている。器面は底部にヘラ削り、他は全てヘラ研磨を行っている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。暗茶褐色をしている。

鉄器（図版13-13・14第61図20・21）

20は横穴内通路より出土したもので、引手金具と思われる。全長7.9cmを測るが、環状部と棒状部の間は「く」字形に折れている。環状部は外径2.9cm、内径1.7cmを測る。棒状部の基部は尖っており、突刺して固定したものと思われる。21は羨門から3.5m離れた羨道から出土した鎧金具である。木芯鉄張壺鎧の上部金具で、両側から2本の鉢が出ていたことがうかがえる。先端は共に内側に折れて固定する。全長は8.8cmで、幅5.5cmを測る。なお125号横穴出土の鎧金具とセット関係の可能性が強い。

以上、遺物について述べたが、これらの出土状況を詳細に観察すると興味ある出土状況を示していることが判る。羨門に最も近い部分に須恵器（2～5・8）を置き（閉塞石下）、その先に土師器塊（10～18）を集中して置いている。とくに須恵器は最も手前に、つまみを有しない坏蓋（2・3）を置き、その先につまみを有する坏蓋（4・5）を置いている。また、土師器の先には、これらの須恵器より古い形式の須恵器（1・6・7・9）が散在している。しかし、125号横穴の遺物と混在する形で検出されており、125号横穴からの流入の可能性も無いとは言えない。

遺物の時期については、坏蓋は1がIII期に属し、2・3はIVB期、4・5はV期に分類される。坏身についても6・7はIIIB期に属している。土師器は出土状況からIIIB期の須恵器と混在するようにしておおり、この時期に位置づけられるものと考えられるが、類例が無く、判断しかねているところである。いづれにしても、遺物の出土状況から、IIIB期（6世紀後半）に横穴を築造し、その後IVB期（7世紀前半）とV期（7世紀後半）の2度にわたって追葬したものと考えられ、横穴築造から最終追葬の間は約1世紀にわたっている。



第61図 124号横穴出土鉄器実測図

125号横穴 (図版6-3)

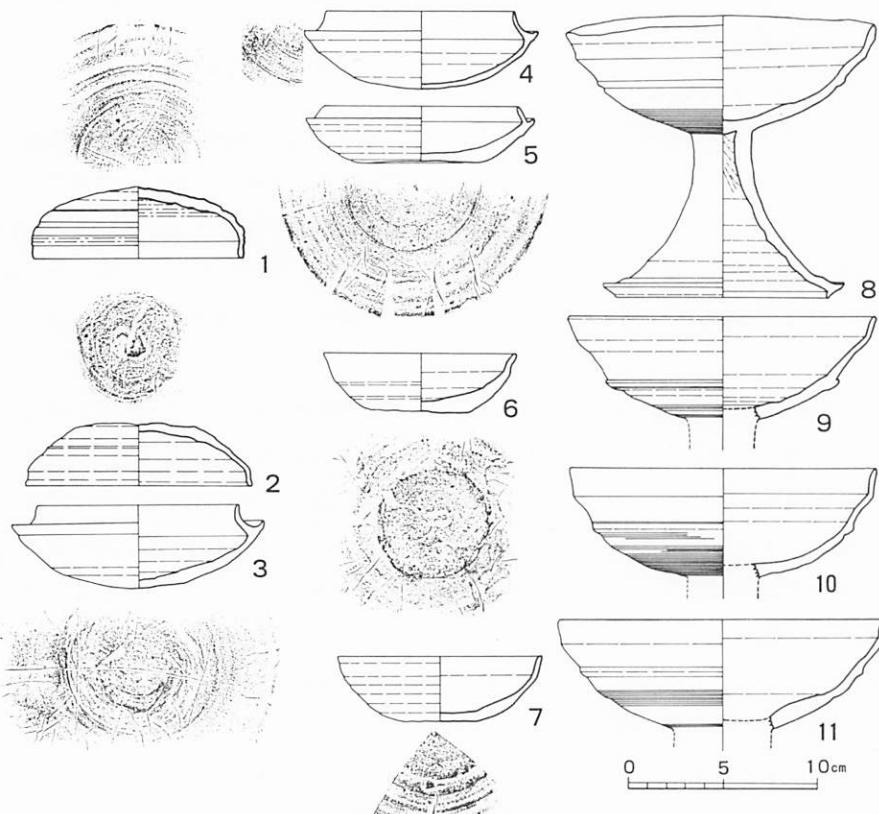
124号横穴の西隣で、横穴全体については浸水のため未調査であり、今後の調査で明らかにしたい。今回の調査では、羨道のみが確認されている。羨道については軽石角礫が層をなして積みあられ、その中に遺物が混在する形で検出された。ここでは遺物のみについて記しておく。

遺物 磚内では須恵器、土師器が多く出土したが、その多くは破碎され更に、磚と混在する状態で出土した。

須恵器 (図版13-15～22第62図～第64図) 坏蓋、坏身、高坏、壺、提瓶、甕等が見られ、このうち高坏と提瓶については赤焼けであった。

坏蓋 (1～2)

1は半次状態で、口径11cm、器高3.8cmになる。天井部は山形になり、口縁部との間に4本の沈線をめぐらしている。口縁部は肉厚で外反しており、かえりは無い。天井部は回転ヘラ削りで、他はナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。茶褐色をしており、天井部にはヘラ記号を有している。2も破片で口縁部の大半を欠いているが、口径12cm、器高3.3cmになる。天井部は小さな平坦部を有し、口縁部に向かって大きく開いている。口縁部は外反して、かえりは見られ



第62図 125号横穴出土遺物実測図

ない。天井部は回転ヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒をあまり含まず、焼成も良い。黒色をしている。天井部にはヘラ記号を有している。

坏身（3～7） 立上りを有するもの（3～5）、有しないもの（6・7）とに分けられる。

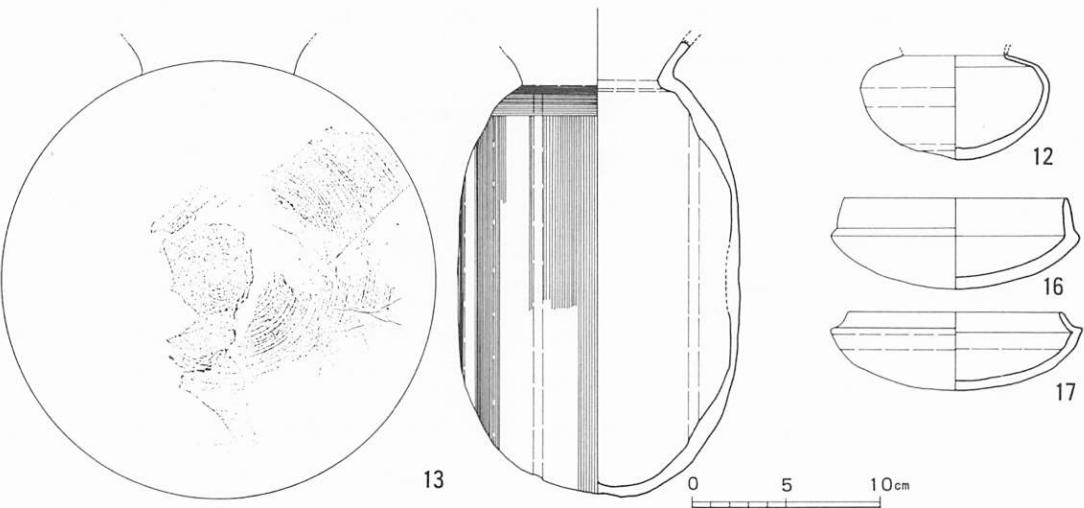
3は口径10.7cm、最大径13.4cm、器高4.4cm、立上り高1.2cmを測る。立上りは基部で大きく内傾し、中位から端部にかけて直口する形をとっている。受け部も内湾気味に直立している。底部は丸底で、平坦部は見られない。底部では回転ヘラ削りの後、不規則にヘラ削りを行っている。他は全てナデ調整である。胎土には砂粒が少なく、焼成も良い。鉄分を多く含むため茶褐色をしている。底部にはヘラ記号を有している。4は半欠状態だが口径10cm、最大径12.4cm、器高4.1cm、立上り高1.2cmになる。立上りは基部でやや内傾するが、端部は反り気味に直口している。受け部は内湾気味に開き、底部は僅かに平坦になっている。底部は回転ヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。暗灰色をしている。底部にヘラ記号を有している。5は口径10.3cm、最大径12.1cm、器高2.9cm、立上り高0.8cmを測る。立上りは短く、内傾している。受け部は大きく開いている。底部は平坦になり、4に比べると器高が低い。器面調整は底部に回転ヘラ削りを行い、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。暗灰色をしている。底部にはヘラ記号を有している。6は口径10.2cm、器高3cmを測る。口縁部は内湾気味に開き、底部は平底となる。器面は全面ナデ調整で、胎土には砂粒を含むが、焼成は良く、灰色をしている。底部にヘラ記号を有する。7は破片だが、口径10.8cm、器高3.4cmになる。口縁部は、内湾気味に大きく開き、口唇部では僅かに反っている。底部は平底で、器面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。明灰色で、底部にはヘラ記号を有している。

高坏（8～11） 4点とも無蓋高坏で、更に赤焼きであった。また3点については脚部を欠いていた。

8は坏部が歪んでいるが、口径16.2cm、器高14.7cm、裾部径12.7cmを測る。口縁部は肉厚で直口し、坏部中位には沈線をめぐらしている。脚柱状部は細く絞り上げていて、裾部が大きく開く。端部は僅かに反り上り、下部には、かえりが内傾している。器面調整は、坏部下位にカキ目を有し、他は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。赤褐色をしている。9は坏部のみで口径16.2cmを測り、他は不明である。口縁部は内湾気味に大きく開き、先端では直口している。体部との間には段を有し、体部は浅い。器面調整は、下位にカキ目を残し、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。赤褐色をしている。10も脚を欠いているため、口径16.2cmを測るのみである。口縁部下位は外反して開き、上位は直口している。体部との間には段をめぐらし、体部は丸味をもって脚へと続いている。器面調整は、坏部下位にカキ目を施し、他はナデ調整であった。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。赤褐色をしている。11は坏部片であるが、口径17.2cm程度になる。口縁部は内湾しつつ立上り、体部との間に段をめぐらしている。体部は曲線を描きながら脚部へと向かっている。器面調整は坏下位でカキ目を施し、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。赤褐色をしている。

壺（12）

12は口縁部を欠くが、恐らく有蓋短頸壺であろう。最大径は胴部上位に有し、直径10cm程度にな



第63図 125号横穴出土遺物実測図

り、肩が張っている。底部は丸底で、安定性に欠けている。器面調整は、底部外面で回転ヘラ削りを残し、他は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。灰色と暗茶褐色に分かれている。

提瓶（13）

赤焼けで、破片が細かく碎かれ、現場では提瓶と確認できなかったほどである。胴部と頸部の一部を残すのみで、図上での復元で最大径23cm、厚さ15cmになる。口縁部は先端を欠くが、大きく直線的に開いている。胴部は両側に僅かな平坦部を有しているが、球形に近い。器面調整は、口縁部と胴部内面はナデ調整、胴部外面はカキ目を全面に施している。胎土には砂粒を含まず、焼成は良い。赤褐色をしている。

甕（14・15）

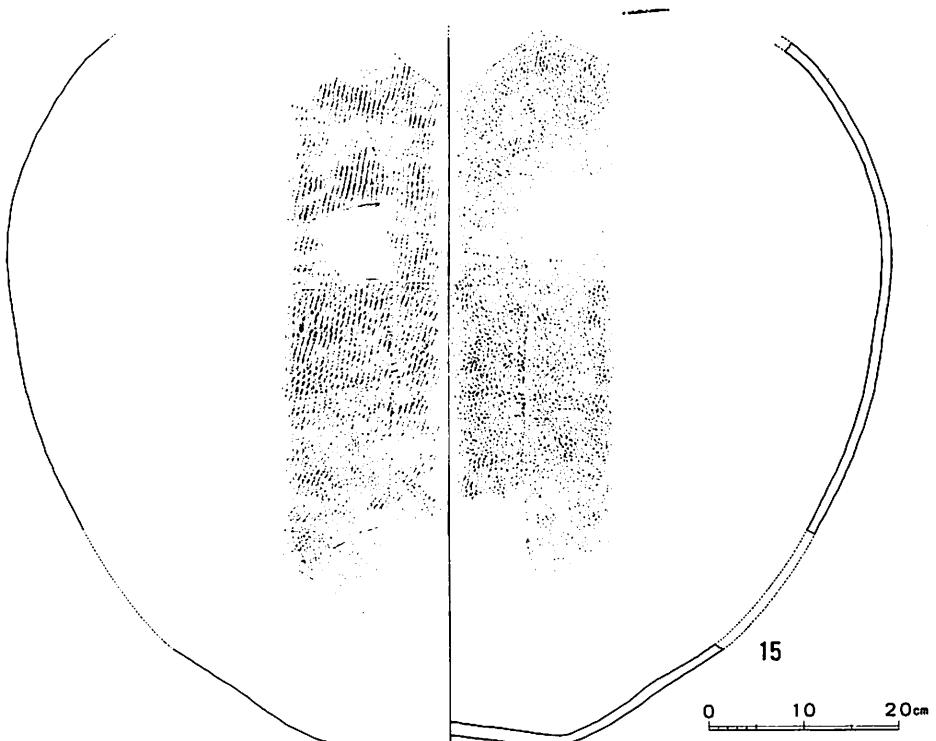
14は口縁部のみの破片で、口径22.4cmになる。口唇部は折り返して、下端部には沈線をめぐらせる。頸部は短く、外面はヘラ記号を2個有している。器面は全面ナデ調整で、胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。黒色をしている。

15は大甕胴部の破片である。口縁部を欠き、底部とも接点が見られず、図上復元を行った。そのため最大径112.6cmを測るのみである。胴部は球状をなし、肩部から胴部下位にかけては、自然釉が見られる。底部はやや上げ底になっており、安定性に優れている。器面調整は外面に格子目の叩き、内面は青海波状文を行っている。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。黒灰色をしている。

土師器（図版13-23・24第63図16・17） 坏身が見られ、全て全面黒漆塗りであった。

坏身（16～17）

16は口径11.8cm、最大径13.3cm、器高4.8cm、立上り高1.8cmを測る。立上りは僅かに内傾するが、



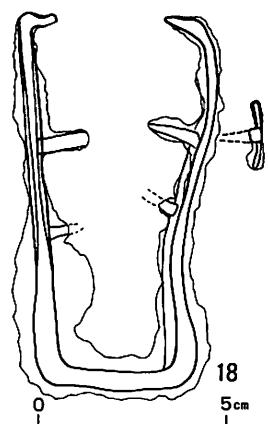
第64図 125号横穴出土遺物実測図

ほぼ直口して高い。受け部は小さく、段がめぐる程度である。底部は扁平な丸底で、器面は全面ヘラ研磨を行っている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。黒漆を塗っているため黒色をしている。17は口径11.3cm、最大径13.4cm、器高4.1cm、立上身高0.7cmを測る。立上りは短く内傾していて、受け部も僅かに段をめぐらす程度であった。底部はやや扁平な丸底で、全面をヘラ研磨で調整している。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。明茶褐色で黒漆の痕が見られる。

鉄器（図版13-25第65図18）

礫内から出土した唯一の鉄器で鎧金具である。124号出土の鎧金具と出土地点から1~2mしか離れておらず、セット関係の可能性が強い。木芯鉄張壺鎧の上部金具で、両側から2本の鉢が出ており、先端も内側に折れている。全長9.9cm、幅5cmを測る。

遺物は須恵器から、III B期とIV A期に分けることができた。III B期に属する須恵器は壺蓋1と2壺身3と4があり、土師器では壺身13が属するものと考えられる。IV A期に属するものは須恵器では壺身5、土師器では壺身14が属すると考えられる。



第65図 125号横穴出土
鉄器実測図

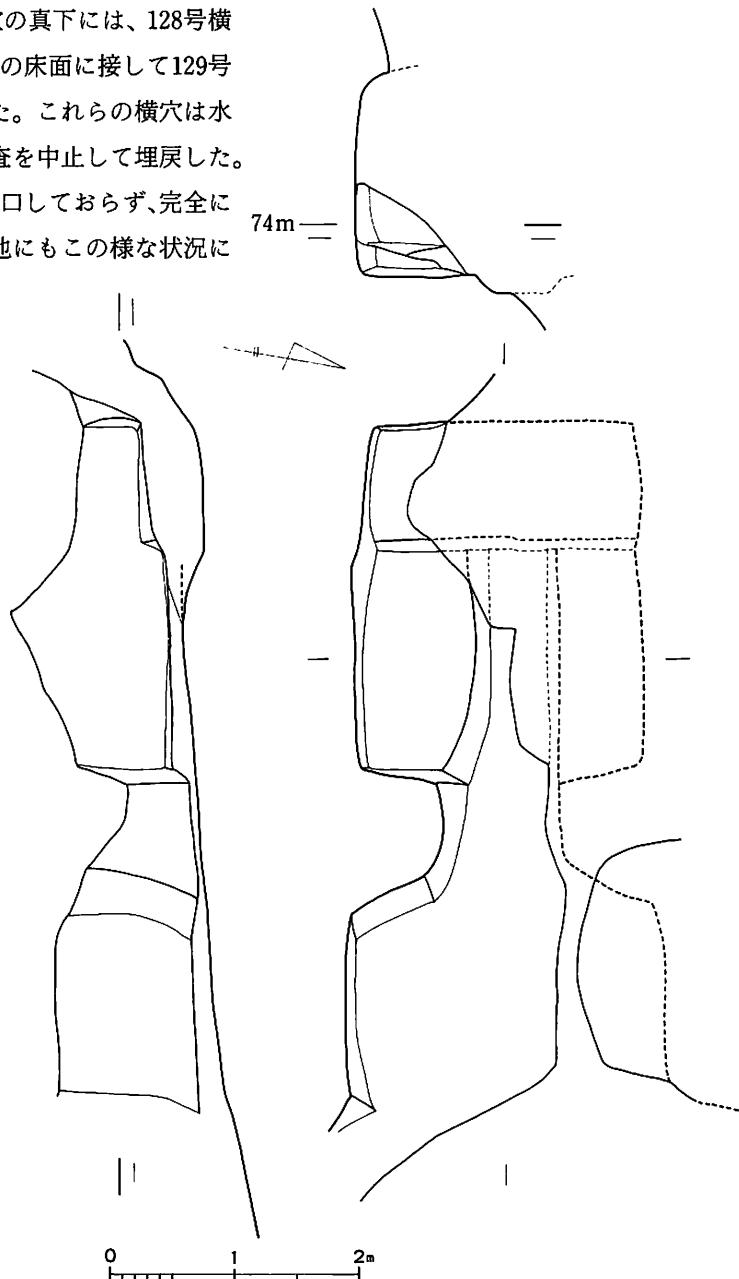
127号横穴（第66図）

溜池堤防から東へ約90mの位置に在る横穴で、南側山林から小さな尾根が溜池に向かって僅かに突き出した所に位置する。横穴の北側半分と天井の殆どを欠いているが、主軸をN81°Eにとり、ほぼ東に開口する横穴である。玄室は長方形で、左側壁274cmを測ることができ、壁面は直線的である。屍床は「コ」字形で仕切は見られない。天井は殆どを欠くため不明。尚、この横穴の真下には、128号横穴が北に向かって開口し、更にその床面に接して129号横穴が存在することが確認された。これらの横穴は水没しかけた状態であったので調査を中止して埋戻した。

特に129号横穴は溜池に面して開口しておらず、完全に土手の中に埋れた状態であり、他にもこの様な状況に

おける横穴の存在を示唆するものとして貴重な存在であった。このような横穴の在り方から考えると、127号横穴が掘られた尾根は、かつてはもっと先まで伸びていたものと推察された。それが溜池を築く際に削られ、今日のような状況になったものであろう。

遺物 出土しなかった。



第66図 127号横穴実測図

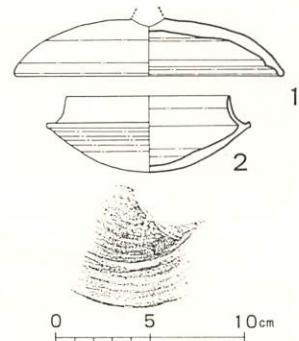
128号横穴（第67図）

127号横穴で述べたように、直下に129号横穴が確認されたが、水没のため128号横穴も含め実測できなかった。しかし遺物については2点採集されたので記しておく。

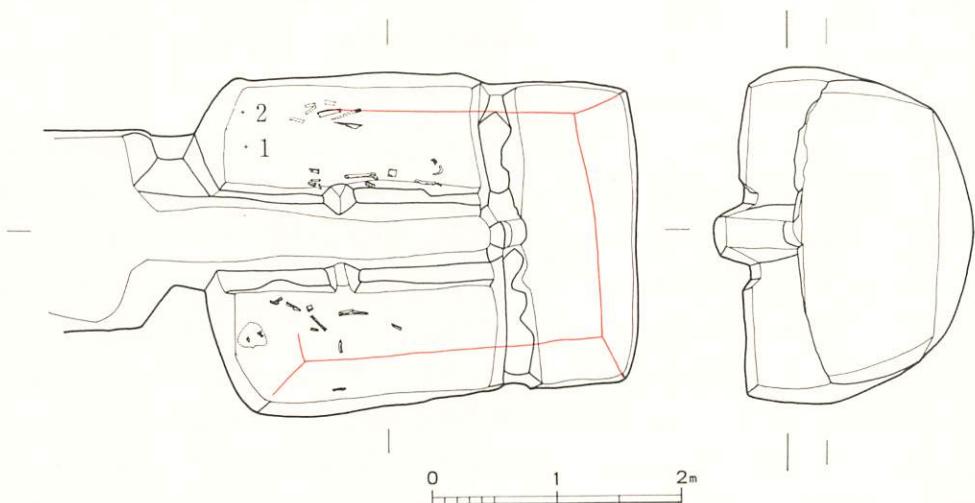
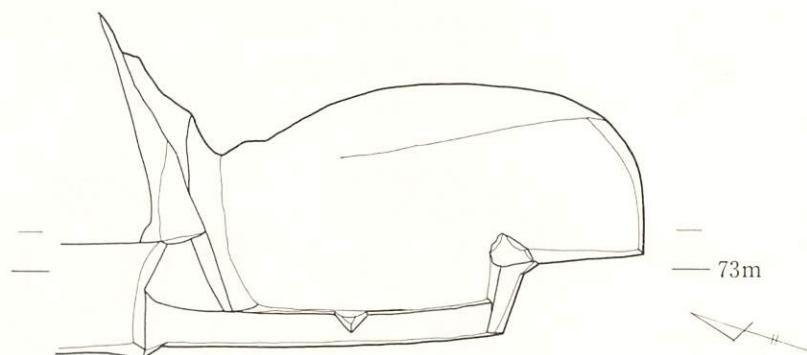
遺物 2点とも須恵器である。

1は半欠の壺蓋である。口径14.2cm、かえり高0.2cmで天井部にはつまみを有していたが、欠いているので、器高は不明。天井部はやや丸味をもち、口縁部は小さく、外反している。かえりは僅かに見られるが、極めて低い。天井部は回転ヘラ削りで、他は全てナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。暗灰色をしている。

2は壺身の破片である。口径8.7cm、最大径10.8cm、器高4cm立ち上り高1.5cmになる。立上りは基部で内傾し、中位から直口していて器肉は薄い。受け部は小さく、水平になっている。底部は丸底である。全面ナデ調整で、胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。暗灰色をしている。底部にヘラ記号が見られる。



第67図 128号横穴出土遺物実測図



第68図 130号横穴実測図

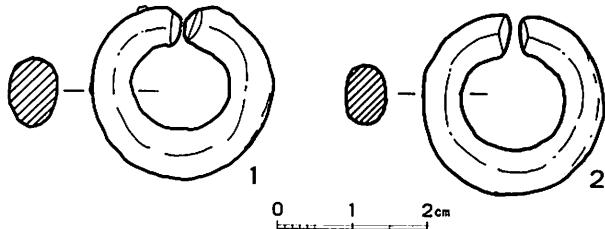
130号横穴（第68図）

127号横穴の西側10mに位置し、131号横穴から134号横穴へと続く。この横穴は、131号・132号横穴と共に、崖面が僅かに凹んでいる程度であったが、横穴が存在するだろうと掘り下げたところ発見されたのである。残念なことに、すでに盗掘を受けており、羨門の一部を破損していた。尚、閉塞石は確認できなかった。主軸はN18°Wにとり、北北西に向けて開口していた。玄室は大きく、入口部分で幅270cm、奥壁で231cm、奥行327cmを測り、隅丸気味の長方形を呈していた。屍床は「コ」字形で仕切を造り、その中央には排水溝を刻んでいる。奥屍床は左右屍床に比べると、かなり高く、通路から55cmの高さに造られ、排水溝も仕切のみならず、通路に面した部分まで掘り込みがみられた。天井はドーム形だが、奥壁及び左右壁面には軒先線を描いていた。

遺物（図版14-23～24・第69図） 左屍床から3体分の人骨と耳環2個が出土した。特に耳環は、羨門側で25cmの間隔を置いて平行な状態で出土した。右屍床からは人骨5体分が検出されたが、いずれも人骨の状態は極めて悪かった。1は右耳に飾られた耳環である。最大径2.48cmの銅地金張りで、僅かに金を残しているが、全体は緑青色をしている。2は左耳に飾られた耳環である。最大径2.46cmの銅地金張りで、僅かに金を残したのみで、殆んど緑青ばかりである。これら耳環がどの人骨に共伴するかについて考えてみると、1号人骨は奥屍床側に頭を向けているところから、2号人骨もしくは3号人骨の可能性が強い。しかし、現状では断定するには至ることはできないが、追葬の段階で人骨が押されて耳環のみが現位置を保っていたものと推察された。

131号横穴（図版7・8-1 第70図）

130号横穴の西隣で、132号横穴との間に挟まれた位置にあり、溜池堤防から東側に約70mの所にある。この横穴は今回調査した横穴の中で、唯一の処

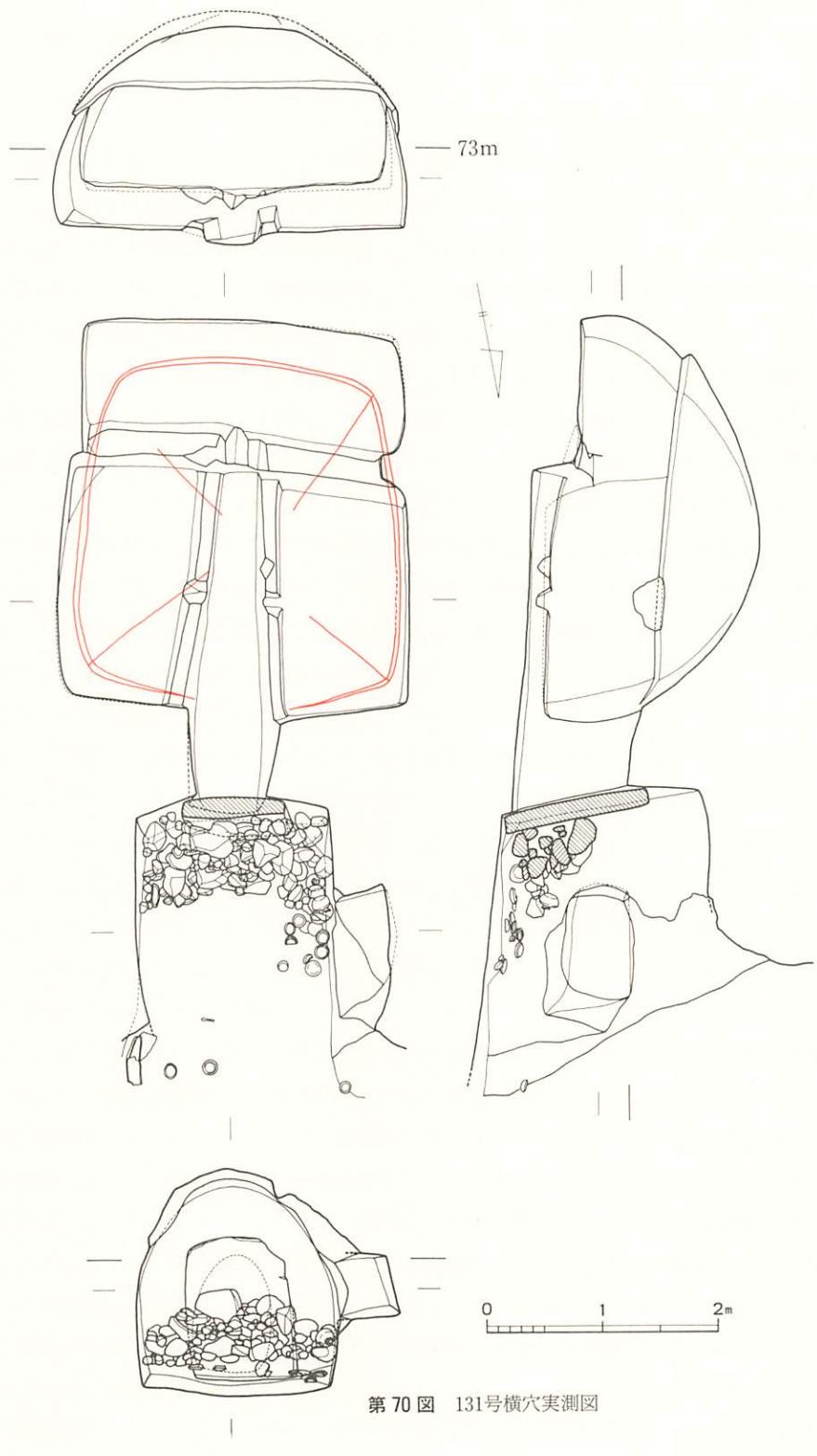


第69図 130号横穴出土耳環実測図

女墳であった。主軸はN10°Eにとり、ほぼ北に向って開口するように造っていた。羨門には凝灰岩切岩による閉塞石を立てかけ、周囲には根固のために凝灰岩角礫を積み上げていた。羨門右側飾縁には、床面から55cmの高さに、長さが100cm、高さ55cm、奥行45cmの張り出しが造られている。羨門はアーチ形で、幅67cm、高さ103cmで、玄室まで約75cmを測る。玄室は長方形のプランで、入口部分で幅292cm、奥壁266cm、奥行は336cmを測るが、羨門に対して、少し右に傾いた状態で造られている。屍床は「コ」字形で、各屍床には仕切を造り、中央には排水溝を刻んでいた。天井には軒先線を描き、隅棟線も4本見られるが、棟が無いため寄棟造りとドーム形の中間を示している。

なお、羨門上面には朱の痕跡が見られたが、装飾であるか否かについては、判断できなかった。

遺物 全て羨門部から出土した。前庭部近くから出土したものもあるが、多くは閉塞石根固の礫と共に混在する形で出土し、右側に多く集まって見られた。遺物としては、須恵器が殆んどで、他



第70図 131号横穴実測図

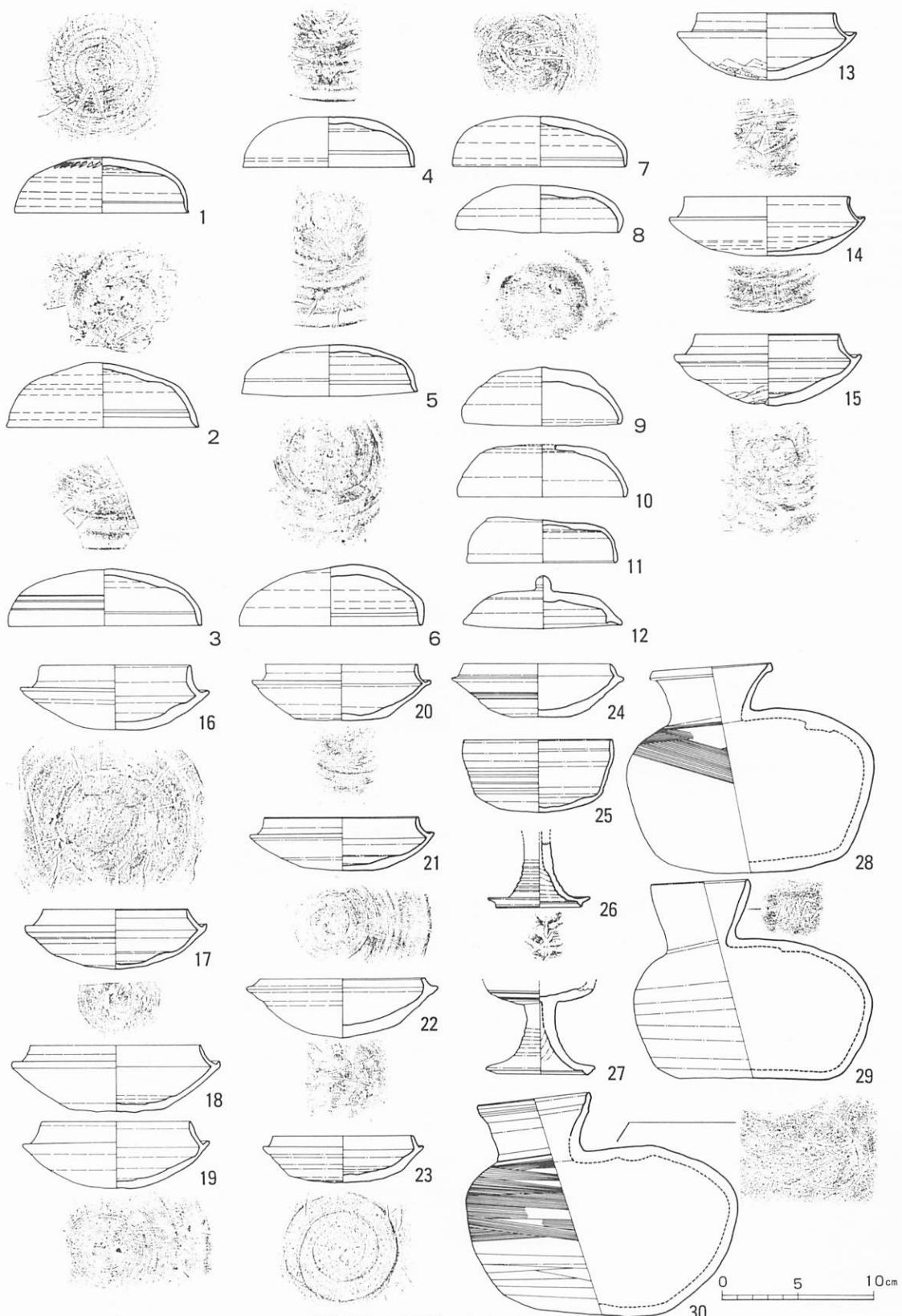
には僅かに土師器と鉄鏃が各1点出土している。

須恵器（図版14-1～20第71図～第72図31）

須恵器は、坏蓋（1～12）、坏身（13～25）、高坏（26～27）、平瓶（28～30）、大甕（31）が見られる。

坏蓋（図版14-1～7 第71図1～12）

1は、口径11.6cm、器高3.7cmを測る。口縁部は僅かに外反し、天井は丸味を帯びている。天井部外面の1/3に回転ヘラ削りを行い、その後浅い刻目を施している。他は全面ナデ調整である。胎土には砂粒をあまり含まず、焼成も良い。明灰色をし、坏身13とセットであろう。ヘラ記号は同じである。2は破片だが、口径12.7cm、器高4.3cmになる。口縁部は肉厚になり、内面では直下に浅い凹みがめぐっている。天井は丸味をもち、外面では回転ヘラ削りが見られる。他は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含み、焼成も良い。鉄分を多く含んでいるため茶褐色をしている。ヘラ記号を有している。3も破片だが、口径12.8cm、器高3.7cmになる。口縁部は肉厚になり、内面には段を有している。天井はなだらかな曲線を描いている。天井部は不規則なヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良い。暗茶褐色をしている。ヘラ記号を有している。4も破片だが、口径11.4cm器高3.3cmになる。口縁部は肉厚で、僅かに反っており、天井部は平坦に近く、不規則なヘラ削りを施し、他は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。光沢をもった茶褐色をしている。5は口径11.6cm、器高3.4cmを測る。口縁部は僅かに肉厚となり、天井は平坦に近くなっている。天井は回転ヘラ削りで、他は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。灰色をしている。坏身（20）とセットであろう。ヘラ記号は同じである。6は口径12.1cm、器高4cmを測る。全体に肉厚で、天井部は変形している。天井は回転ヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。自然釉が見られ、光沢のある茶褐色と緑灰色が見られる。ヘラ記号を有している。7は口径11.4cm、器高3.3cmを測る。口縁部の立ち上りが小さくなり、天井も平坦に近くなっている。天井部は回転ヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成は良い。緑灰色をして、ヘラ記号を有している。8は正円にならず歪んでいるが、最大口径10.7cm、器高3.2cmになる。口縁部は内湾し短い。天井との間には凹線をめぐり、平坦な天井へと続いている。天井部は不規則なヘラ削りで、他はナデ調整である。器壁は比較的厚く、仕上がりは粗末な感じを与える。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。暗灰色をしている。なお内面にヘラ記号を有している。9は口径10.3cm、器高3.9cmで器壁は厚い。口縁部は内湾し、天井は口径に比べ高く、平坦に近くなっている。口縁部との間には段を有している。天井部は不規則なヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良い。暗灰色をしている。10は破片だが、口径は11cm、器高は3.4cmになる。口縁部はやや内湾し、天井は平坦になっている。天井部は回転ヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は良く、灰色をしている。11は口径9.7cm、器高3cmを測る。口縁部は直口し、天井は平坦である。天井部は回転ヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成は良い。暗灰色をしている。12は乳頭状のつまみを有する坏蓋である。内面には立ち上りを有し、口径8.4cm、最大径11.5cm、器高3.5cm、かえりは短く0.1cmとなっている。天井部は平坦に近く、中央につまみを貼り付けている。天井部は回転ヘラ削



第 71 図 131号横穴出土遺物実測図

りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。明灰色をしている。

坏身（図版14－8～15第71図13～25）

13は口径9.1cm、最大径11.8cm、器高4.4cm、立ち上り高1.5cmを測る。底部は丸く、受け部は内湾氣味である。立ち上りは高く直立して、先端は山形をしている。底部近くで、不規則なヘラ削りを行い、他は全てナデ調整である。胎土には砂粒をあまり含まず、焼成は良い。明灰色をしている。ヘラ記号を有し、坏蓋1とセットと考えられる。14は口径10.9cm、最大径13cm、器高9cm、立ち上り高1.5cmを測る。底部は平坦で、受け部は内湾氣味に立っている。立ち上りは高く、反り氣味に直立して、端部は山形をなす。底部は不規則なヘラ削りを行い、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。茶褐色をしている。ヘラ記号を有している。15は口径9.5cm、最大径12.4cm、器高4.7cm、立ち上り高1.6cmを測る。赤焼けである。底部は丸く受け部は開き氣味に立っている。立ち上りは高く、反り氣味に直口している。底部で不規則なヘラ削りが見られるが、他は全てナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含まず、焼成もよい。赤褐色をしている。ヘラ記号を有している。16は口径9.9cm、最大径12.6cm、器高4.2cm、立ち上り高1.8cmを測り、器壁は厚い。底部は小さな平坦部を有し、受け部は大きく開いている。立ち上りは高く、直口氣味で、肉厚である。底部に不規則なヘラ削りを行い、他は全てナデ調整である。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。明灰色をして、かすかにヘラ記号を有している。17は半欠であるが、口径9.6cm、最大径12cm、器高3.9cm、立ち上り高1.2cmになる。底部はやや平坦で、受け部は内湾氣味に立っている。立ち上りは直線的に内傾し、先端は山形となっている。底部は回転ヘラ削りで、他はナデ調整を行っている。胎土には砂粒を含まず、焼成は良い。青灰色をしている。ヘラ記号を有しているが、破片のため、形は不明。18も半欠であるが、口径11.3cm、最大径13.8cm、器高4.4cm、立ち上りは1.3cmになる。底部は平坦で、受け部は立っている。立ち上りは僅かに内傾しているが、反り氣味である。底部は回転ヘラ削りを残し、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。内面は鉄分が多く、茶褐色をしているが、外面は灰色であった。19は口径9.8cm、最大径12.4cm、器高4.5cm、立ち上り高1.5cmを測る。底部は丸く、受け部は開き氣味に立っている。立ち上りは直線的に内傾している。底部は回転ヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は良い。灰色をし、ヘラ記号を有している。20は口径10cm、最大径11.3cm、器高3.7cm、立ち上り高1.2cmを測る。底部は平坦で、受け部は内湾氣味に立っている。立ち上りはやや短く、直口氣味である。底部は回転ヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。暗灰色をしている。ヘラ記号を有し、坏蓋5とセットであろう。21は口径10.2cm、最大径12.2cm、器高3.5cm、立ち上り高1.1cmを測る。底部は平坦に近く、受け部は大きく開いている。立ち上りは短いが、反り氣味に直口している。底部は回転ヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。明灰色をしており、ヘラ記号を有している。22は口径10.8cm、最大径12.7cm、器高4cm、立ち上り高0.5cmを測る。全体に摩滅が著しく、器面はツルツルである。底部は丸味があり、受け部は横に広がっている。立ち上りは短く、内傾していて、端部は内側にカットされている。器壁は全体に厚く、底部は回転ヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒をあまり含まず、焼成は良い。灰色をしている。ヘラ記号を有している。23は口径9.2cm、最大径10.7cm。器高3.1cm、立ち上り高0.8cmを測る。

底部は平坦で、受け部は大きく開く。立ち上りは短く、直線的に内傾する。底部は内から外に回転するヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒を多く含むが、焼成は良い。暗褐色をしている。24は口径9.7cm、最大径11.4cm、器高3.5cm、立ち上り高0.8cmを測る。底部は平坦で、受け部は水平となっている。立ち上りは短く、内傾している。底部は左回転ヘラ削りで、他は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。茶褐色をしている。25は赤焼け土器である。口径9.8cm、器高4.8cmで、胴部に4本の沈線をめぐらしている。底部は丸味をもった平底で、胴部との接点に糾圧痕を残している。器面の底部は、回転ヘラ削りで、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成は良い。赤褐色である。

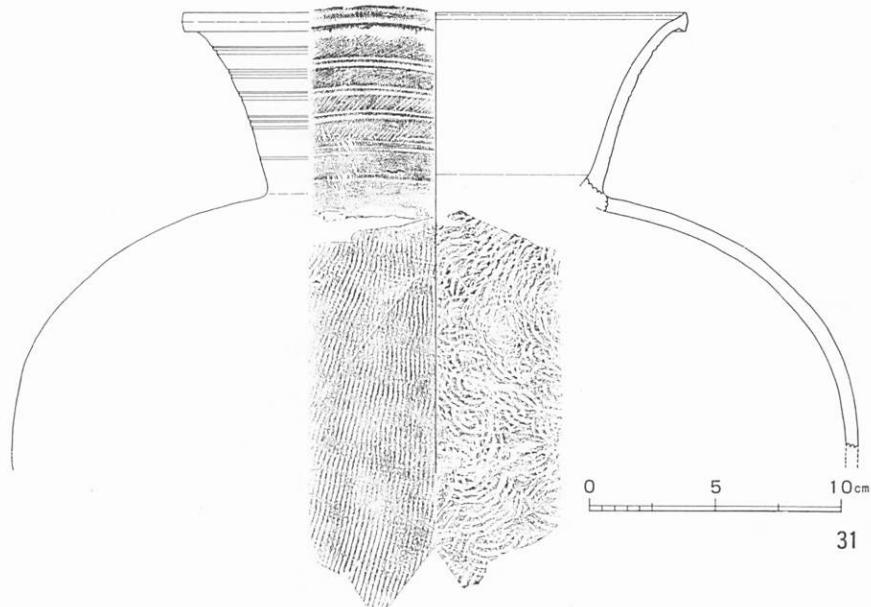
高坏（図版14-16・17第71図26・27）

26は坏部を欠いた小形の無蓋高坏である。裾部径6.8cm、かえり部径5.7cmを測る。柱状部は絞りが強く、螺旋状の凹線がめぐっている。裾部は大きく開き、端部はやや上方に大きく広がり、かえりが垂直に伸びている。内面にはヘラ記号を有している。器面は全面ナデ調整で、胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。鉄分を多く含むため茶褐色で、光沢がある。27は小形の無蓋高坏であるが、赤焼けである。坏部口縁部を欠くが、体部は水平に開き、坏身25のような形になる。脚柱部は絞りあげており、26と同様に螺旋状の凹線がめぐっている。裾部は大きく開き、端部では水平に尖り、かえりが僅かに見られた。坏部下位にカキ目が見られ、他はナデ調整である。胎土には砂粒を含まないが、焼成は悪く、器面の粗れが見られる。赤褐色をしている。

平瓶（図版14-18~20第71図28~30）

28は口縁部の一部を欠くが、口径7.8cm、最大径16.3cm、器高13.7cmを測る。口縁部は外反気味に立ち上り、口唇部では三角形を呈している。胴部は全体に丸味を呈し、底部も平坦になっていない。肩部と底部近

くでカキ目を
施し、その後
全体ナデ調整
を行っている。
胎土には砂粒
を含むが、焼
成は良く、黒
色をしている。
29は口径6.3
cmで、最大径
15.8cm、器高
13.1cmを測る。
口縁部は直口
気味に開き、
端部は山形を



第72図 131号横穴出土遺物実測図

している。外面には浅いヘラ記号を有している。胴部の張は小さくて丸く、底部は平底で、指圧痕を残している。器高は全面調整である。胎土に砂粒を含むが、焼成は良く、黒灰色をしている。30も口縁部の一部を欠いているが、口径7.4cm、最大径17.9cm、器高15cmになる。口縁部は内湾気味に開き、口唇部直下には2条の浅い凹線をめぐらしている。肩部は大きく張り、上面にヘラ記号を有している。口縁部はナデ調整で、胴部にはカキ目、底部はヘラ削りを施している。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良い。灰色をしている。

甕（第72図31）

31は赤焼の大甕である。口縁部と胴部とは接合しなかったが、明らかに同一物であるので、図上での接合を行った。口縁部と胴部中位までしか残っていなかったため、口径40cmを測るのみである。頸部から外反しつつ大きく開いた口縁部は、口唇部で三角形の断面を呈している。外面にはヘラによる斜行文を4段めぐらし、その間には2本の沈線を4段にめぐらしている。胴部は肩の張った感じで丸く、外面には格子叩き目、内面には青海波状文を施している。胎土には砂粒を含み、焼成も良い。赤褐色を呈している。

土師器（図版14-21第73図32）

羨道右側最前より出土したもので、この横穴からは、唯一の土師器であった。口径9.8cm、器高4.2cmの碗である。口縁部は僅かに内傾しており、最大径を体部との接点に有している。底部は丸味を持っており、安定性に欠ける。器壁は全体に厚く、全面ヘラ研磨調整を施し、外面では黒漆を残している。

鉄器（図版14-22第74図33）

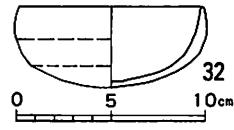
鉄鎌が1点、羨道中央より出土した。尖根式の鎌で、茎先端を欠いているが、現長12.1cmを測り、ほぼ完全な姿をとどめている。茎と鎌被の間には棘突起を有し、鎌被は長さ8.4cmで、幅5mm、厚さ3mmの方形を呈している。関を両側に小さく有し、身はふくらみのある柳葉形式で、長さ2.2cm、幅1cmで片丸造となっている。

これらの資料は、形式から3期に分けることが可能であるが、出土状況から追葬の時点で須恵器が移動した可能性が強く、層位的に把握することはできず、混在する状態であった。

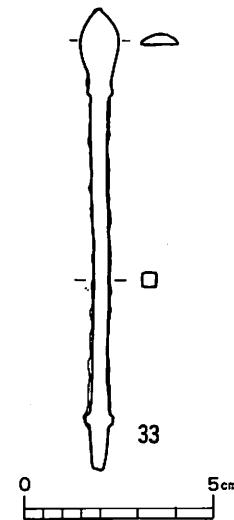
須恵器はIII B期、IV B期、V期とに分けられる。III B期は1~7、14~19、25~27が属し、IV B期は8~10、20~22が属する。V期は11・12・23・24が属している。これらのうち、とくに25~27については裾部の特徴などから、八女市塚の谷4号窯出土遺物との関係を窺うことができる。^{註1}

これによって横穴築造はIII B期（6世紀後半）で、その後IV B期（7世紀前半）とV期（7世紀後半）の2度にわたる追葬を推察することができる。

註1 小田富士雄、「塚の谷窯跡群」八市教育委員会 1968



第73図 131号横穴出土
遺物実測図



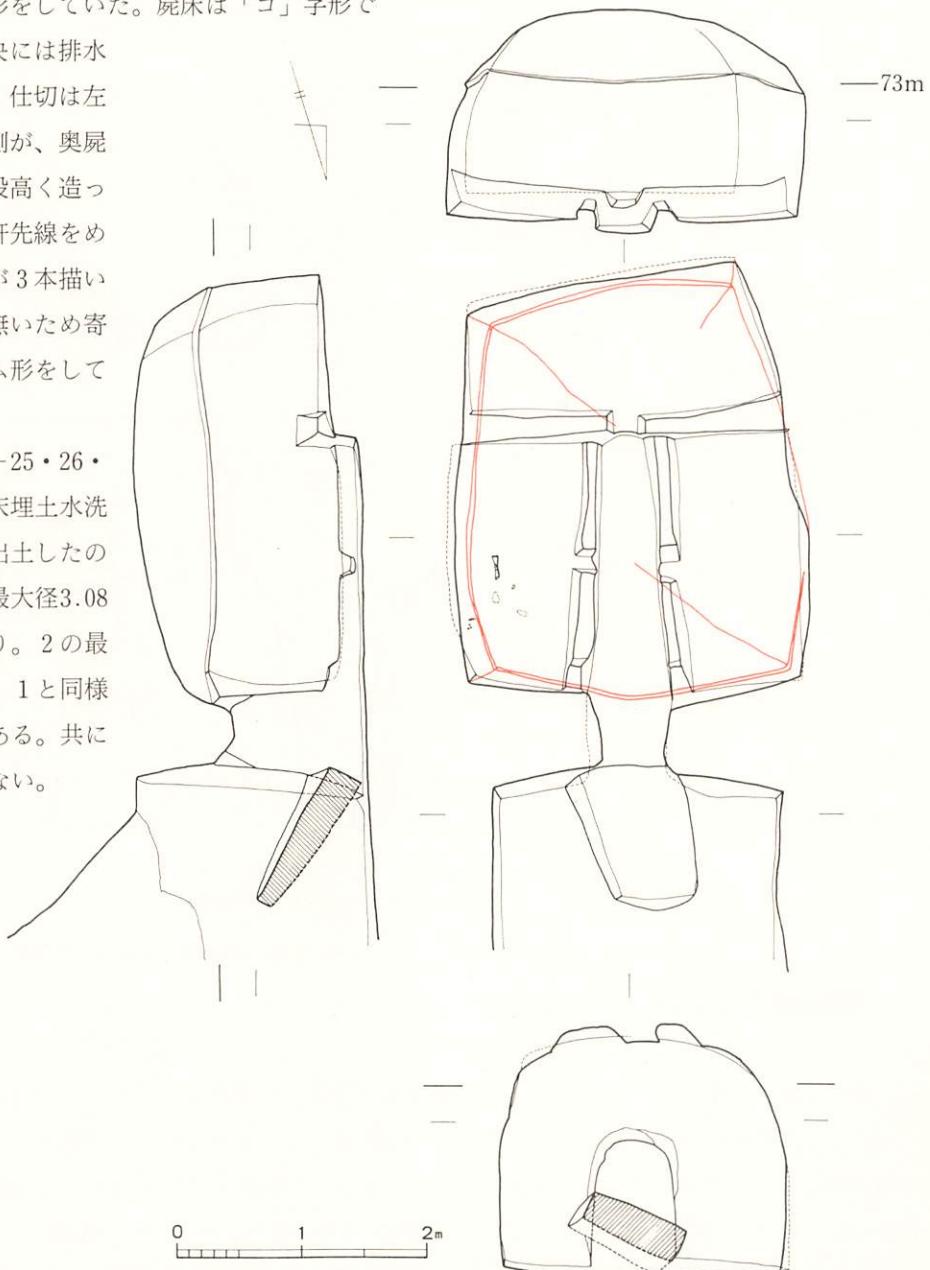
第74図 131号横穴出土
鉄器実測図

132号横穴（図版8-2～3第75図）

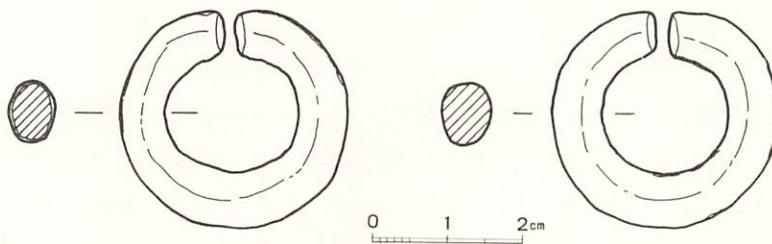
131号横穴の西側に並ぶように存在している。主軸はN16°Eにとり、北北東に向って開口していた。羨門には凝灰岩切石による閉塞石が手前に引き倒された状態で検出され、周囲では、131号横穴で見られたような根固石は見られなかった。羨門はアーチ形で幅66cm、高さ103cmで、玄室まで85cmを測る。玄室は入口部分で幅267cm、奥壁220cm、奥行335cmで右側壁が左側に曲がっているため、やや変形した長方形をしていた。屍床は「コ」字形で

仕切を造り、中央には排水溝を刻んでいる。仕切は左右屍床では羨門側が、奥屍床では両端を一段高く造っていた。天井は軒先線をめぐらし、隅棟線が3本描いてあるが、棟が無いため寄棟造に近いドーム形をしていた。

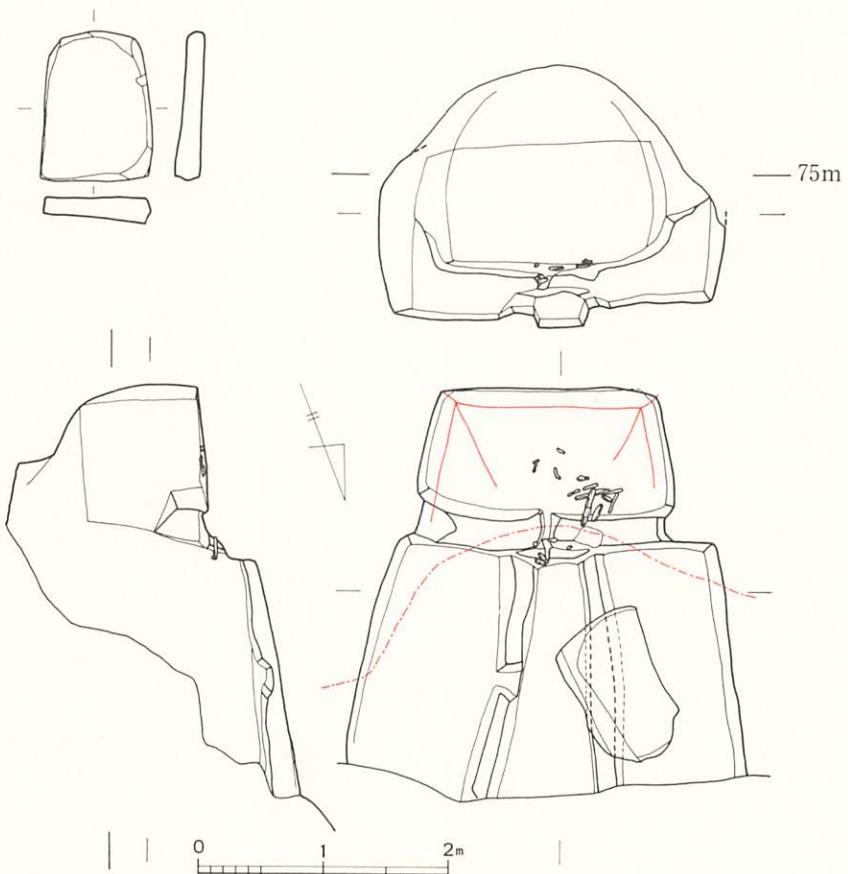
遺物（図版14-25・26・第76図） 奥屍床埋土水洗中に金環2個が出土したのみである。1は最大径3.08cmで鉄地金張り。2の最大径は3.02cmで、1と同様鉄地金張りである。共に保存状態は良くない。



第75図 132号横穴実測図



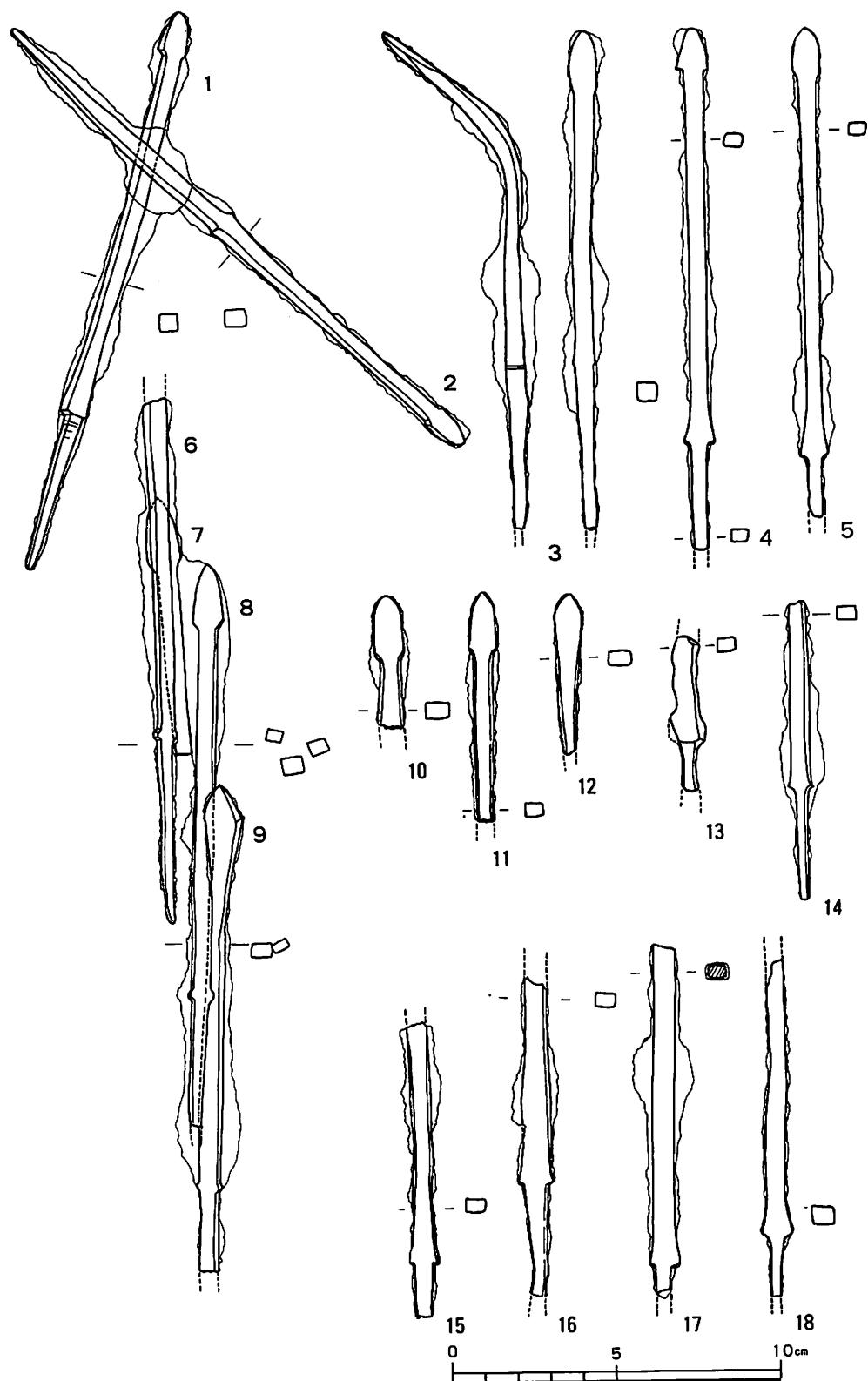
第76図 132号横穴出土耳環実測図



第77図 133号横穴・閉塞石実測図

133号横穴（図版8-2～3 第77図）

溜池堤防から東に50mの所に小さな尾根が溜池に向って岬状に突出している。132号横穴の西側にあたり、周囲には横穴が数基存在している。133号横穴はこの東側基部に位置する。毎年水没するため浸蝕により羨門及び天井の殆んどを欠いているが、主軸はN21°Eにとり、北北東に向って開口している。玄室は台形のプランで、僅かに奥壁幅173cmを測るのみである。屍床は「コ」字形で、右側屍床から通路にかけて凝灰岩切石の閉塞石が倒れていた。屍床には仕切を造り、中央に排水溝を刻んでいる。尚右側屍床では排水溝は見られなかった。天井はドーム形だが、奥壁には軒先線と隅棟



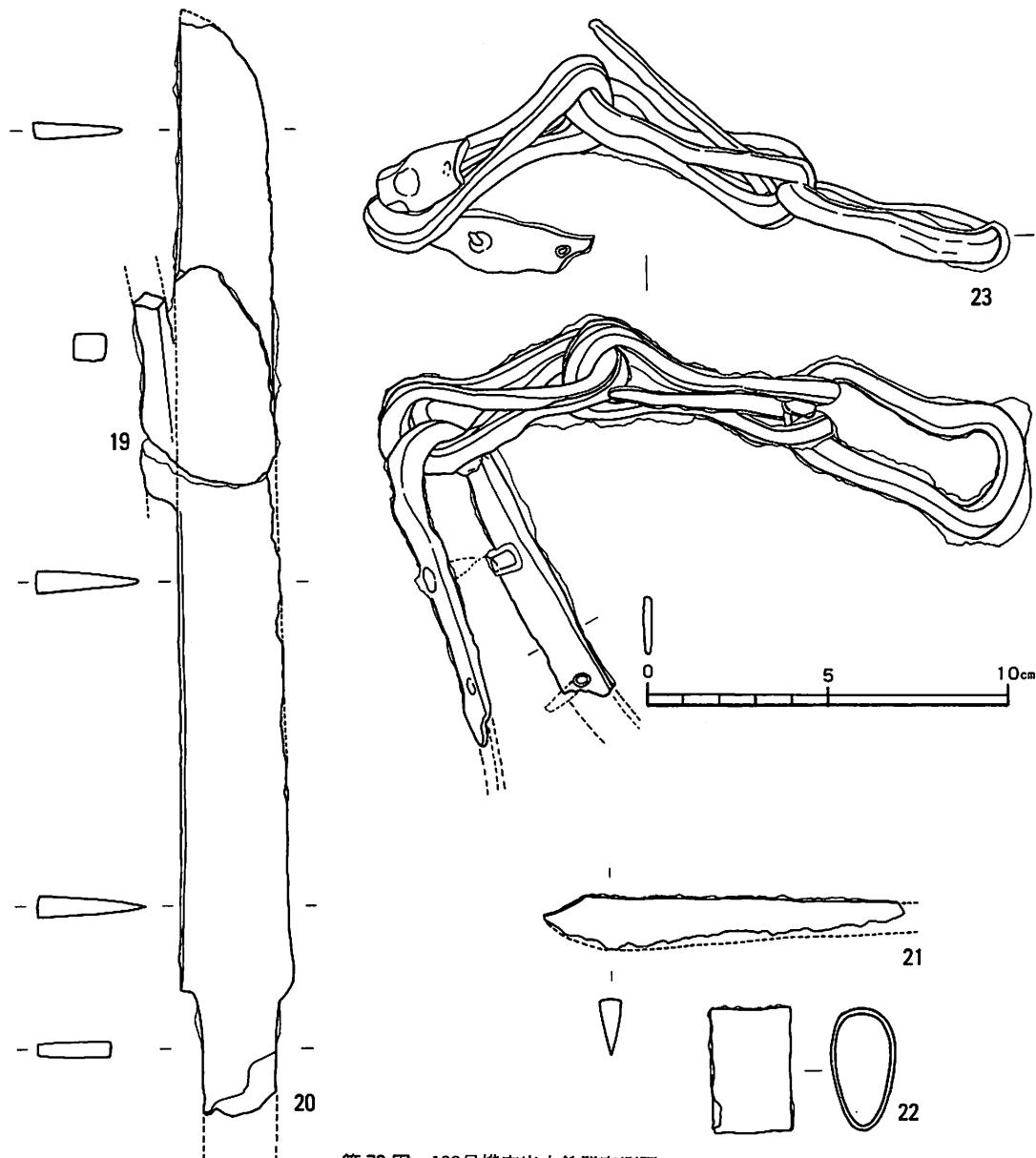
第78図 133号横穴出土鉄器実測図

線を描いている。

遺物 奥屍床から集中して鉄器が出土している。中には床面より僅かに高いものや、通路の上に位置するものも見られるところから、鉄器の現位置は保たれていないものもあると考えられた。

鉄器（図版15第78・79図） 武具として鎌（1～19）、直刀（20）、刀子（21）が出土し、馬具として鐙（23）が出土している。

鉄鎌（図版15-1～6 第78図1～第79図19） 全て尖根式であるが、全体に鏽がひどく保存状態はかなり悪くても良いとはいえない。1と2は「×」状に交叉して接合している。1は全長17.5cmで茎まで完全に残っている。範被は長く11.2cmを測る。関は小さく身は柳葉形に近い。2は全長



第79図 133号横穴出土鉄器実測図

18.6cmで完全な姿で残っていた。笠被は8.6cmで、1に比べると茎は長い。関は小さく身は柳葉形となっている。3は笠被上部から「く」字に曲がり、茎先端を欠いており現長16.8cmを測る。4は茎の上部が僅かに曲がり、更に先端を欠くが現長15.8cmを測る。笠被は長く11.3cmになり、身は三角形である。5も茎先端を欠き現長14.8cmを測り、笠被は11.4cmになる。関は小さく身は柳葉形である。6～9は同一方向に身を向け、少しずつずれた状態で接合している。全て笠被下端には棘突起を有していた。6は笠被上位から身にかけて欠いており、現長15.9cmを測る。7は笠被下位を欠き、現長7.8cmで、この中では一番短く、身は柳葉形である。8は茎先端を欠き、現長17.1cmで、笠被は10.9cmになる。身は柳葉形である。9も茎先端部を欠き、現長14.7cmを測り、関は無い。身は圭頭形である。10は身と笠被上位のみで、現長4cmを測り、身は柳葉形である。11も笠被中位から下を欠き、現長6.9cmを測る。関は小さく身は柳葉形をしている。12は圭頭式の身で茎を欠いている。現長4.9cmを測る。13～18は笠被下部から茎上部にかけて残り、13は現長4.6cmを測る。14は現長9cmで、茎が細くて長い。15は現長9cmで、笠被は小さく逆刺を作っている。16は現長9.7cmを測り、茎が少し曲がっていた。17は殆ど笠被ばかりで、現長10.7cmである。18も笠被と茎の一部で棘突起も見られ、現長10.2cmになる。19は直刀背に接合した笠被で、現長6cmを測る。

直刀(図版15-7 第79図20) 茎と切失の一部を欠くが、現長30.3cm、刀渡り27cm、身幅3.1～2.5cm、厚さ0.6cmを測る。平造りで保存状態も良い。背には鏃(19)の破片が付着しており、その点で僅かに身が折れ曲がっている。

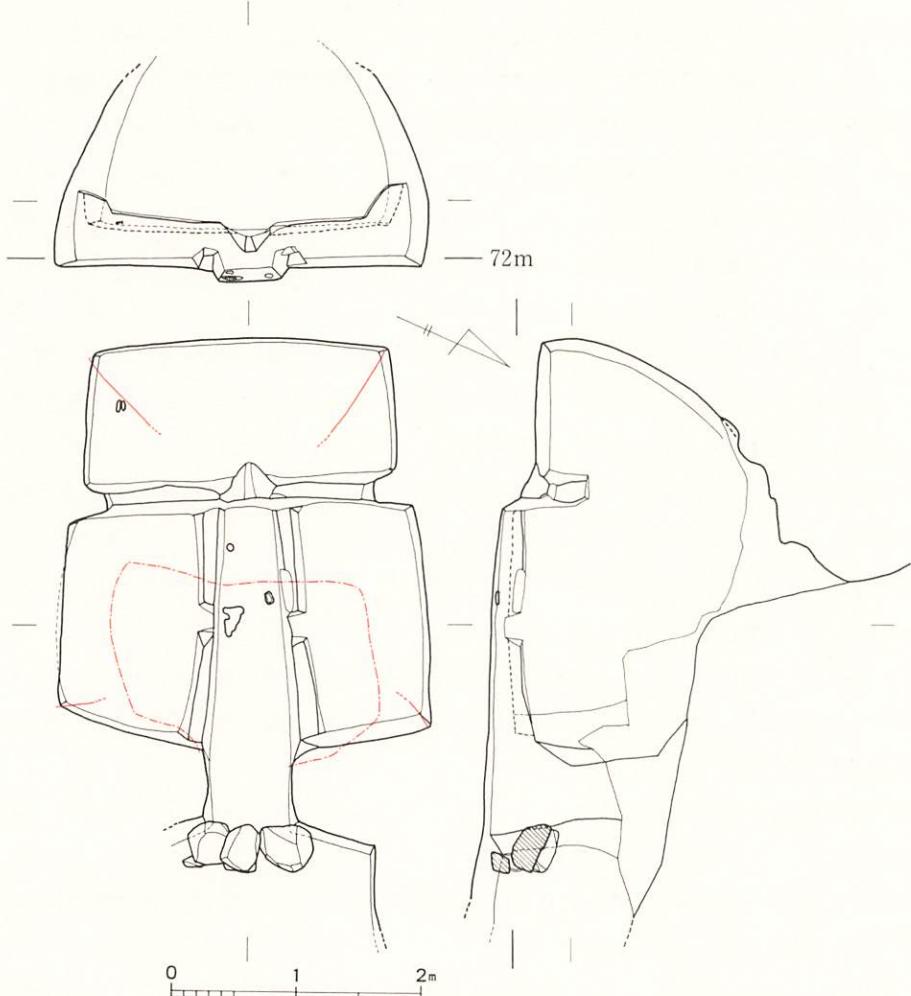
刀子(第79図21) 平造りで切先は小刀状になっている。刃部と茎は欠いている。現長10cmになる。

柄金具(図版15-8 第79図22) 長さ2.2cmで断面は長径3.4cm、短径1.8cmの卵型をした柄金具である。恐らく直刀(20)の金具であろう。

鎧(図版15-9 第79図23) 木心鉄張壺鎧である。鎧本体は残っておらず、上部金具と2個の兵庫鎖さらに鉸具が残っている。鎧板には両側から2本の鉢が出ており、内側には木質が付着して残っている。兵庫鎖は2連で「く」字に折れて錫付いている。鉸具は棘金を反転させた状態で固定している。全体を見て鎧本体から鉸具までは「コ」字形に折れている。これらの総延長は26.7cmになる。

134号横穴(第80図)

133号横穴の西隣で、尾根の東側に位置している。主軸はN66°Eにとり、東北東に向けて開口しており、羨門上部と天井前半を欠いていた。羨門には凝灰岩角礫5個を使用して閉塞石としていたが、床面から約70cmの高さしか残っておらず、盗掘によって破壊されたものであろう。羨門から玄室までは約70cmを測った。玄室は入口部分で幅300cm、奥壁238cm、奥行325cmを測り、台形を呈している。屍床は「コ」字形で各屍床には仕切を造り、中央には排水溝を刻んでいる。奥屍床仕切は両端が高くなり「ゴンドラ」形をしており、左右屍床でも羨門側が僅かに高くなるように造られていた。



第80図 134号横穴実測図

天井はドーム形である。

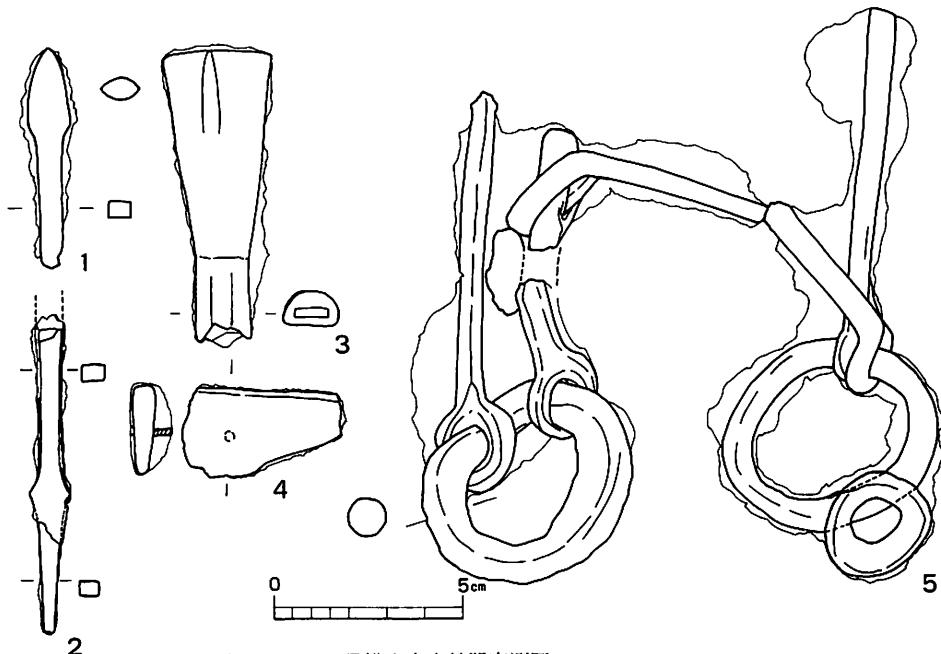
遺物 全て鉄器で、奥屍床左端から1と2、通路から3～5が出土した。

鉄器 (図版16-1 第81図) 武具として鎌(1～3) 直刀(4) に馬具として轡(5) とに分けられる。

鎌 (第81図1～3) 1と2は尖根式で、出土状態から考えて同一物の可能性が強い。1は、現長5.7cmで身と籠被上部のみである。2は現長8.4cmで籠被下部と茎のみで、棘突起を有している。なお、茎には樹皮が巻かれている。いずれも籠被は長方形の断面を呈している。3は広根斧箭式で見は撥形で、刃部は僅かに丸味を呈し、身下位には木質が付着している。現長7.8cmである。

直刀 (第81図4) 茎と身の一部で目釘を残している。破片が小さく大きさは不明だが、平造りで現長4.2cmを呈している。

轡 (図版16-1 第81図5) 出土した時は鉄の塊で、現場で轡とは確認出来ないような状態であった。鏡は環状で喰と引手が、それぞれ連結している。なお喰は折れて、引手も引手壺を欠いている。



第81図 134号横穴出土鉄器実測図

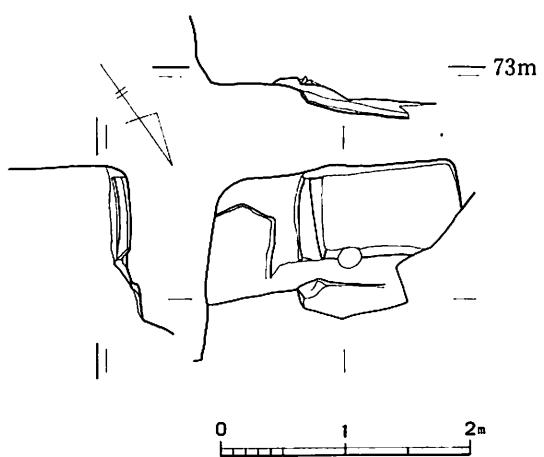
135号横穴 (第82図)

134号横穴の西側で、岬状に突出した先端に位置している。溜池築造時に破壊されたと見られ、僅かに床面と壁面の一部を残しているに過ぎなかった。主軸はN55°Wにとり、北西から西北西に向けて開口していたことが判る。玄室は右側壁から隅丸方形を呈していた。屍床は「コ」字形をし、右屍床と奥屍床の一部が残っていた。屍床には仕切を造り、右屍床では奥に、奥屍床では右側に枕を造っている。天井は全く不明。

遺物 出土しなかった。

136号横穴 (第83図)

135号横穴の約2m直上に位置している。主軸をN49°Wにとり、北西に向けて開口しているが、恐らく溜池築造の際削ったものであろう。羨門及び玄室前半部、更に天井等を欠いていた。玄室は台形を呈しており、奥壁幅220cmを測る。屍床は「コ」字形で仕切は無い。床面全面に厚さ1~5mmで炭が覆っており、横穴築造当時の



第82図 135号横穴実測図

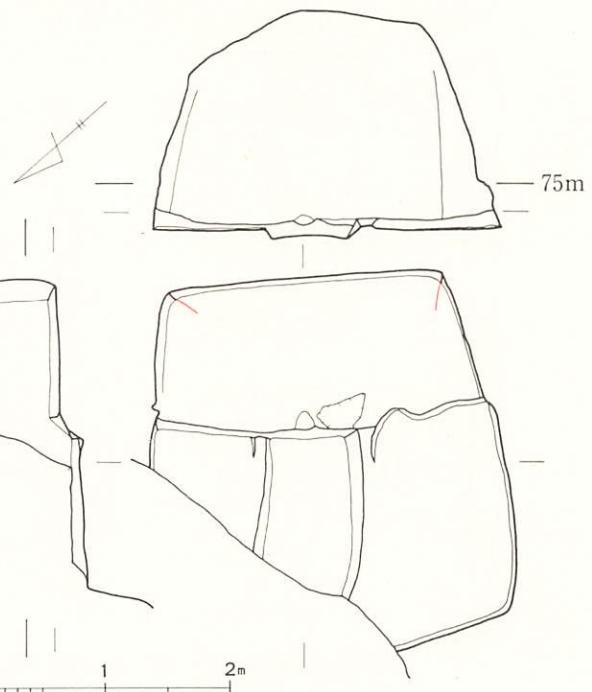
ものかは不明。また、炭の上に粘土層が見られたが、これは水没時に堆積したものと思われる。天井は残存部分が少なく不明。

遺物 出土しなかった。

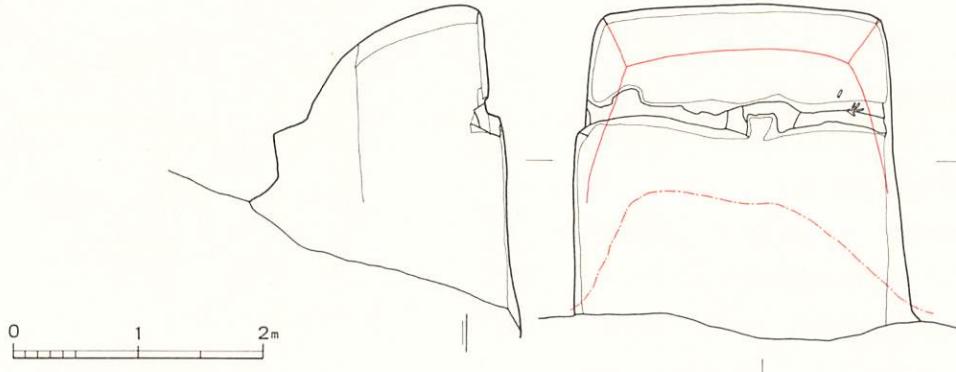
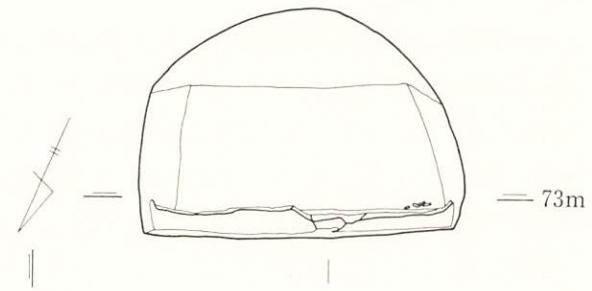
137号横穴（第84図）

136号横穴の西側に位置し、直上には138号横穴が存在している。主軸をN24°Wにとり、北北西に向けて開口している。羨門及び玄室前半を大きく欠き、奥壁幅223cmのみを測ることができた。玄室は隅丸の長方形で、屍床は奥屍床のみ造り出し、手前は平坦になっていた。奥屍床には仕切を造り、中央には排水溝を刻んでいた。天井は奥壁を中心軸に軒先線を描き、ドーム形をしていた。

遺物 奥屍床右側から鉄器が出土しているが、後世による二次使用の際の遺物の可能性が強い。



第83図 136号横穴実測図



第84図 137号横穴実測図

138号横穴（第85図）

137号横穴の直上で、溜池に突出した尾根の西側基部に位置している。主軸はN $10^{\circ}W$ にとり、ほぼ北に向って開口している。この横穴は溜池に面する横穴のうちでは良く残っている。羨門には閉塞石の柄穴が幅20cm、長さ95cm、深さ19cmで掘られている。羨門は、アーチ形で幅120cm、高さ125cmで、玄室まで65cmを測る。玄室は入口部分で300cm、奥壁242cm、奥行366cmを測り、隅丸の長方形をしている。壁面は僅かに曲線を描いている。屍床は「コ」字形だが通路と奥屍床の破損が著しい。そのため仕切も、右側屍床で一部残すのみである。奥屍床は石屋形を呈していて、そのため天井は手前では寄棟造で妻入りだが、奥屍床では平坦になっていた。

遺物 左屍床から銀環とガラス玉が出土し、通路から鉄器類と土師器が出土している。

土師器（第86図1・2）

1は土師器皿片で、口径11.4cm、器高2.4cmを測る。口縁部はいくぶん内湾気味に開いている。底部は糸切底で、器面は全面ナデ調整で仕上げている。胎土には砂粒を多く含み、焼成も良くない。そのため、器面のザラツキが著しい。茶褐色をしている。2も土師器皿片で、口径9cm、器高2.7cmになる。口縁部は内湾気味に開き、内面にはススの付着が見られる。底部は糸切底で、器面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含むが、焼成は良い。茶褐色を呈している。これらはいずれも横穴の二次使用の際、搬入されたものである。

鉄器（図版16-2



第85図 138号横穴実測図

～3 第87図 3～5) 鉄鎌 (3・4) と留金具 (5) が出土している。

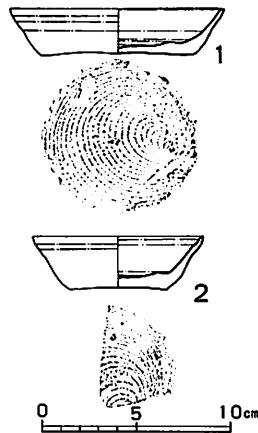
3は広根式の鎌で、茎端部を欠き、現長8.6cmを測る。笠被は短く、柳葉形の身には逆刺を有している。身は長さ4.4cm、幅1.4cmの両丸造りである。なお笠被から茎にかけて「く」字形に折れていた。4も鎌である。茎先端部のみだが、3と同様「く」字形に折れており、同一物の可能性も残っている。現長は3.9cmで、断面は四角となる。5は飾り鉢である。円形の鉄製座金に、五角形に近い宝球形の鉢頭をもっており、全長2.8cm、座金径2.1cm、鉢径1.4cm、鉢軸長1.3cmを測る。鉢軸は座金から5mmの間隔を置いて、段が見られる。さらにそこには木質の付着が見られ、板に固定されていたものと推察される。

耳環 (図版16-4 第88図6)

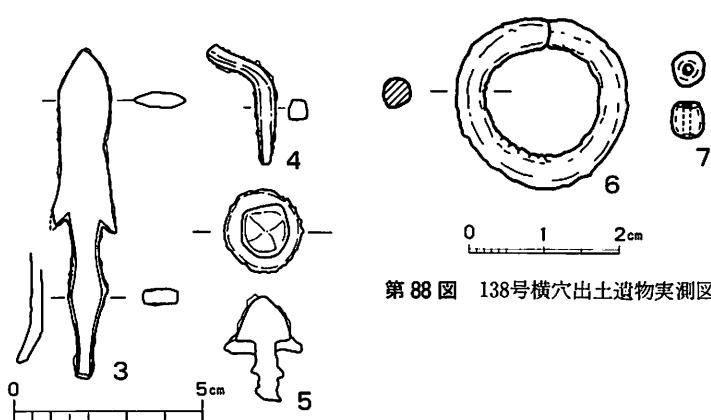
6は直径2.3cmの鉄地金銀張りの耳環である。地金が鉄のため、鋳で表面の凹凸が著しい。

玉類 (図版16-5 第88図7)

7はガラス製小玉である。直径4.35mm、高さ4.45mm、孔径1.15mmで、淡青色をしている。



第86図 138号横穴出土
遺物実測図



第87図 138号横穴出土鐵器実測図

第88図 138号横穴出土
遺物実測図

139号横穴 (第89図)

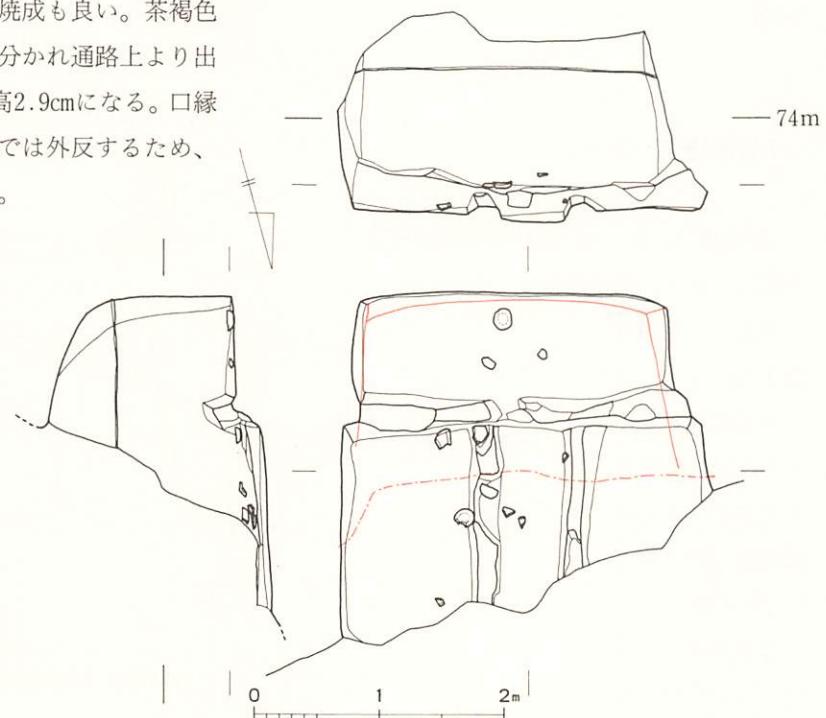
138号横穴の西側で、左下には140号横穴が在る。玄室前半部と天井を欠き、主軸をN15°Eにとり、北北東に向けて開口している。玄室は奥壁幅247cmのみ測ることができ、長方形のプランになるようだ。屍床は「コ」字形で仕切を有し、奥屍床では中央に排水溝を刻んでいる。天井は軒先線が奥壁から左右壁面に残っているが、ドームになるか寄棟造になるか不明。

遺物 床面から10cm程浮いた状態で土師器皿が多数出土した。二次使用の段階で置かれたものであろう。土師器 (図版16-6～8 第90図1～5) 1は4片に分かれ奥屍床より1点、通路上より3点が出土した。横穴内で割れたものである。口径16cm、器高3.6cmを測る。口縁部は短いが大きく開き、口唇部では僅かに外反気味に丸くなっている。底部は糸切底で、器面は全面ナデ調整である。

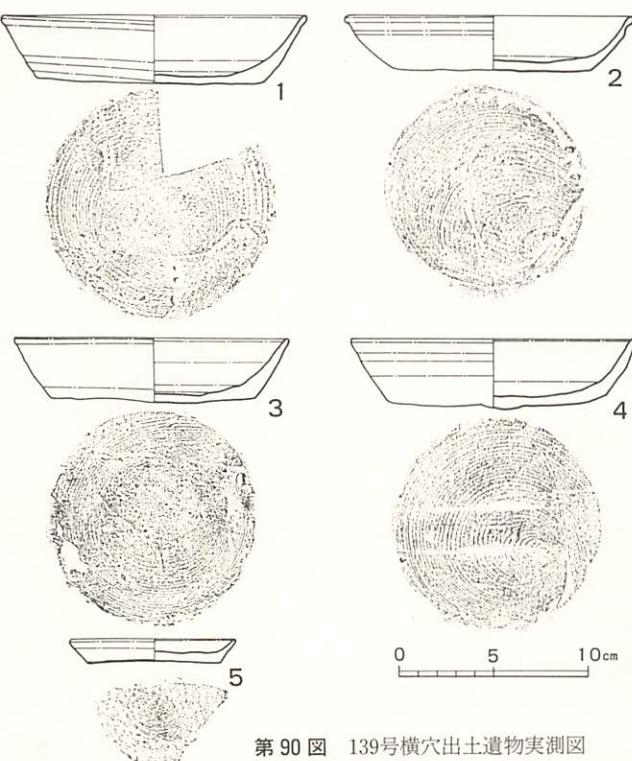
胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。茶褐色をしている。2も3片に分かれ通路上より出土した。口径15.1cm、器高2.9cmになる。口縁部は大きく開き、口唇部では外反するため、浅い凹線がめぐっている。

底部は糸切底で、器面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。黄褐色をしている。3は奥屍床より出土したもので、口径14.5cm、器高3.5cmを測る。口縁部は1・2に比べると僅かに立ち上り、口唇部の外反も少ない。底部は糸切底で器面は全面ナデ調整である。胎土には砂粒をあまり含まず、焼成

も良い。黄褐色をしている。4は左屍床上より出土したもので口径14.9cm、器高3.8cmを測る。口縁部は中位にふくらみをもしながら開き、口唇部は僅かに反っている。底部は糸切底で、切り離した後、叩いており凹凸が残り、更にヘラ記号も残されている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。黄褐色をしている。5も左屍床上より出土した灯明皿片である。口径8.7cm、器高1.2cmになり口縁部は短い。底部は糸切底で他はナデ調整である。胎土には砂粒を含まず、焼成も良い。黄褐色をしている。この他にも甕と高环の小さな破片が出土しているが、いずれも二次使用時に持ち込まれたものと判断



第89図 139号横穴実測図



第90図 139号横穴出土遺物実測図

された。

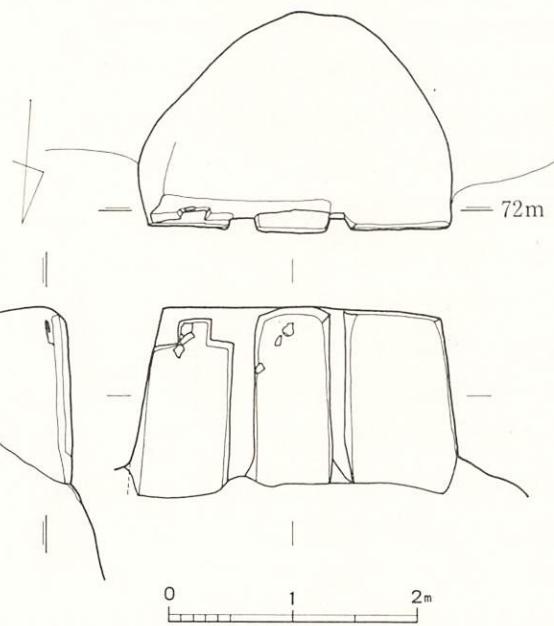
140号横穴（第91図）

138号横穴の直下で、137号横穴の西側に位置しており、溜池堤防より東へ25mの地点である。主軸はN 4°Wにとり、ほぼ北に向って開口する。玄室前半分と天井の殆んどを溜池築造時に削られているが、プランは台形をしていたことが僅かに判

る。屍床は左右に2個有し、中央に通路が置く壁まで達している。左側屍床の奥壁側には枕を造っていた。

遺物 枕の部分と通路から、須恵器片が出土した。尚須恵器は床面から2～5cmの厚さで全面に粘土を敷き詰め、その上に置かれていた。当初、溜池で水没するため自然堆積したのではとも考えたが、この粘土は須恵器の下に在るところから、人為的に置かれたものと判断した。しかし、これが横穴築造時か追葬時かは断定できなかった。

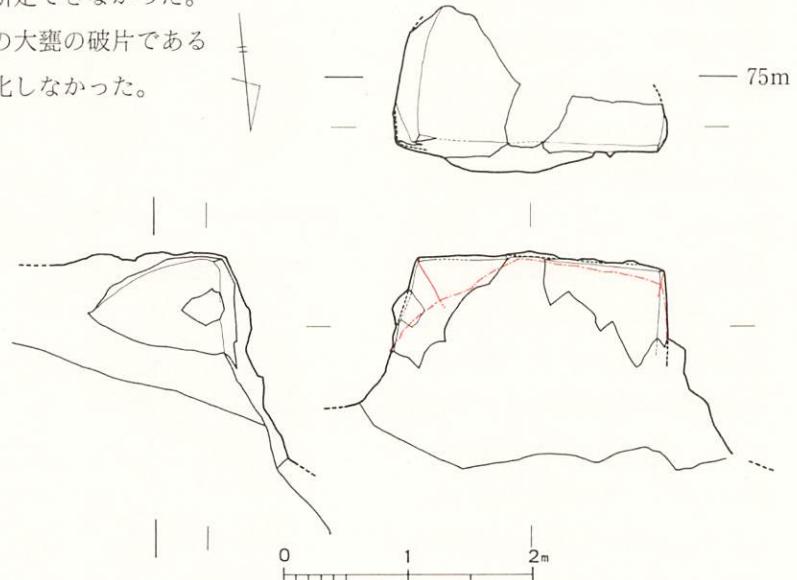
須恵器は6点で、同一個体の大甕の破片であるが、直径等が不明のため図化しなかった。



第91図 140号横穴実測図

141号横穴（第92図）

139号横穴の西隣で、右上には142号横穴が在る。この横穴は破壊がひどく、床面と奥壁の一部が残っているに過ぎなかった。主軸はN 10°Eで、北北東に向って開口する。玄室は長方形プランで、奥壁



第92図 141号横穴実測図

幅198cmを測る。屍床は平坦だが、破壊がひどく天井等の構造は不明。

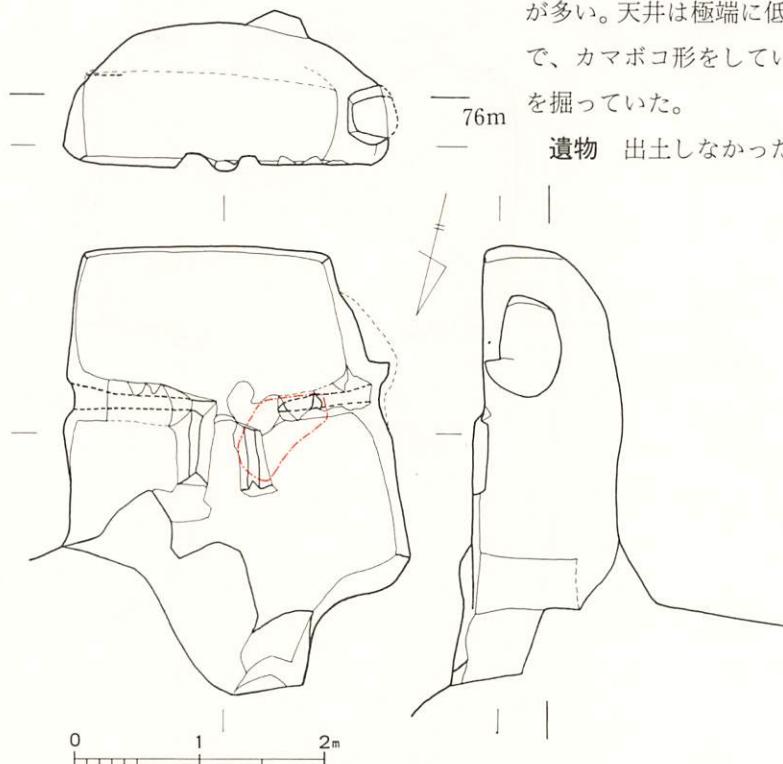
遺物 出土しなかった。

142号横穴（第93図）

141号横穴の右上に在り、一部切り合っているが、破壊がひどいため前後関係は不明。羨門及び玄室左側の一部を欠いているが、主軸はN14°Wにとり、北と北北西の間に向って開口していた。玄室プランは台形に近く奥壁幅195cmを測る。屍床は「コ」字形で仕切を造っていたが、破損していた所

が多い。天井は極端に低く僅か120cmしかなく、偏平で、カマボコ形をしていた。奥屍床右側には一部穴を掘っていた。

遺物 出土しなかった。



第93図 142号横穴実測図

143号横穴（第94図）

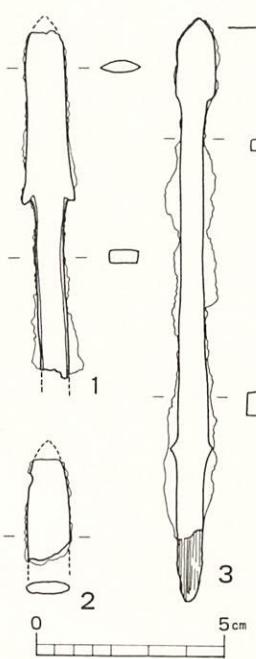
溜池の西南隅に7基が集中して存在している。堤防上の道路から直線で15mから7mまでの間で、毎年水中に没している。それらの中では東端に位置しているのが143号横穴である。142号横穴とは約8m程西に離れている。水中に没している割には比較的保存状態は良い。主軸はN20°Eにとり、北北東に向けて開口していた。閉塞石を欠くが、羨門はアーチ形をし、幅130cm、高さ125cmで、玄室まで60cmを測る。玄室は横広の長方形で、奥に石屋形を造り出していた。玄室の大きさは、幅354cm、奥行220cm、石屋形は幅218cm、奥行118cmを測る。屍床は石屋形の部分に仕切を造り3ヶ所に排

水溝を刻んでおり、玄室内では平坦になっていた。天井は玄室で寄棟造で平入りとなっており、石屋形は平坦な天井であった。軒先線は羨門上部を除き、他は全てめぐっていた。

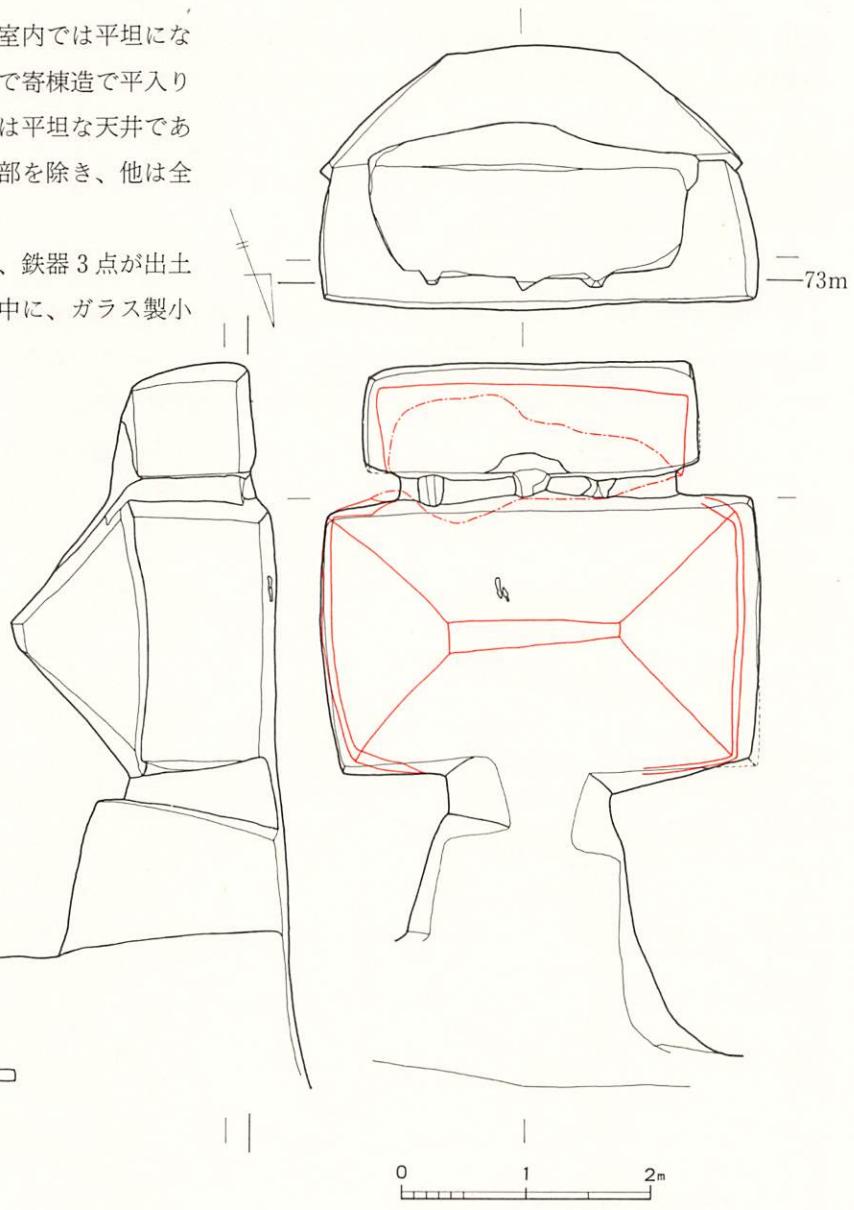
遺物 玄室中央部で、鉄器 3 点が出土した。また、埋土水洗中に、ガラス製小玉 2 個が出土した。

鉄器 (図版 16-9 ~ 10 第 95 図 1 ~ 3) 鏃ばかり 3 点出土し、広根式 (1・2) と尖根式 (3) が見られる。

1 は先端と箇被中位以下を欠いているため、



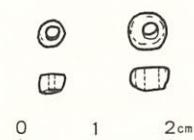
第 95 図 143 号横穴出土鉄器実測図



第 94 図 143 号横穴実測図

表 3 143 号横穴出土小玉集成表

番号	図版番号	材質	色調	高さ (ミリ)	直径 (ミリ)	孔径 (ミリ)
1	第96図-1	ガラス	淡青	2.50	3.10	1.25
2	2	ガラス	淡緑	3.20	5.00	1.60



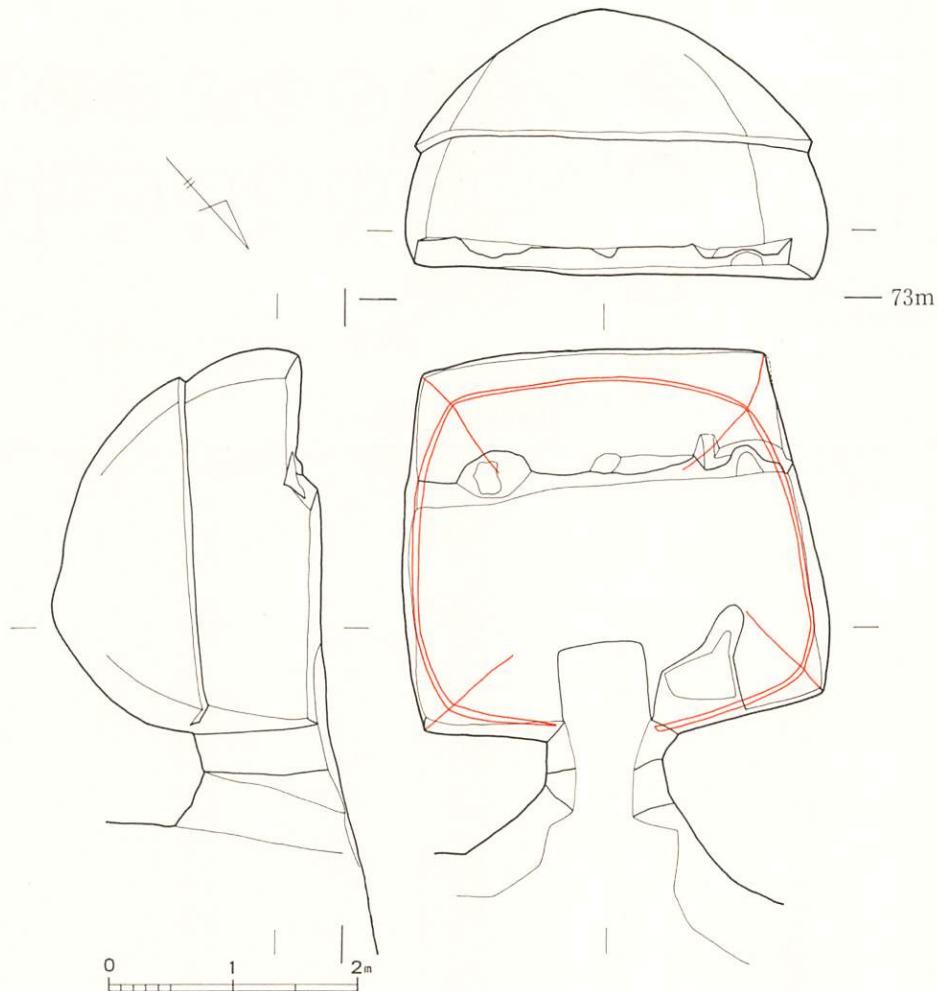
第 96 図 143 号横穴出土小玉実測図

現長9.2cmになる。籠被は幅8mm、厚さ4mmの長方形の断面である。身は先端部を欠くが、柳葉形で逆刺を有し、現長4.3cm、幅1.2cmになる。2も1と同様の柳葉形の先端部の破片である。身幅は1.2cmを測る。

3は尖根式で全長15.4cmを測る。茎には木質の付着が見られ、籠被との間には棘突起を有し、籠被は長さ9.1cmで、関は小さく、身は柳葉形をし、片丸造りである。

玉類（図版16-11～12第96図4・5）

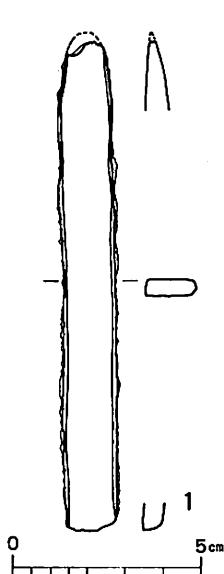
4と5はガラス製小玉である。4は長さ2.5mm、直径3.1mm、孔径1.25mmで淡青色をしている。5は長さ3.2mm、直径5mm、孔径1.6mmで淡緑色をしている。ともに完全な形をしている。



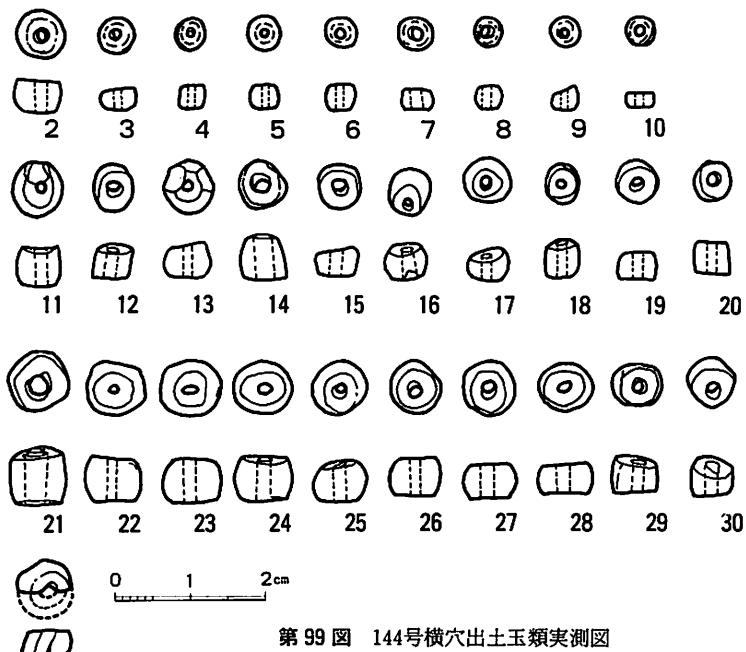
第97図 144号横穴実測図

144号横穴（第97図）

143号横穴の西隣で、直上には145号横穴が位置している。主軸はN42° Eにとり、北東に向けて



第98図 144号横穴出土
鉄器実測図



第99図 144号横穴出土玉類実測図

表4 144号横穴出土小玉集成表

番号	図版番号	材質	色調	高さ(ミリ)	直径(ミリ)	孔径(ミリ)	備考
1	第99図-2	ガラス	濃青	4.75	5.85	1.60	
2	3	ガラス	水色	3.00	4.75	1.50	
3	4	ガラス	水色	3.40	3.90	1.15	
4	5	ガラス	緑	3.15	4.45	1.15	
5	6	ガラス	緑	3.35	4.45	1.30	
6	7	ガラス	緑	2.70	4.55	1.30	
7	8	ガラス	緑	3.20	4.00	1.30	
8	9	ガラス	緑	3.30	3.75	6.95	
9	10	ガラス	緑	2.10	3.50	1.30	
10	11	ガラス	紺	5.00	7.00	1.30	
11	12	ガラス	紺	4.45	5.75	1.70	
12	13	ガラス	紺	4.25	6.60	2.65	
13	14	ガラス	紺	5.10	5.90	2.15	
14	15	ガラス	紺	3.70	5.85	1.80	
15	16	ガラス	紺	5.10	6.15	1.15	
16	17	ガラス	紺	4.00	6.20	1.40	
17	18	ガラス	紺	4.65	4.75	4.75	
18	19	ガラス	紺	3.55	5.65	1.25	
19	20	ガラス	紺	4.05	5.30	1.35	
20	21	ガラス	紺	7.15	7.90	2.65	
21	22	ガラス	紺	5.60	6.95	1.50	
22	23	ガラス	紺	6.10	8.25	1.60	
23	24	ガラス	紺	5.85	7.90	1.80	
24	25	ガラス	紺	5.45	7.20	1.45	
25	26	ガラス	紺	5.20	7.10	1.50	
26	27	ガラス	紺	4.55	6.90	1.65	
27	28	ガラス	紺	4.30	7.00	1.60	
28	29	ガラス	紺	5.50	6.40	1.40	
29	30	ガラス	紺	5.30	6.35	1.90	
30	31	ガラス	紺	4.25	7.00	1.85	
31	図なし	ガラス	紺	—	—	—	30の破片か？

開口していた。閉塞石は欠くが、羨門の残りは良く幅92cm、高さ109cmのアーチ形をしている。玄室までは約60cmを測り、玄室は台形をしていた。入口部分で幅322mm、奥壁276cm、奥行300cmを測り、屍床は奥屍床のみで、左右の屍床は見られなかった。天井は四隅棟を有するドーム形で、羨門上部を除き軒先線をめぐらしていた。最高位で215cmを測る。

遺物 埋土水洗作業中に、鉄器1点とガラス製小玉が30点出土した。

鉄器 (図版16-13第98図1)

1は先端部を僅かに欠くが、現長12.9cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを測る鑿である。断面は長方形で棒状を呈し、刃部は片刃である。

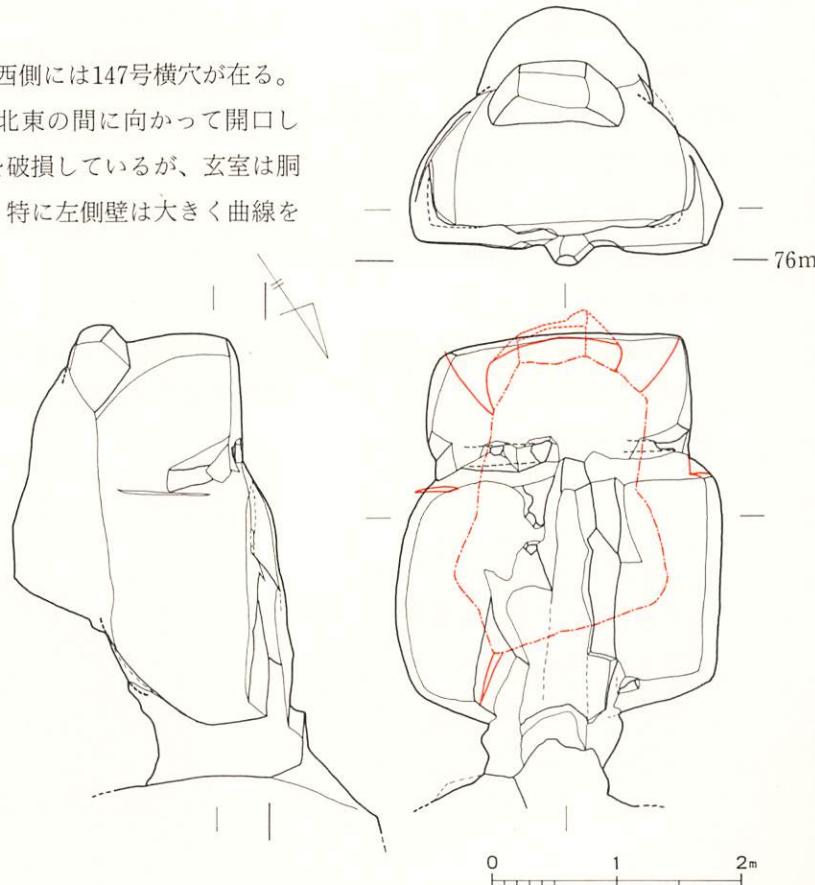
玉類 (図版16-14第99図2~31)

ガラス製小玉で、このうち2~9までは小型で、他とは大きさを異なっている。個々の詳細については別表を参照されたい。

145号横穴 (第100図)

144号横穴の直上に位置し、西側には147号横穴が在る。主軸はN34°Eにとり北北東と北東の間に向かって開口していた。羨門と通路及び天井を破損しているが、玄室は胴が張る隅丸長方形をしていた。特に左側壁は大きく曲線を描いていた。入口部分で幅240cm、奥壁197cm、奥行290cmを測る。屍床は「コ」字形で仕切を造っていたが、破損が著しく残りが少ない。奥壁直上90cmの所には長さ110cm、高さ50cm、奥行30cmの掘り込みが見られた。天井は殆んどを落盤で欠いているが、ドーム形の可能性が強い。

遺物 出土しなかった。



第100図 145号横穴実測図

146号横穴（第101図）

溜池西南端に位置し、145号横穴の右下で、144号横穴の西側に位置している。主軸をN54°Eにとり、北東に向けて開口していた。すでに、天井と羨門を破壊されており、奥壁260cmと左側壁209cmを測ることができた。プランは横広の方形で、壁面はいくぶん曲線を描いていた。屍床は左右のみで、奥屍床を有していなかった。中央に通路をもち、左右屍床には仕切を造っていた。仕切には排水溝を刻み、左屍床では入口側に仕切から連続して枕を造り、右屍床では奥に枕

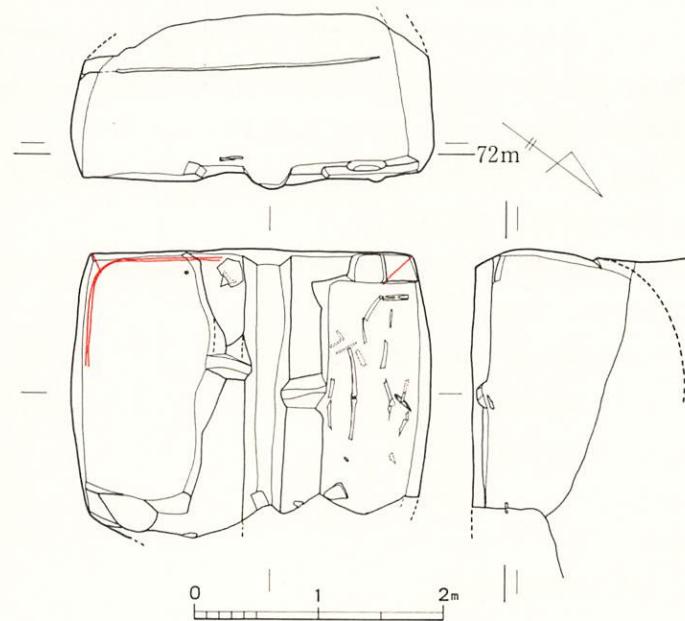
を造っていた。この横穴は、溜池堤防の基部に当り、その時破壊されたものと思われた。天井は不明だが、奥壁には軒先線を有していた。

遺物 右屍床から2体分の人骨と刀子等が出土した。左屍床からは、枕の所に鉄鎌2本を重ねて置き、奥壁に沿って仕切の上から須恵器が出土した。

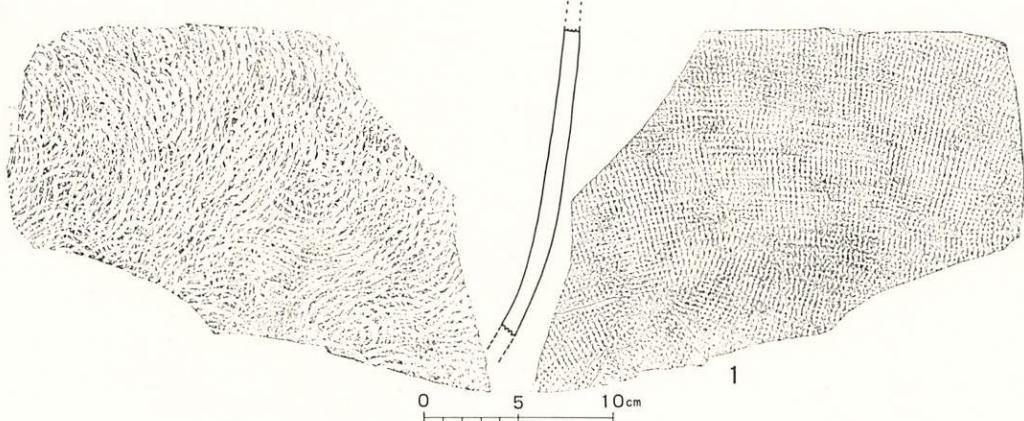
須恵器（第102図-1）

1は須恵器で、大甕の破片である。直径等不明だがかなり大きくなる。表面には格子叩目、内面には青海波状文が施されている。胎土には砂粒を含まず、焼成も良く、暗灰色をしている。

鉄器（第103図2-4）

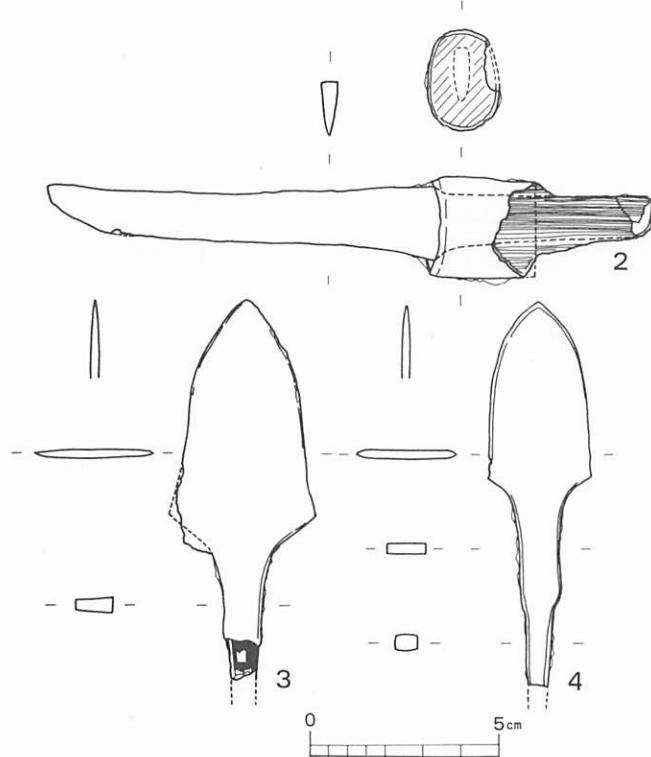


第101図 146号横穴実測図



第102図 146号横穴出土遺物実測図

2は右屍床人骨の下から出土した刀子である。全長16.1cmの細身の刃で、柄金具と木質を残している。刃部は平造りで10.2cm、茎は5.9cmを測る。この刀子については、人骨の下から出土したことから、人体に刺さった状態で出土したのではと思ったが、少なくとも骨には刺さっていなかつた。3と4は、3を上に2枚重ねの状態で出土した。共に広根式の鏃で茎先端部を欠いている。3は現長10cmで、籠被は短く、関は直線的で大きい。身は三角形に近く、長さ5.7cm、幅は3.6cmを測る。なお茎には木質の付着が見られる。4も広根式で、茎端を欠き現長10.2cmを測る。3に比べ籠被が長く、身が細くなっている。関は曲線を描きながら広がっており、三角形の身は長さ4.7cm、幅2.7cmを測る。3・4共に保存状態は極めて良く、形も美しい。



第103図 146号横穴出土鉄器実測図

147号横穴（第104図）

溜池堤防の基部に位置し、146号横穴の右上に在る。湯の口横穴群の中では最大級の横穴であろう。主軸をN54°Eにとり、およそ北東に向けて開口していた。羨門部と天井を大きく欠き、現在も天井には樹根が出て来ている。玄室は長方形のプランで、入口部分の幅320cm、奥壁幅314cm、奥行427cmを測った。屍床は「コ」字形で各屍床には仕切を造っていた。左右屍床では最も羨門寄りの仕切に排水溝を刻み、奥屍床では中央に刻んでいた。特に、奥屍床仕切は両端を高くし「ゴンドラ」形を呈していた。天井は欠いているため構造は不明。

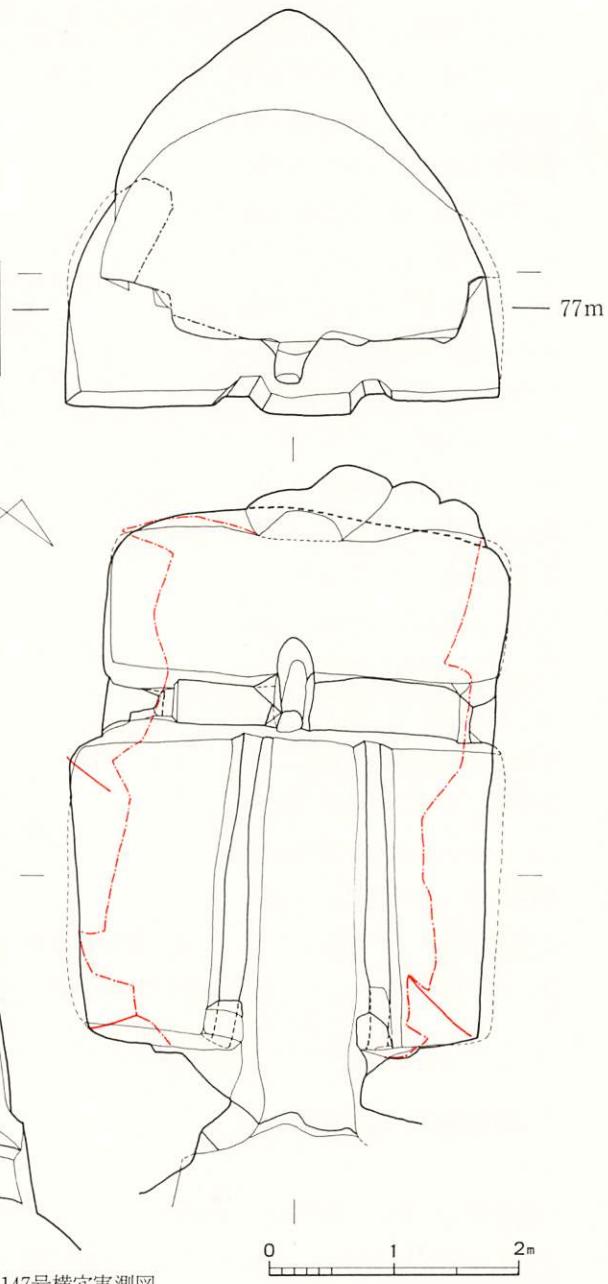
遺物（図版16-18第105図） 埋土水洗中にガラス玉が出土している。1は長さ2.5mm、直径3.5mm、孔径0.85mmで、青色。2は長さ3.6mm、直径4.05mm、孔径1.6mmで青色。尚2は3個に割れていたものを接合した大きさである。



第105図 147号横穴出土
小玉実測図

表5 147号横穴出土小玉集成表

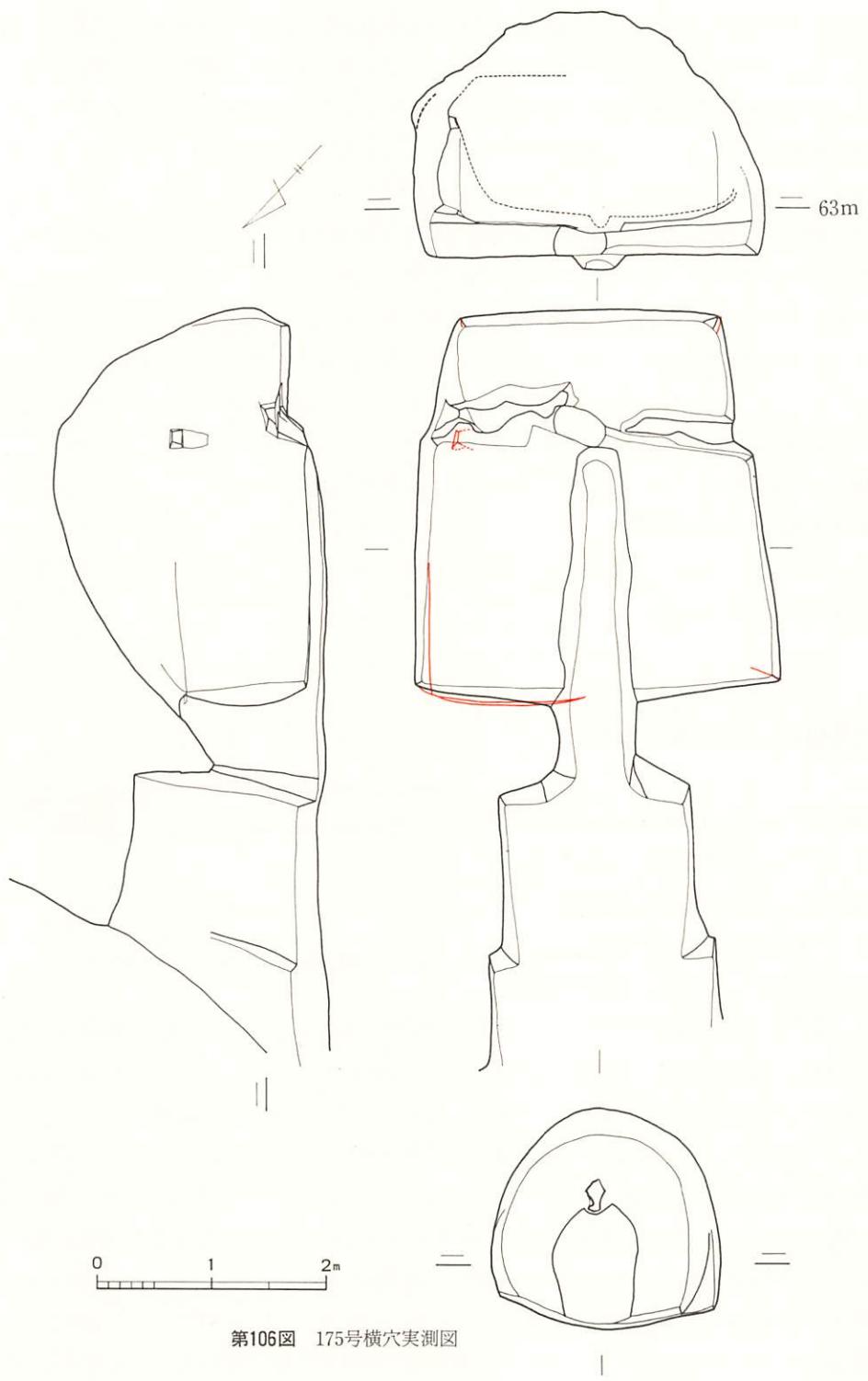
番号	図版番号	材質	色調	高さ (ミリ)	直径 (ミリ)	孔径 (ミリ)
1	第105図-1	ガラス	青	2.50	3.50	0.85
2	2	ガラス	青	3.6	4.05	1.60



第104図 147号横穴実測図

175号横穴 (図版9 第106図)

溜池堤防から西側に600mまでの間に大小7ヶ所の谷と尾根が交互に存在している。175号横穴は堤防から直線で、300mの地点で北側に伸びた尾根の西に位置する。尾根の先端は崖面となり、足下には溜池から流れ出た用水路が走っている。横穴は主軸をN44°Wにとり、北西に向けて開口していた。羨門には閉塞石は無く、飾縁を造っていた。羨門は幅72cm、高さ110cmを測るが、最高位には約10cm程の出張りがあり、その部分に鏃もしくは矛先のレリーフが刻まれていた。レリーフは長さ28



第106図 175号横穴実測図

cm、最大幅17cmで、先端を上にしていた。羨門上部を意識的に残し、その部分に装飾を施している点からも、後世の作とは考えにくい。横穴に於いて装飾が施されている場所は、一般的に羨門の左右壁か、あるいは内部に施されている例が多いが、この横穴の場合、羨門上位に突出したように在るところから特異な例といえよう。玄室は台形プランで入口部分で幅317cm、奥壁226cm、奥行330cmを測る。屍床は「コ」字形で、奥屍床のみ「ゴンドラ」形の仕切が造られていたが、その殆んどを破壊されていた。天井も大部分を欠落しており、構造については不明。

尚この横穴については、昭和41年に県立鹿本高校（現鹿本商工高校）考古学部員の手によって、自主調査が実施されたのである。その時、初めて羨門上部の装飾について気がついたが、彼等も装飾とは断定できず、山鹿高校（現鹿本高校）考古学部に話を持ち込んだのであった。連絡を受け現場に行ってみると、横穴の中には女生徒を含む4～5人の生徒が蠟燭片手に発掘？の最中であった。装飾については、羨門に突出するような例を知らず、何とも判断できず帰ったことを記憶している。その時、遺物が出土したか否かは不明。

遺物 今度の調査により、羨門部より刀子が1点出土した。

鉄器 (図版16-19第107図)

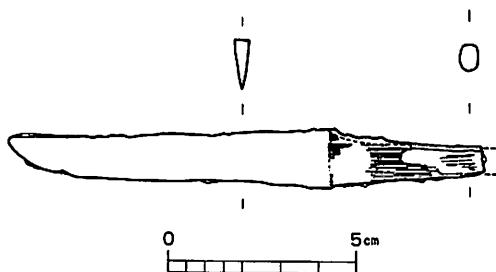
茎先端を欠くが、現長12.7cmを測る。身は平造で反りが小さく、長さは8.6cmになる。茎は現長4.1cmで木質の付着が見られる。

182号横穴 (図版10第108図)

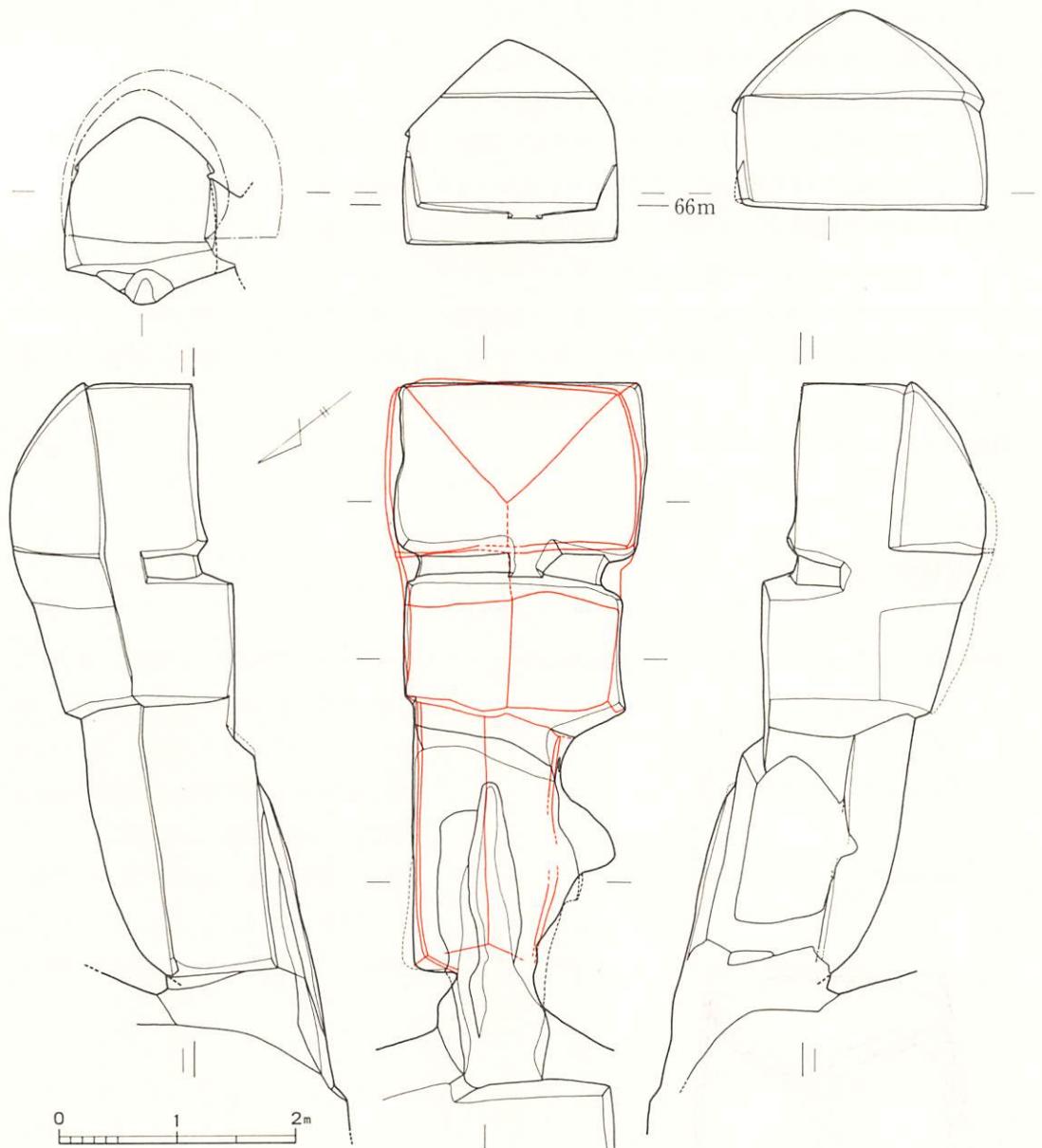
溜池堤防から西に約380m程の崖面に開口している。175号横穴とは小さな谷を挟んで存在している。この横穴は183号横穴と接しており、特異な形状をした横穴である。主軸はN39°Wにとり北西に向けて開口し

ている。羨門は一部破損していたが、アーチ形になる。玄室は特異で入口部分の幅は100cm、奥壁で200cm、奥行は500cmである。羨門から230cmまでは右側壁が未完成で、特に壁面は長さ140cm、高さ95cmにわたって、183号横穴と接した穴が開口していた。そのため、壁面は羨門からの張り出しがなく、しかも直線にならずに乱れた状態で僅かに軒先線を刻んで仕上げている。それに対し、左側壁は直線的で、軒先線も丁寧な仕上で刻まれていた。この点からも183号横穴より後に、横穴を掘ったことが窺える。玄室の奥は、左側壁がほぼ一直線で伸びているのに対し、右側壁は183号横穴を迂回するように約60cm拡げ奥壁へ続いている。屍床は奥屍床のみで、「ゴンドラ」形の仕切を造って、中央に排水溝を刻んでいた。奥屍床の手前は平坦になっており、ここも屍床として利用していたものと推察される。天井は軒先線がめぐらされ、寄棟造で妻入りとなっている。尚棟は手前と奥でずれていた。

この横穴の構築順序について整理してみると、



第107図 175号横穴出土鉄器実測図



第108図 182号横穴実測図

1、羨門から約230cmの奥行で、横穴を構築しようとしている。その順序は、次のように考えられた。

- ① 奥行270cmの小さな横穴を掘る。
- ② 羨門を造り、その先を左右に拡張する。
- ③ 右側壁が183号横穴と接し小穴が開き、それ以上の拡張を止める。
- ④ 天井を仕上げ軒先線や棟を刻む。

- ⑤ 床面は通路を造りかけた段階で中止した。
2. 更に奥へ260cm進み、玄室を完成させている。
- ① 左側壁はほぼ一直線に伸びる形をとる。
 - ② 床面は多少高くした。そのため天井も一段高くなっている。
 - ③ 右側壁は183号横穴を迂回するように拡張した。
 - ④ 天井は横幅の中心を通るように棟を造ったため、手前の棟とはずれを生じた。
 - ⑤ 尻床は奥尻床と手前に平坦部を造って使用した。

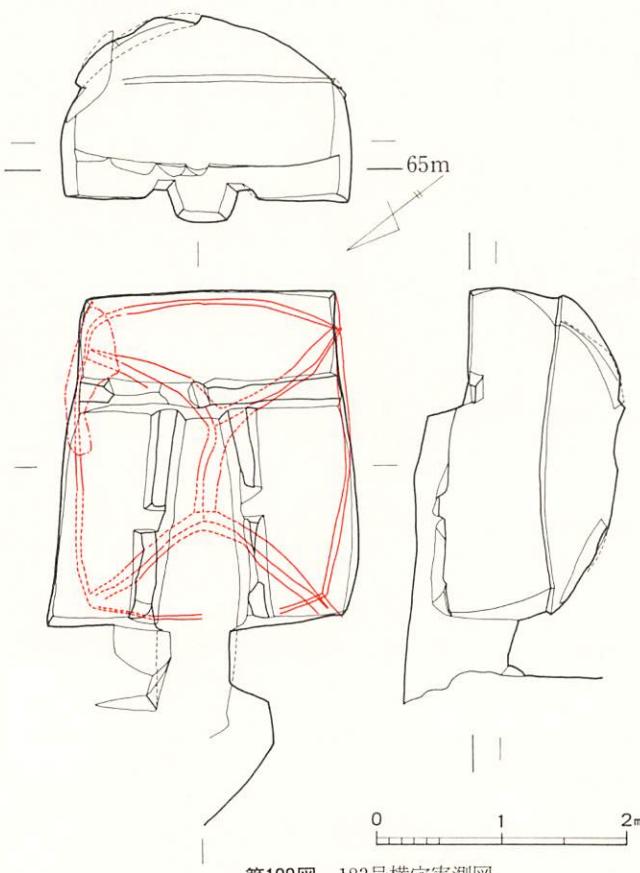
以上のようなことが推察されたが、従来なら未完成横穴も存在しているところから、途中で作業を中止したと思われるが、この横穴の場合、あえて強行して完成させたことに意味が隠されているようだならない。

遺物 出土しなかった。

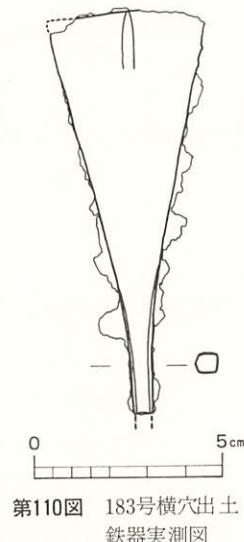
183号横穴（第109図）

182号横穴の西に接して位置する。主軸はN53°Wにとり、北西に向けて開口する。羨門には、閉塞

石は無く、幅60cm、高さ80cmでドーム形をしていた。玄室は台形で、入口部分の幅238cm、奥壁200cm、奥行275cmを測る。左隅は破損のため開口していて、更に左側壁にも182号横穴からの穴がポツカリと開口していた。尻床は「コ」字形で仕切を造り、中央には排水溝を



第109図 183号横穴実測図



第110図 183号横穴出土
鉄器実測図

刻んでいるが、破損を受けている。天井は寄棟造で妻入りとなっており、周囲には軒先線も描いていた。これらの線は太く刻まれており、剥落した部分が多いが構造上の観察はできた。

遺物 鉄鎌が1点左側屍床より出土したが、床面から10cm程浮いた状態であった。

鉄器 (図版16-20第110図)

広根斧箭式で、身は撥形をなし、刃部はやや曲線を描いている。身から茎へと移り、範被は見られない。なお茎端部を欠くため、現長10.6cm、幅4.1cmを測る。

IV まとめ

今回の調査の目的の一つに、毎年水没する溜池に面した横穴群の実瀬調査の実施を行うこととした。さらに横穴群の配置と規模の確認がもう一つの大きな目的であった。

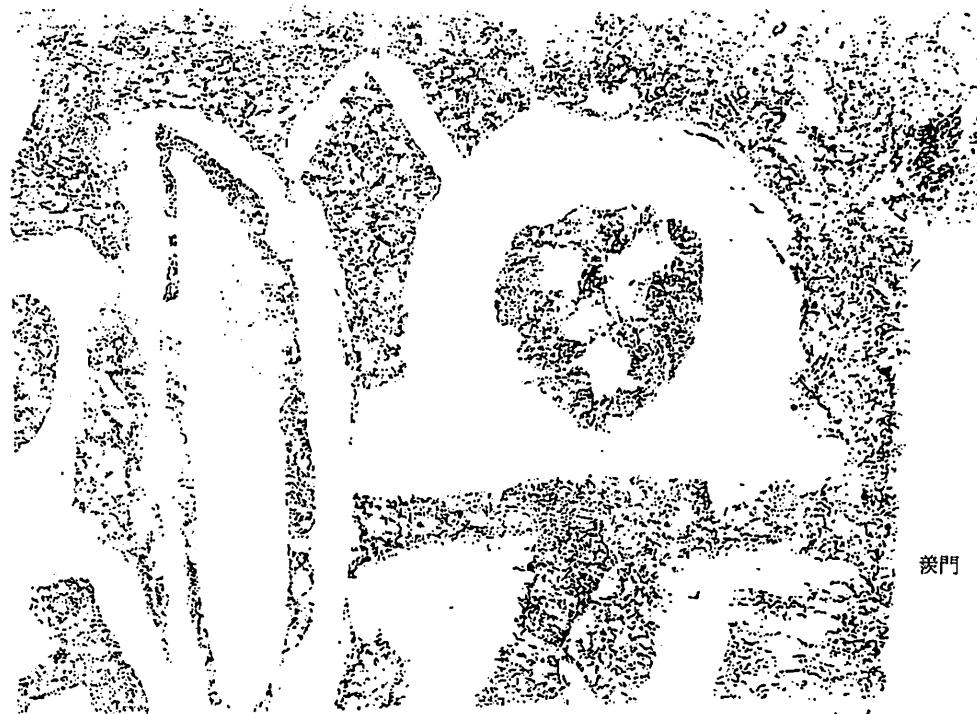
当初、横穴群は溜池を中心として40数基程度であろうと考えていたため、今回の調査で東西1kmにわたり、196基の横穴を確認することができたのは大きな成果といえよう。さらに、溜池に面する横穴のうち水没のため実測出来なかった3基を除いて、開口している横穴の実測を終了することができた。その意味から当初の目的は達成されたと言っても過言ではなかろう。

また、この他にも多くの成果を得ることができた。

1. 装飾文様の発見

175号横穴羨門部に施された装飾文様については、先に述べているが、この装飾と同様のレリーフが、鍋田横穴群27号横穴で見ることができる。鍋田横穴群は、国指定史跡として、その装飾文様は全国的に広く知られている。とくに、27号横穴の装飾は著名で羨門左側には人物、弓、韁、盾等のレリーフが刻まれている。また、現在は横穴右半分を欠いているが、矢野一貞著「筑後将士軍談」によれば、羨門右側に於いても人物、盾、韁等のレリーフが存在していたことを記録していた。さらに先年、熊本県教育庁文化課と熊本大学文学部考古学研究室の手によって実測調査がなされ、内部にも連続三角文が線刻で描かれていることが判明した。^{#1 #2}

さて、問題のレリーフは、この27号横穴の装飾の中には在った。第111図に示すように、羨門左側に立つ人物は大の字に手足を広げ、右手に弓を持っている。この弓と、人物の顔の間に矛、もしくは鎌のレリーフが刻まれている。これは、先端を上に向け、高さ21cm、最大幅9.3cm、基部幅4cmを測る。湯の口175号横穴のレリーフも、先端を上に向け、高さ28cm、最大幅17cm、基部幅11cmを測り、僅かに大きく刻まれていることが判る。この場合、岩盤の質が悪いため、軽石を含んだ層に横穴を造っているが、レリーフの部分が軽石で、周囲が凝灰岩灰層で、軟弱な層となるため一見自然に生じたものとも思えるが、意識的に羨門上部に張り出しを造り、その部分にレリーフが在るということは、明らかに人の手が加わったものと考えるべきである。装飾を施した部位が、羨門部という例は多く見られ、この場合、ナギノ横穴のような彩色によるものか、もしくは線刻によるものが多く、



第111図 鍋田 27号横穴 装飾拓影（部分）

レリーフの例は見ることが出来ず、ましてや羨門上部に張り出しを造りその部分に装飾を施したという例は、全国的に見ても特異な装飾と言えよう。

2. 横穴構築が数段にわたっている。

県下には186群の横穴群が存在し、このうち横穴が2段以上にわたって構築されている例は僅かに熊本市古城町の古城横穴群、植木町豊田の宮穴横穴群、山鹿市城の付城横穴群の3箇所である。湯の口横穴群においては、溜池に面する横穴でも、127号横穴と直下の128号横穴さらに129号横穴が上下3段になっており、とくに129号横穴は溜池に顔を出しておらず、完全に埋没していることが判明し、少なくとも3段にわたって列をなしていたものと考えられる。さらに、溜池東側の山林内に於いては比高20mの尾根の斜面には52～54号横穴を最上段（標高100m）に、直下約5mの所に55号横穴（未調査）さらに5m下には57～59号横穴の列（標高90m）と、さらに段下りで61～64号横穴の列（標高88m）が並んでいる。また、61号横穴と62号横穴の間に61-B号横穴が、62号横穴の床面と天井部で接しており、崖面に開口していないところから、この段にも横穴の列が存在するものと考えられる。斜面の最下段では65～67号横穴が僅かに高い位置で存在し（標高82～83m）、68～72号横穴が最も低い位置に在る。（標高81～82m）

このように、7段にわたって横穴が構築されている例は、県内では付城横穴群のみで横穴群構成上興味あるところである。今回の調査区域は全体から見れば、ほんの僅かの区域にしか過ぎず、全体的に横穴がどのような配列を示すのかは今後の課題としなければなるまい。

3. 横穴の使用期間について、一資料を得ることができた。

横穴群の大半は開口し、遺物を残した状態での調査は稀であった。とくに追葬が確認できる遺物の出土は少なく、その意味では124号横穴と131号横穴から出土した遺物の意義は大きいと言えよう。遺物の出土状況は、最終追葬の段階で乱れており、層位的には把握できなかつたが、須恵器壺蓋および壺身の型式から、共に横穴築造はIII B期（6世紀後半）とされIV B期（7世紀前半）とV期（7世紀後半）の2度にわたって追葬が行われたことを推察することができる。このことから、湯の口横穴群の初見を少なくとも6世紀後半より前と見なし、終末を7世紀後半と考えることができる。また、横穴の時期と構造上の変遷を知る上では、124号横穴と131号横穴をIII B期とすることができたのは今後の湯の口横穴群の調査に於いては重要な資料となった。

今後は被葬者と遺物の関係が明らかになるような資料が出る可能性も強く、とくに溜池東側山中には未確認のまま埋れている横穴も多く存在するものと思われ、現在開口していてもその殆んどが堆積土が厚く、人骨遺存の可能性も強く残されている状態である。県下に於ける古墳時代人骨の調査に於いても、今後の調査を期待する点は大である。

以上のほかにも、多岐にわたる成果が見られるが、反面残された課題も成果の裏返しとして存在していることを忘れてはならない。

4. 横穴群を形成した集団の解明

200基を超す大横穴群の構築に際しては、工人集団はもとより被葬者集団の解明が待たれ、さらに周辺に分布する古墳との関連も考慮しなければならない。とくに、人類学的所見から湯の口横穴群出土の人骨と、隣接する鹿本町津袋大塚古墳1号人骨において、四肢骨の直径に差異が認められており、横穴の被葬者と石棺の被葬者との間において体格的に異なっていたことが明らかとなつた。^{註5}この相異がどのような点に起因するかは今後の調査に期待するところが大きい。

また、工人集団についても、横穴内部の構造について数種のパターンが認められる。

このことが、単に工人集団の技術的な差によるものか、被葬者集団の違いによって生じたものか、さらには時間的な差によるものかは不明であるが、録穴群全体から見れば、同種の横穴が隣接する傾向を示しており、地区によって横穴の形態が異なっているようであった。さらに、このことによって、横穴構築に際して規格基準が存在していたことも示唆しているようである。

5. 横穴群の規模の解明

先にも述べたが、湯の口横穴群の詳細な分布状況については溜池で水没したり、崖面の状態が悪く埋没したり、竹藪で中に入れず確認できなかつた場所が在つたりといった状況で、現段階としては横穴群の大まかな範囲と規模については把握できているが、正確な配置と規模は未だ白紙の状態であると言えよう。今後の調査によっては300基を超す横穴が確認される可能性が強く、とくに場所によっては1つの谷に2～3基の横穴しか確認されておらず、横穴群の広がりに対して密な場所との差が大き過ぎるようである。

このことからも100基以上は埋没している可能性を示唆していると言えよう。

最後になるが、嚴冬の湯の口横穴群の実測調査に参加された多数の人々と、遠路長崎から数度にわたり人骨の調査を行っていただいた松下先生をはじめ、長崎大学医学部第二解剖学教室の皆さん、遺物について御教示いただいた北九州市立考古博物館小田富士雄館長、さらに博物館においては館

長以下全員で調査に対する協力をいただき、調査員として感謝に耐えません。ここに記して篤くお礼申し上げます。

註1 嘉永2年（1849）4月、山鹿を訪れ、鍋田横穴群・長岩横穴群の装飾を実見・記録している。

註2 高木正文ほか「熊本県装飾古墳総合調査報告書」『熊本県文化財調査報告書第69集』1984

註3 松本健郎「熊本県横穴地名表」『熊本史学』47号 1976

註4 註2と同じ

註5 津袋大塚古墳環境整備作業中に石棺2基と石蓋土塙墓1基が発見され、鹿本町教育委員会では県文化課と長崎大学医学部第二解剖学教室の協力を得て昭和59年9月26日から4日間にわたって調査を実施したもので、1号石棺内から人骨3体が検出された。

「津袋大塚東側1号棺出土人骨研究報告書」鹿本町文化財調査研究報告第2集 1986

圖版



湯の口横穴群 遠景

図版2



52号横穴
1 人骨出土状況



2 1号人骨



3 2号人骨

図版3



53号横穴
1 人骨出土状況



閉塞石
2 (横穴内より)



3 1号人骨

图版4



53号横穴
1 2号人骨



2 3号人骨



3 54号横穴

図版5



54号横穴
奥壁（棟持柱
を刻んでいる）
1



2 1号人骨



3 1号人骨

図版6



1 124号横穴



2 横穴内より伸びた墓道



3 125号横穴遺物出土状況

図版 7



131号横穴
閉塞石出土
状況
1



羨門右側
張り出し
2



3 遺物出土状況

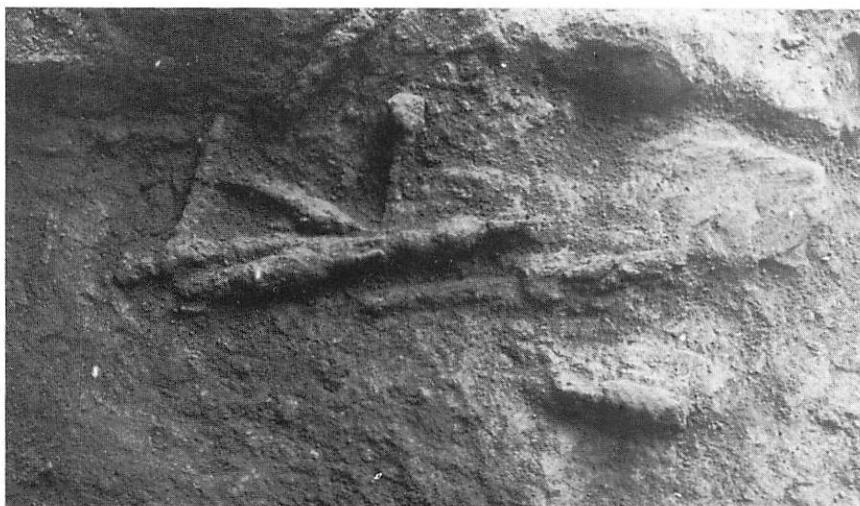
図版8



131号横穴
閉塞石根固
石除去状況
1

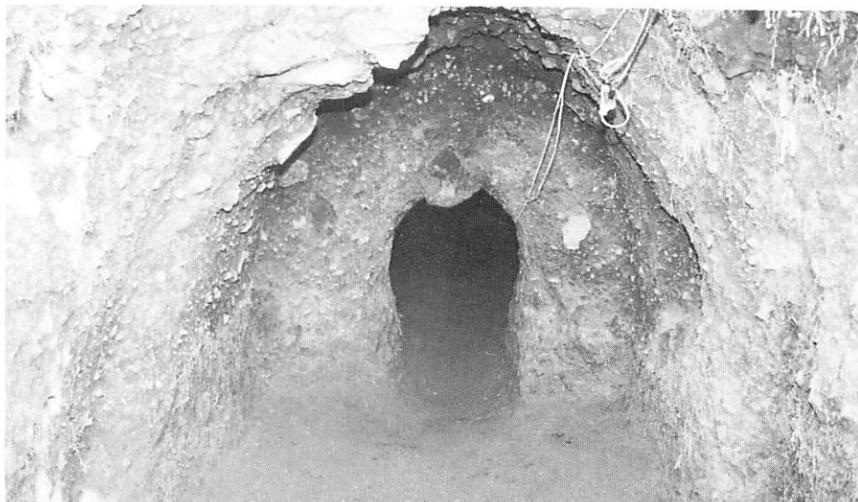


2 133号横穴

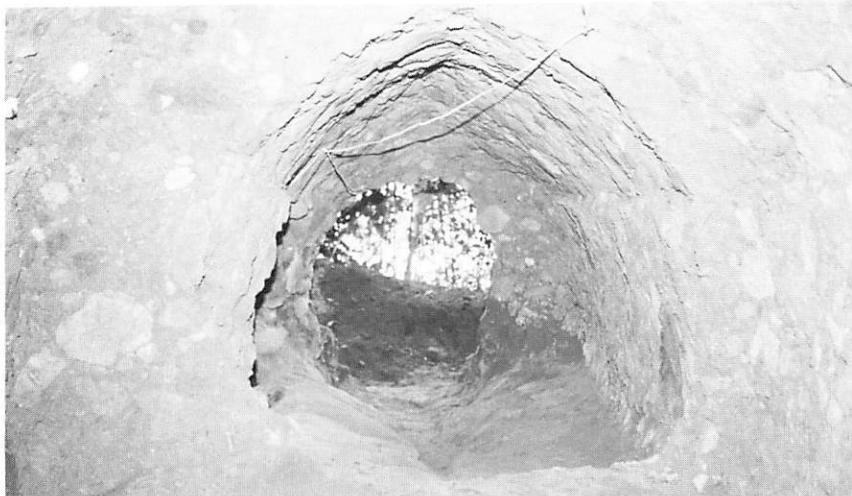


3 鉄器出土状況

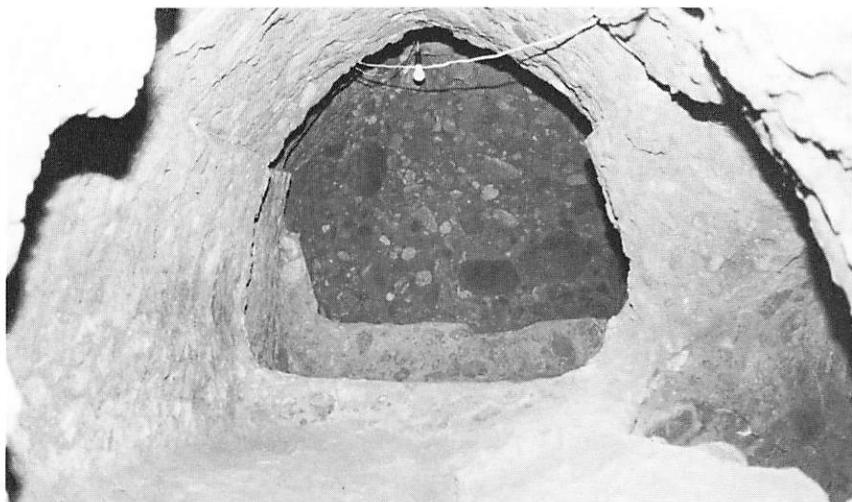
図版9



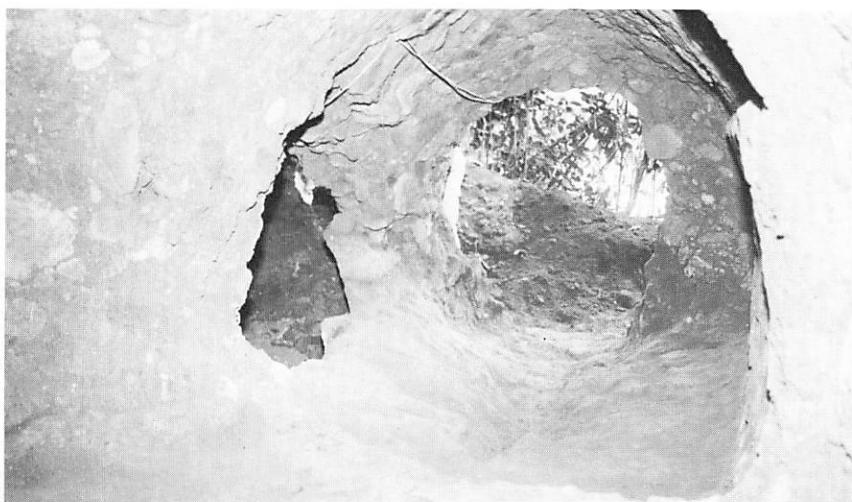
図版10



182号横穴
玄室より羨
門を臨む
1

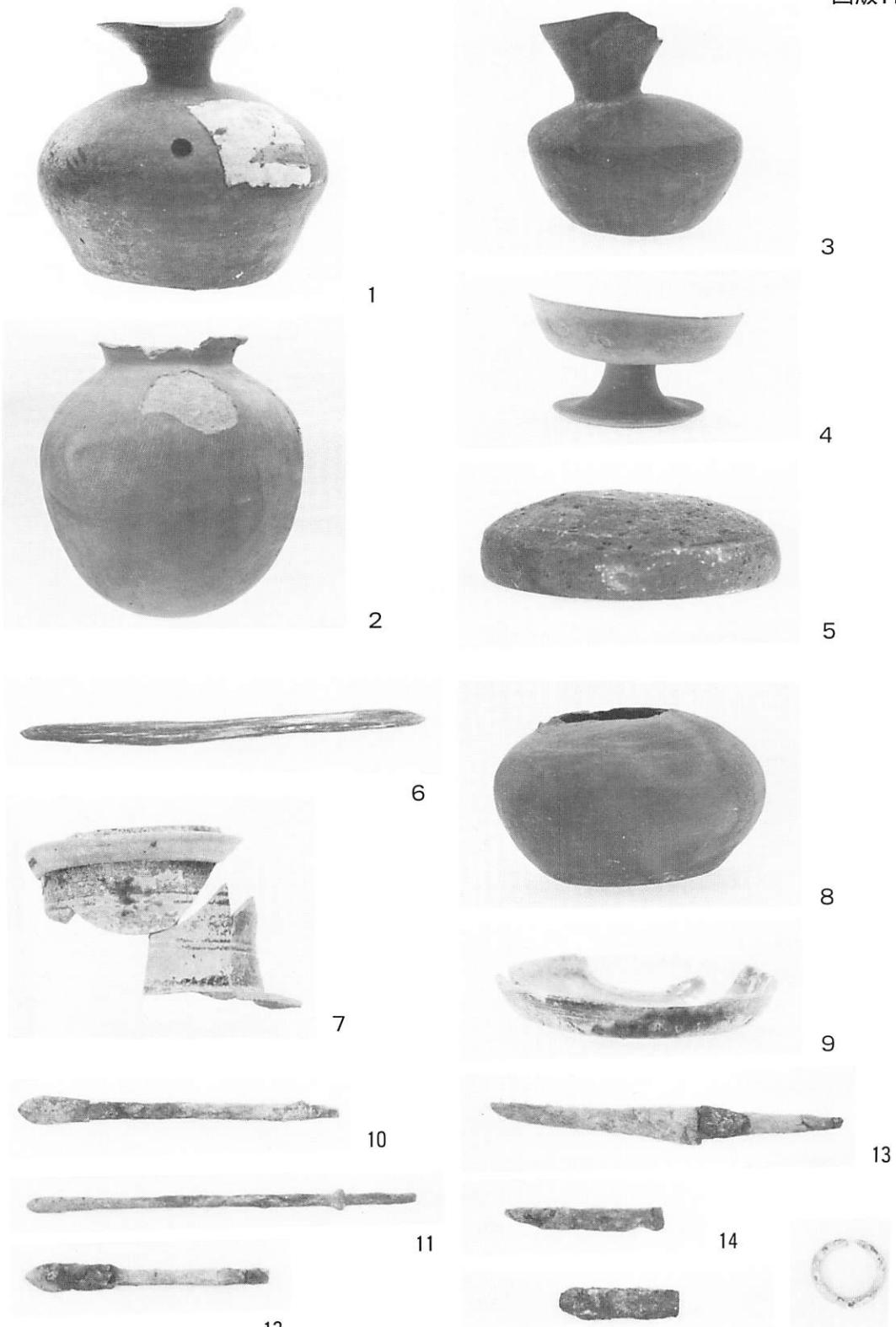


羨門より玄室
を臨む
2



羨門側壁に
開口する183号
3 横穴との切合部分

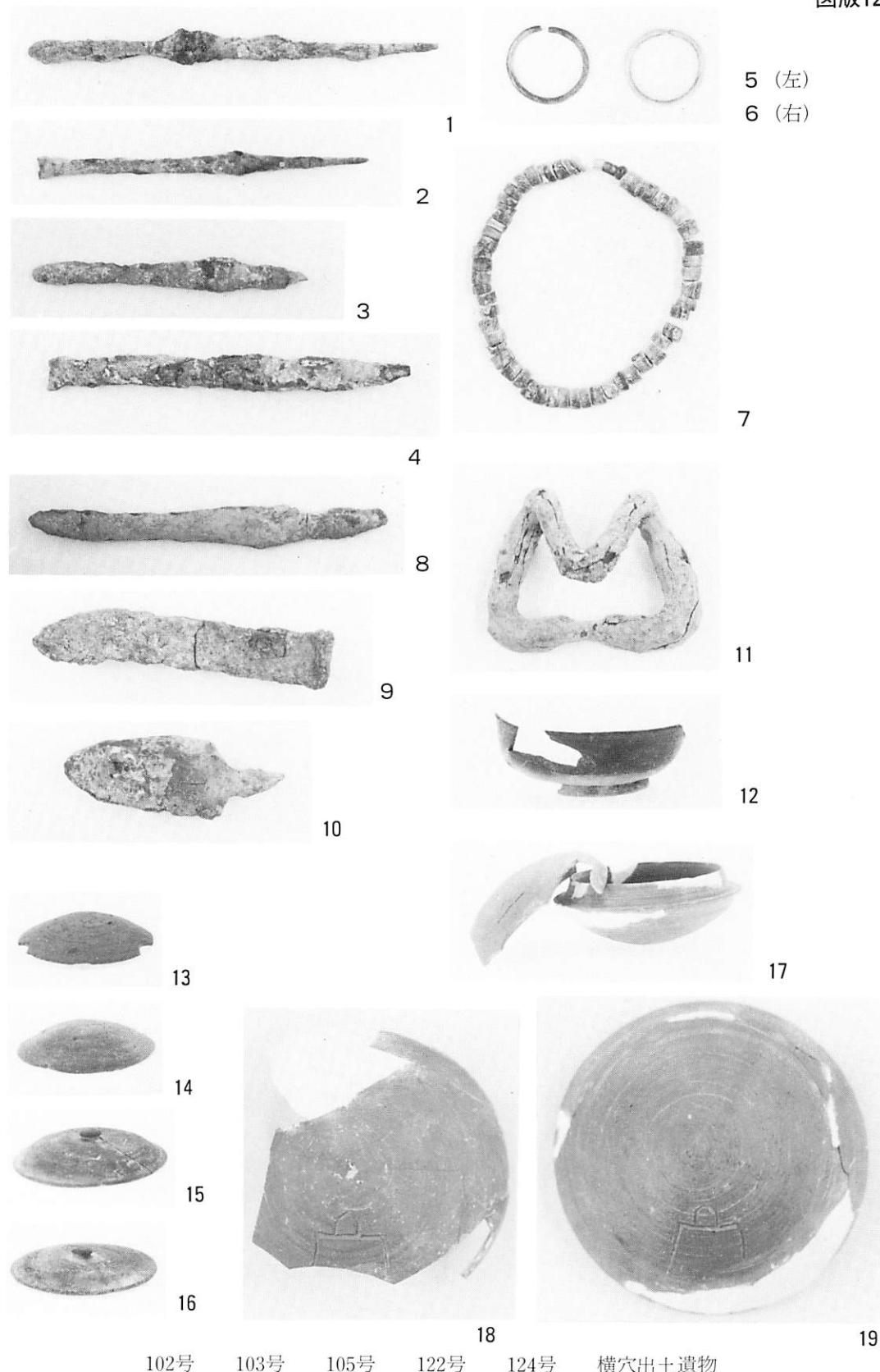
図版11



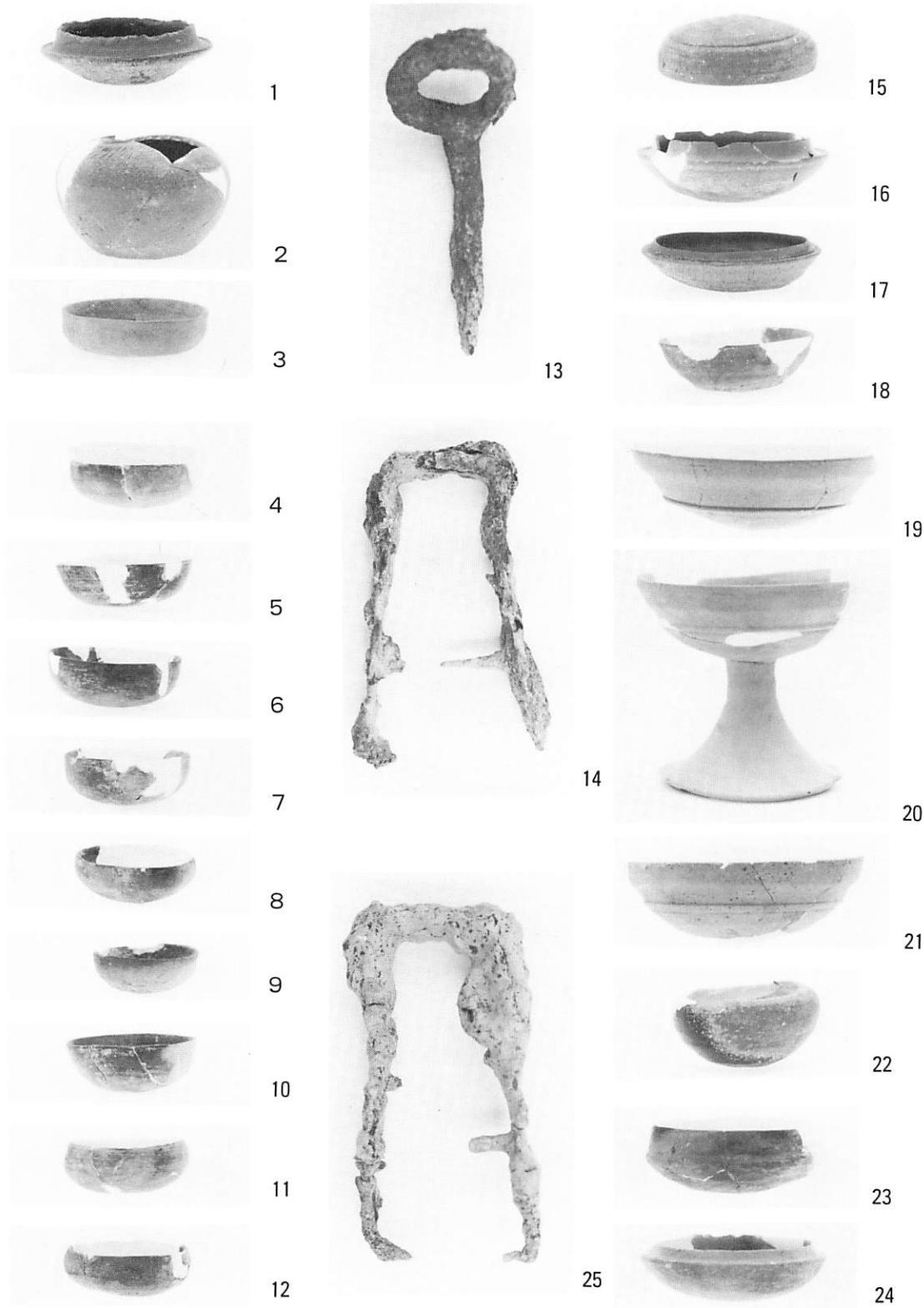
鹿本商工資料 52号、59号、61号 63号 101号 横穴出土遺物 15
(1~5) (6) (7) (8~9) (10~15) (16)

16

図版12

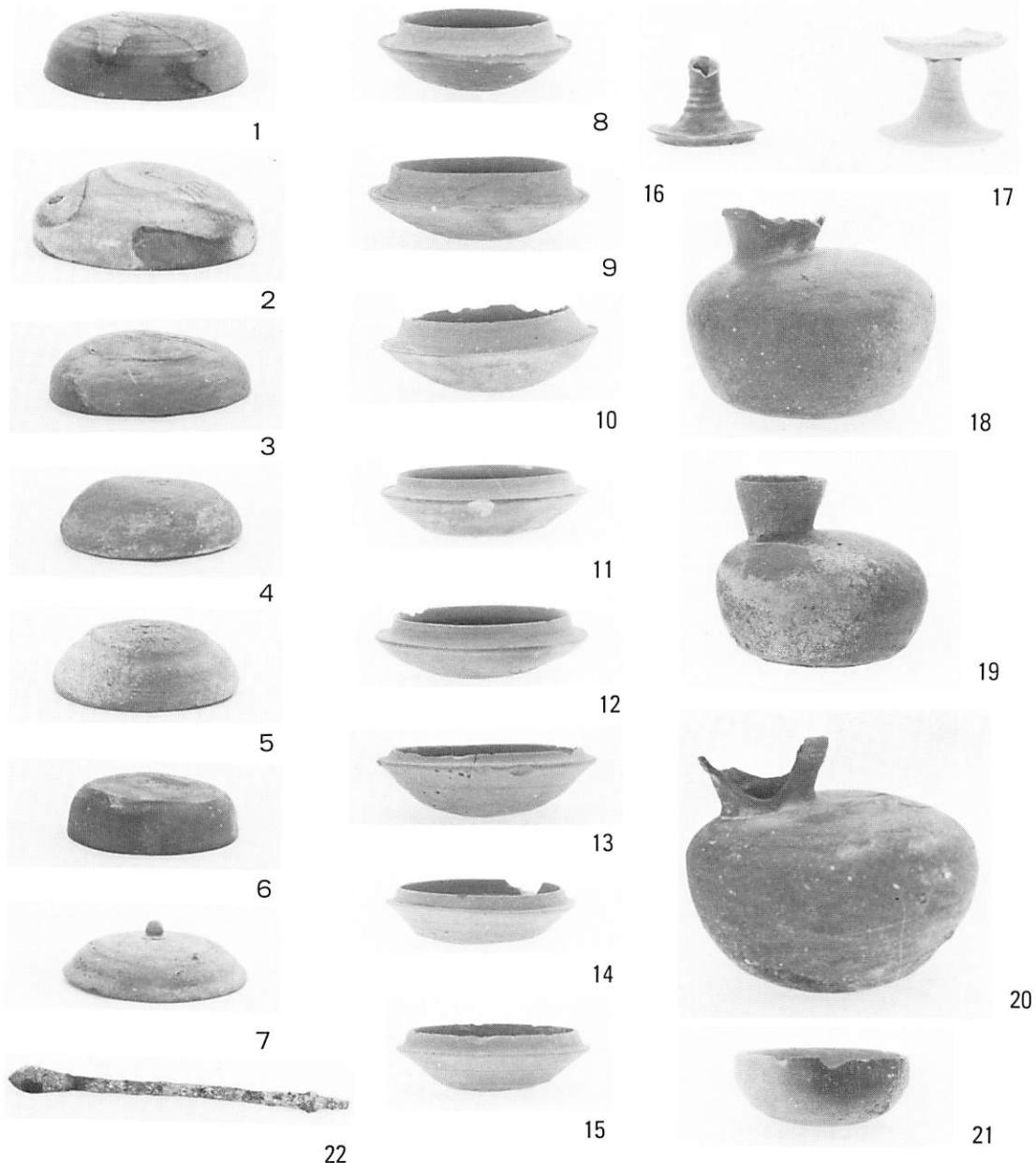


図版13



124号横穴（1～14） 125号横穴（15～25）出土遺物

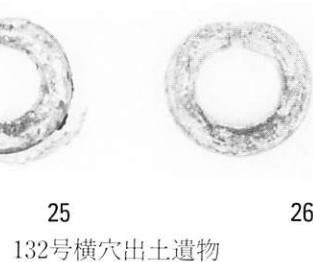
図版14



131号横穴出土遺物

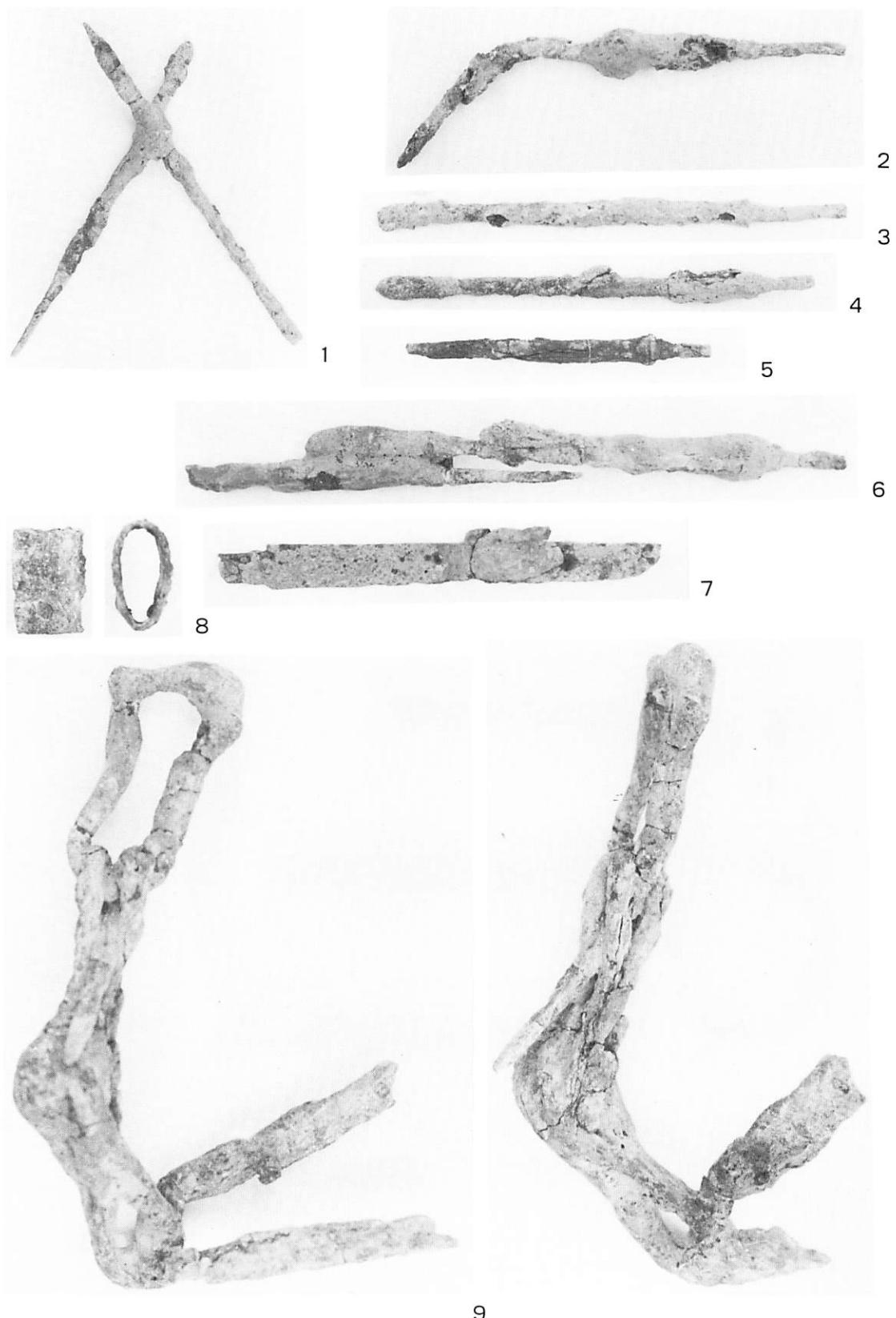


130号横穴出土遺物



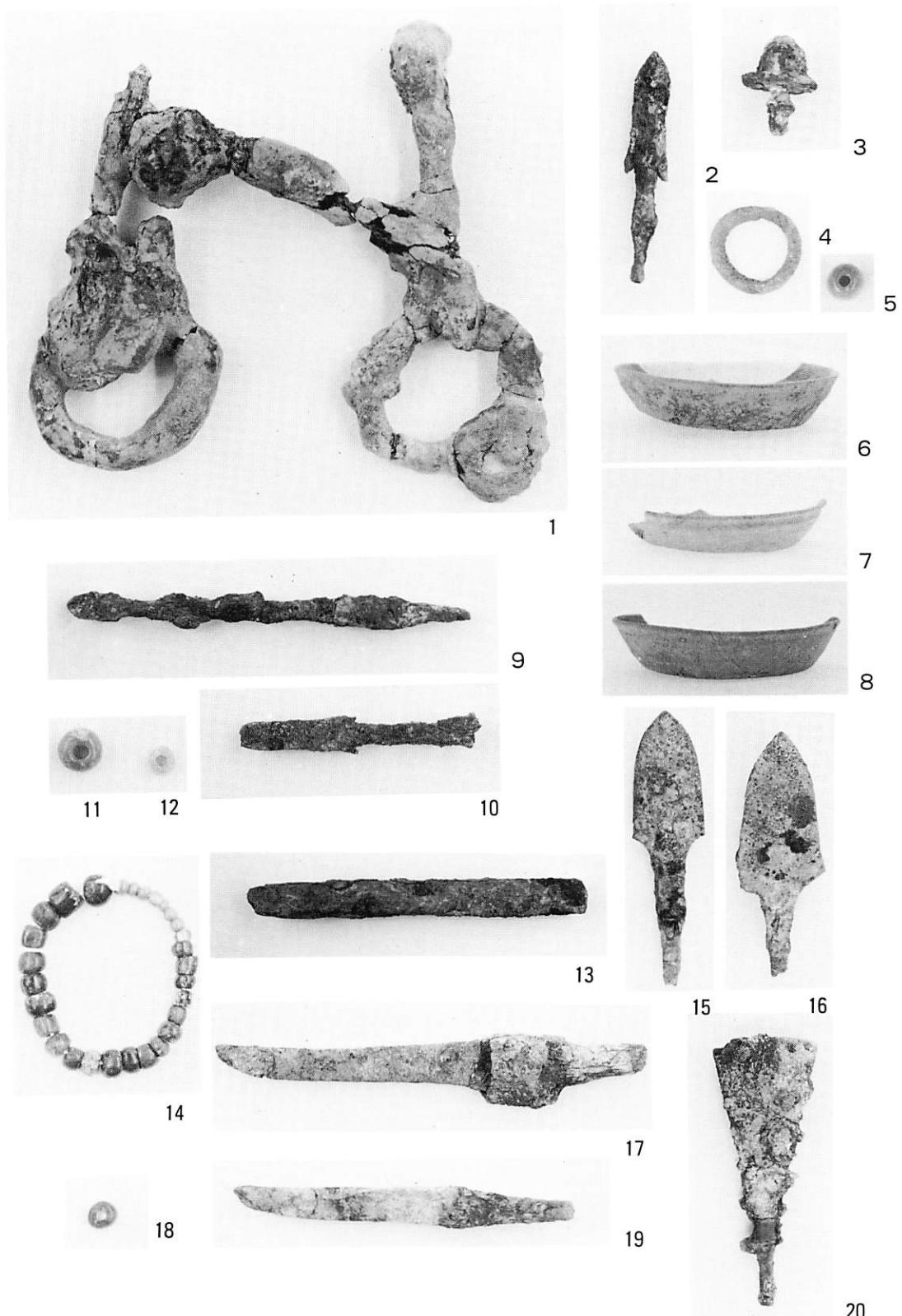
132号横穴出土遺物

図版15



133号横穴出土遺物

図版16



134号 138号 139号 143号 144号 146号 147号 175号 183号横穴出土遺物
 (1) (2~5) (6~8) (9~12) (13・14) (15~17) (18) (19) (20)

V 付 論

熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨

松下孝幸*・分部哲秋*・中谷昭二*

はじめに

熊本県山鹿市大字蒲生に所在する湯の口横穴群の発掘調査が1985年（昭和60年）に行なわれ、人骨が出土した。

古墳時代人骨は比較的多数の県から出土はしているが、一度にまとまって出土することがまれであり、また、保存状態もそれほど良好なものではないことから、古墳時代人骨の研究はそれほど進展していないのが現状である。熊本県での古墳人の全体像もまだ把握することができないでいるが、近年、報告資料の数も次第に増えてきたので、将来、本県での特徴を明らかにすることができるものと考えており、そのため資料の蓄積を行なっている。

隣町、鹿本町の津袋大塚古墳の墳丘そからは保存良好な人骨が出土しており、本横穴群出土人骨の関係などは興味ある問題であったが、本例は保存状態が著しく悪かったため、詳しい特徴を明らかにすることはできなかった。

人骨そのものの保存状態は著しく悪いものであったが、歯が残存していたので、各横穴ごとの残存体数と性別、年令を推定することができたので、この結果を報告しておきたい。

資料

各横穴墓から出土した人骨とそれぞれの性別、年令は表1に示すとおりである。130号墳からは5体分、53、131、132号墳からはそれぞれ4体分、52号墳からは3体分、54号墳および146号墳からは2体分、57、102号墳からはそれぞれ1体分が検出され、今回の調査では合計26体の人骨が出土したことになる。出土体数は多いが、保存状態は著しく悪いので、その形質的特徴はほとんど不明である。

* Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Shoji NAKATANI,

Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University

(長崎大学医学部解剖学第二教室（主任：内藤芳篤教授）)

図1 遺跡の位置

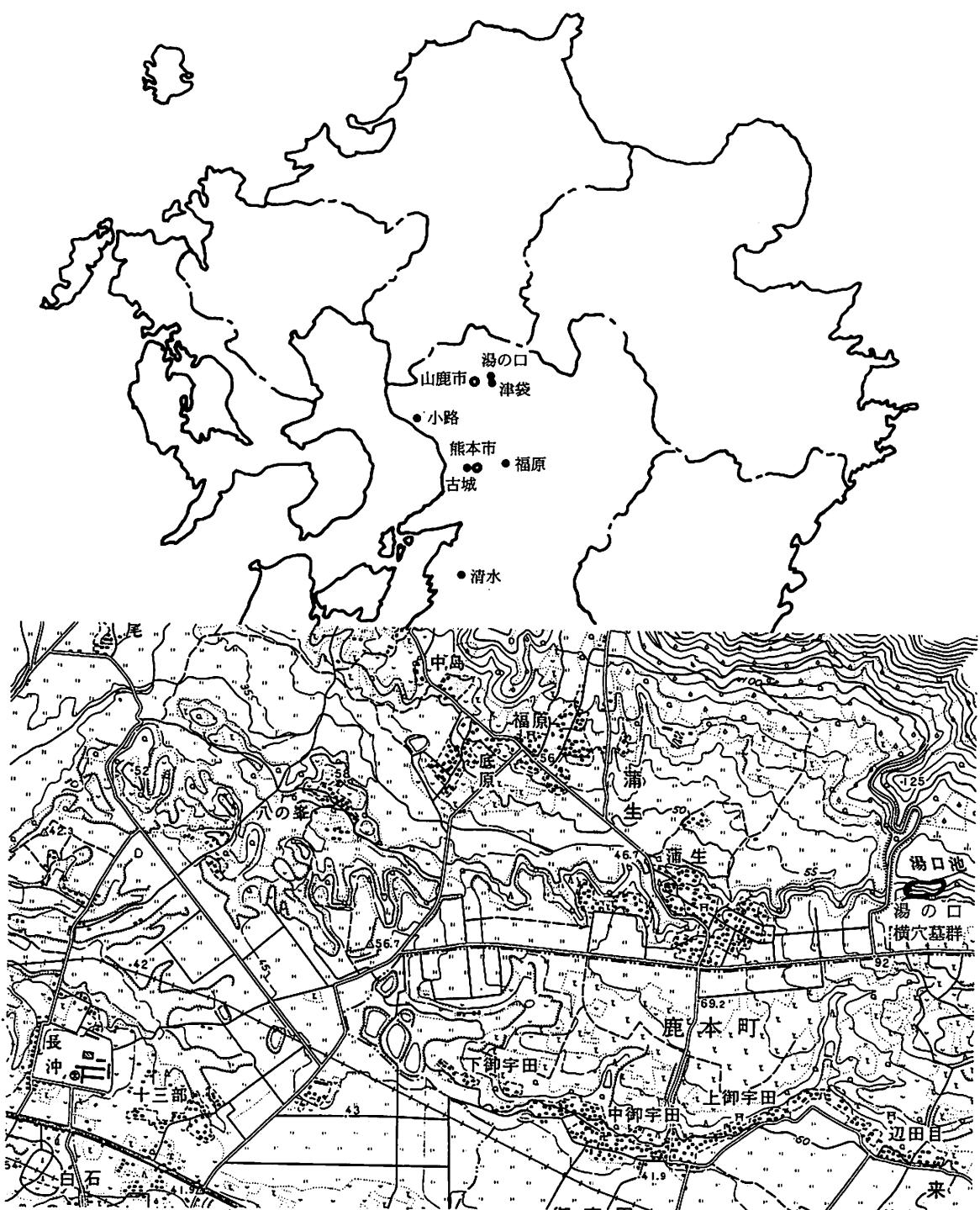


表1 出土人骨一覧

人骨番号	性別	年令
52号墳 頭蓋 I	男性	不明
II	不明	熟年
歯 I	男性	壮年
II	女性	壮年
III	不明	壮年
四肢骨 1	男性	不明
53号墳 1号人骨	男性	壮年
2-A号人骨	女性	壮年
2-B号人骨	男性	不明
3号人骨	不明	壮年
54号墳 1号人骨	不明	幼小兒？
2号人骨	不明	壮年
57号墳人骨	不明	熟年
102号墳人骨	不明	壮年
130号墳 1号人骨	男性	壮年
2号人骨	不明	不明
3号人骨	男性	不明
4号人骨	男性	不明
5号人骨	不明	不明
131号墳 1号人骨	男性	壮年
2号人骨	男性	壮年
3号人骨	男性	壮年
4号人骨	男性	熟年
132号墳 1号人骨	男性	壮年
2号人骨	男性	壮年
3号人骨	男性	壮年
4号人骨	不明	不明
146号墳 1号人骨	不明	不明
2号人骨	不明	不明

この26体の人骨は、別稿で述べられているように、考古学的所見より古墳時代後期に属する人骨群である。

計測方法は、Martin-Saller (1957) によった。また歯の計測は藤田 (1949) の方法で計測した。

所 見

骨と歯の計測値は一括して、文末に掲げた。

52号墳

玄室全体に人骨が散乱しており、各人骨を固体ごとに分けることはできなかった。残存人骨を精査したところ、頭蓋が2体分、歯は3体分、四肢骨は2体分認められた。しかし、四肢骨はこのうちの1体分しか観察できなかった。

頭蓋I（男性、年令不明）

輪郭が良く残っていたが、復元はできなかった。眉上弓の隆起は強く、このことから男性頭蓋と推定したが、年令は不明である。

頭蓋II（性別不明、熟年）

左側頭頂骨を中心に頭蓋冠が残存していた。骨壁は厚い。矢状縫合が観察できたが、内外両板とも閉鎖している。このことから年令を熟年と推定したが、性別は不明である。

歯I（男性、壮年）

残存歯を歯式で示すと、次のとおりである。

$/ M_2 M_1 \bigcirc / / / /$	$/ / / / / M_1 / /$
$/ / / / / / / /$	$/ / C / / / / /$
	$ \quad \bigcirc : \text{歯槽開存}$ $ \quad / : \text{不明 (破損) 以下同様} \quad $

咬耗度は Broca の1度である。

性別は歯の径が大きいことから、男性と推定した。年令は歯の咬耗が弱いことから、壮年と考えられる。

歯II（女性、壮年）

残存歯を歯式で表すと、次のとおりである。

$M_3 / M_1 / / / /$	$/ / / / P_2 M_1 M_2 M_3$
$/ / / / / / / /$	$/ / C / / / / /$

咬耗度は Broca の1度である。

性別は歯の径が小さいことから、女性と推定した。年令は歯の咬耗が弱いことから、壮年と考えられる。

歯III（性別不明、壮年）

残存歯を歯式で示すと、次のとおりである。

/ / / / / / / /	/ / / / / / M ₂ M ₃
/ M ₂ / P ₂ / / / /	/ / / P ₁ / M ₁ / /

咬耗度は Broca の 1 度である。

年令は歯の咬耗が弱いことから、壮年と推定したが、性別は不明である。

四肢骨 I (男性、年令不明)

奥床に残存していた四肢骨である。寛骨、大腿骨、脛骨、椎骨が残存していた。寛臼や大腿骨頭の径は大きい。このことからこの四肢骨は男性四肢骨と推定した。年令は不明である。

53号墳

奥床、左床および中央部に人骨が残存していた。

1号人骨 (男性、壮年)

現場では、頭蓋、歯、大腿骨などの四肢骨を確認したが、取り上げることができた骨は左右不明の大腿骨のみである。大腿骨は計測できないが、骨体の径は大きい。

残存していた遊離歯を歯式で示せば、次のとおりである。

M ₃ M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ C / /	/ / / P ₁ P ₂ M ₁ M ₂ M ₃
--	--

咬耕度は Broca の 1 度である。

性別は大腿骨骨体の径や歯の径が大きいことから男性と推定した。年令は歯の咬耗が弱いことから、壮年と考えられる。

2-A号人骨 (女性、壮年)

53号墳 2 号人骨として取りあげた人骨は 2 体分と判断した。

現場では、頭蓋、歯、大腿骨、寛骨などを確認した。頭蓋は前頭骨、左側頭頂骨、右側上顎骨の一部、下顎骨が残存していた。眉上弓の隆起はきわめて弱く、前頭鱗は膨隆している。また頭蓋壁は薄い。縫合は矢状縫合と冠状縫合が観察できたが、両縫合とも開離していたものと考えられる。下顎骨の高径は低い。

下顎骨などに釘植している遊離歯を歯式で示せば、次のとおりである。

M ₃ / M ₁ / / / / /	/ / C P ₁ / M ₁ M ₂ /
M ₃ / M ₁ P ₂ P ₁ C / /	/ / C P ₁ P ₂ / / /

咬耗度は Broca の 1 度である。

性別は眉上弓の隆起が弱いことから、女性と推定した。年令は縫合が開離していたものと考えられることから、壮年と推定した。

2-B号人骨 (男性、年令不明)

左側大腿骨の骨体が残存していた。骨体の径は大きく、上骨体断面示数は 76.47 となり、骨体上部は扁平である。

性別は大腿骨骨体の径が大きいことから男性と推定した。年令は不明である。

3号人骨（性別不明、壮年）

玄室の中央部で、通路にあたる部分に存在した人骨である。現場では大腿骨や上肢骨と思われる骨が認められたが、取り上げはほとんど不可能であった。遊離歯冠が残存しており、同定できたものを歯式で示せば、次のとおりである。

/ M₂ M₁ // / / / / | / / / / / M₁ M₂ /

咬耗度は Broca の 1 度である。

性別は不明であるが、年令は歯の咬耗が弱いことから、壮年と考えられる。

54号墳

左床に人骨が残存していた。大腿骨などの四肢骨と歯を検出したが、人骨はほとんど取り上げることができなかった。残存歯を精査したところ 2 体分あった。

1号人骨（性別不明、幼小児？）

同定できた遊離歯冠を歯式で示すと、次のとおりである。

/ / / P₂ / / / / | / / / P₁ / / M₂ /

このほかに上顎左側大臼歯、下顎右側大臼歯および下顎左側大臼歯がそれぞれ 1 個ずつ存在する。

咬耗度は著しく弱く、ほとんど咬耗が認められない。このことから年令は幼小児の可能性が強い。性別は不明である。

2号人骨

遊離歯冠を歯式で示すと、次のとおりである。

M₃ / / / P₁ / / / | / / / P₁ / / M₂ M₃
/ / M₁ / P₁ C / / | / / C P₁ P₁ / / /

咬耗度は Broca の 1 度である。

年令は咬耗が弱いことから壮年と推定したが、性別は不明である。

57号墳人骨（性別不明、熟年）

奥床から歯冠および歯冠片を検出した。同定できたのは、上顎左側第三大臼歯のみである。咬耗度は Broca の 1 度ではあるが、かなり咬耗しており、第三大臼歯の咬耗状態から、年令を熟年と推定した。性別は不明である。

102号墳人骨（性別不明、壮年）

遊離歯冠 2 個が残存していたにすぎない。これを歯式で示すと、次のとおりである。

M₃ M₂ / / / / / | / / / / / / /

咬耗度は Broca の 1 度である。

性別は不明であるが、年令は歯の咬耗が弱いことから、壮年と推定した。

130号墳

現場では左床に3体分（1、2、3号）、右床に2体分（4、5号）、合計5体分の人骨を確認した。

1号人骨（男性、壮年）

現場では下顎骨、歯冠、大腿骨、脛骨、肋骨片を確認したがいずれも保存状態は悪い。大腿骨骨頭の径は大きい。

残存歯冠を歯式で示すと次のとおりである。

M ₃	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
M ₃	M ₂	M ₁	/	P ₁	/	I ₂	/	/	/	/	/	/	M ₁	/	M ₃

咬耗度は Broca の 1~2 度である。歯冠の径はやや大きい。

性別は大腿骨骨頭や歯の径が大きいことから、男性と推定し、年令は歯の咬耗が弱いことから壮年と考えられる。

2号人骨（性別、年令不明）

四肢骨の一部が残存していたにすぎない。性別、年令は共に不明である。

3号人骨（男性、年令不明）

大腿骨などの四肢長骨の一部が残存していたが、取り上げ不可能であった。大腿骨の径は大きい。このことから性別は男性と推定した。年令は不明である。

4号人骨（男性、年令不明）

四肢骨の一部が残存していたが、これも取り上げは不可能であった。大腿骨の径は大きく、このことから性別は男性と推定したが、年令は不明である。

5号人骨（性別、年令不明）

骨片が残存していたにすぎない。

131号墳

131号墳では左床に2体分、右床に1体分、奥床に1体分、合計4体分の人骨（歯）を検出した。いずれも骨片と遊離歯のみである。

1号人骨（男性、壮年）

残存していた遊離歯を歯式で示せば、次のとおりである。

/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	M ₂	/
/	M ₂	M ₁	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	M ₂	M ₃	

咬耗度は Broca の 1 度である。

性別は歯の径の大きいことから男性と推定した。年令は歯の咬耗が弱いことから、壮年と考えられる。

2号人骨（男性、壮年）

残存していた遊離歯を歯式で示せば、次のとおりである。

/ / / / / C / /	/ / / / / / /
M ₃ M ₂ M ₁ P ₂ / / / /	/ / / / / M ₂ /

咬耗度は Broca の 1 度である。

性別は歯の径が大きいことから男性と推定した。年令は歯の咬耗が弱いことから、壮年と考えられる。

3 号人骨（男性、壮年）

残存していた遊離歯を歯式で示せば、次のとおりである。

/ / / / / / / /	/ / / / / M ₁ / /
/ M ₂ M ₁ / / / /	/ / / / / / / /

咬耗度は Broca の 1 度である。

性別は歯の径が大きいことから男性と推定した。年令は歯の咬耗が弱いことから、壮年と考えられる。

4 号人骨（男性、熟年）

上顎の犬歯と上顎左側 M₃ が残存していた。咬耗度は Broca の 2 度である。

性別は歯の径の大きいことから男性と推定した。年令は上顎犬歯の咬耗が強いことから、熟年と考えられる。

132号墳

132号墳では左床に 3 体分（1 号、2 号、3 号人骨）、右床に 1 体分（4 号人骨）、合計 4 体分の歯を検出した。

1 号人骨（男性、壮年）

残存していた遊離歯を歯式で示せば次のとおりである。

/ / / / P ₁ / I ₂ /	/ / C / / / / /
/ M ₂ M ₁ / / C / /	/ / C P ₁ / / / M ₃

咬耗度は Broca の 1 度である。

性別は歯の径の大きいことから男性と推定した。年令は歯の咬耗が弱いことから、壮年と考えられる。

2 号人骨（男性、壮年）

残存していた遊離歯を歯式で示せば、次のとおりである。

M ₃ / / P ₂ / / / /	/ / / / / / / /
/ M ₂ / / / / / /	/ / / / / / / /

咬耗度は Broca の 1 度である。

性別は歯の径が大きいことから男性と推定した。年令は歯の咬耗が弱いことから、壮年と考えら

れる。

3号人骨（男性、壮年）

残存していた遊離歯を歯式で示せば、次のとおりである。

M ₃	M ₂	/ /	P ₁	/ / /		/ /	C	P ₁	/ / /	M ₃
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	M ₂ M ₃

咬耗度は Broca の 1 度である。

性別は歯の径が大きいことから男性と推定した。年令は歯の咬耗が弱いことから、壮年と考えられる。

4号人骨（性別、年令不明）

右床に存在していた歯冠片で、性別、年令は不明である。

146号墳

現場では 2 体分の四肢骨を検出したが、著しく保存状態が悪く、取り上げに耐えられる状態ではなかった。従って、この 2 体とも性別、年令は不明である。

要 約

熊本県山鹿市大字蒲生にある湯ノ口横穴群の発掘調査が1985年（昭和60年）に行なわれ、人骨が出土した。この人骨群の保存状態は著しく悪いもので、その形質的特徴を明らかにすることはできなかつたが、人骨の体数や性別、年令を明らかにすることことができた。その結果は次のように要約することができる。

1. 今回の調査で出土したのは合計26体の人骨（歯）である。
2. この人骨群は古墳時代後期に属する人骨群である。
3. 頭蓋は計測および観察もできないもので、頭型や顔面の形態は全く不明である。
4. 四肢骨もほとんど計測できなかつたが、観察したところでは、男性の大腿骨骨体の径はかなり大きそうである。しかし、長さは不明である。
5. 歯冠はかなりよく残存していた。咬耗は大部分の例で、著しく弱く、このことから年令を推定すると、大部分が壮年ということになる。また、男性の歯の径は大きい。
6. 以上のように、本古墳人の特徴を明らかにすることはできなかつたが、男性大腿骨の径はかなり大きそうで、地理的に近い鹿本町の大塚石棺出土の古墳人の四肢骨が小さいことと対照的である。

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた山鹿市立博物館の中村幸史郎先生をはじめ諸先生方に感謝致します。》

参考文献

1. Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fisher Verlag, Stuttgart : 429-597.
2. 藤田恒太郎、1949、歯の計測規準について。人類学雑誌、61 : 27-32.
3. 松下孝幸、分部哲秋、中谷昭二、1985 : 熊本市古城横穴群出土の古墳時代人骨。古城横穴墓群（熊本県文化財調査報告第74集）：129-146。
4. 松下孝幸、1985 : 玉名市小路石棺出土の古墳時代人骨。滑石小路箱式石棺・本堂山遺跡（玉名市文化財調査報告第6集）：32-48。
5. 松下孝幸、分部哲秋、中谷昭二、1985 : 熊本県益城町福原横穴墓群出土の古墳時代人骨。福原横穴墓群（熊本県文化財調査報告第77集）：29-42。
6. 松下孝幸、中谷昭二、1986 : 熊本県鹿本町津袋大塚東側 1 号石棺出土の古墳時代人骨。津袋大塚東側 1 号石棺出土人骨研究報告書（鹿本町文化財調査研究報告第2集）：5-33。
7. 内藤芳篤、1975 : 塚原中世墳墓、丸尾 5 号墳出土の人骨。熊本県文化財調査報告、第16集：317-322
8. 内藤芳篤、分部哲秋、1980 : 清水 1 号古墳出土について。清水古墳群、野寺遺跡、林源衛門墓（熊本県文化財調査報告第41集）：22-28.

表 2 大腿骨主要計測値 (mm)

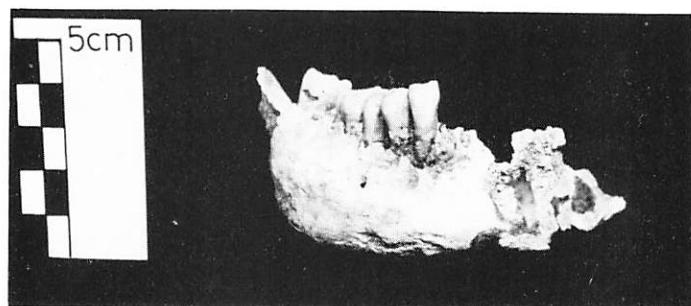
53-2-B		
男性		
左		
9.	骨体上横径	34
10.	骨体上矢状径	26
10/9	上骨体断面示数	76.47

表3 歯の計測値-近遠心経 (mm)

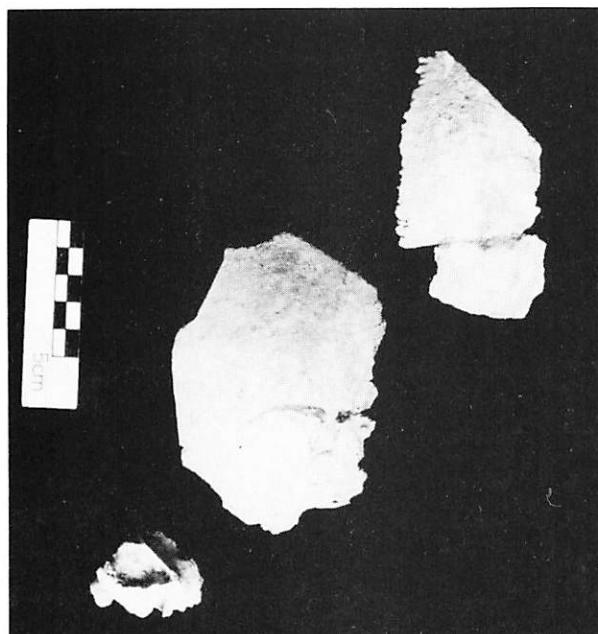
	52-1	52-2	52-3	53-1	53-2-A	53-3	54-1	54-2	102	130-1	131-1	131-2	131-3	131-4	132-1	132-2	132-3
	男性	女性	不明	男性	女性	不明	不明	不明	不明	男性	男性	男性	男性	男性	男性	不明	男性
上顎右側 I ₁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I ₂	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7.04	-	-
C	-	-	-	7.79	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7.06	-	-	-
P ₁	-	-	-	-	-	-	-	7.00	-	-	-	-	-	-	-	-	7.63
P ₂	-	-	-	7.18	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7.06	-
M ₁	11.26	-	-	9.66	10.92	10.55	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M ₂	10.83	-	-	10.21	-	9.17	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M ₃	-	9.80	-	-	-	-	-	-	-	8.76	-	-	-	-	-	8.71	9.71
左側 I ₁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I ₂	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C	-	-	-	-	7.99	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8.61	-	-
P ₁	-	-	-	7.74	7.21	-	-	7.04	-	-	-	-	-	-	-	-	7.58
P ₂	-	-	-	7.32	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M ₁	11.01	-	-	9.96	10.96	10.72	-	-	-	-	-	10.80	-	-	-	-	-
M ₂	-	8.98	10.53	9.78	10.12	9.73	-	9.81	10.54	-	10.07	-	-	-	-	-	-
M ₃	-	8.79	-	9.34	-	-	-	9.35	9.20	-	-	-	-	9.45	-	-	9.95
下顎右側 I ₁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I ₂	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6.55	-	-	-	-	-	-	-
C	-	-	-	-	7.06	-	-	6.89	-	-	-	-	-	-	7.64	-	-
P ₁	-	-	-	-	7.09	-	-	6.82	-	-	-	-	-	-	7.51	-	-
P ₂	-	-	-	-	7.39	-	7.22	-	-	-	-	-	-	7.04	-	-	-
M ₁	-	-	-	-	12.09	-	-	10.93	-	-	-	11.62	-	-	12.22	-	-
M ₂	-	-	10.68	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11.69	-	-
M ₃	-	-	-	-	10.94	-	-	9.72	-	9.93	-	-	11.15	-	-	-	-
左側 I ₁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
I ₂	-	-	-	-	-	-	-	6.96	-	-	-	-	-	-	-	-	-
C	7.70	-	-	-	7.11	-	-	6.82	-	-	-	-	-	-	7.55	-	-
P ₁	-	-	6.71	-	7.02	-	7.20	7.19	-	-	-	-	-	-	-	-	-
P ₂	-	-	-	-	7.50	-	7.21	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M ₁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M ₂	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11.87	-	-	-	12.00
M ₃	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9.09	10.25	-	-	-	11.55	-	10.53

表4 齒の計測値一類(唇) 舌径(mm)

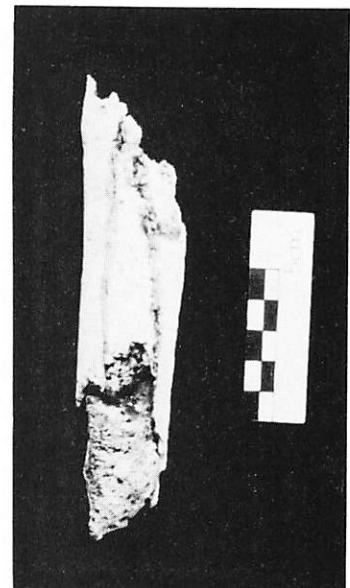
	52-1	52-2	52-3	53-1	53-2-A	53-3	54-1	54-2	102	130-1	131-1	131-2	131-3	131-4	132-1	132-2	132-3	
	男性	女性	不明	男性	女性	不明	不明	不明	不明	男性	男性	男性	男性	男性	男性	不明	男性	
上顎右側 I ₁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
I ₂	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5.50	-	-	
C	-	-	-	8.10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8.34	-	-	-	
P ₁	-	-	-	9.01	-	-	-	9.50	-	-	-	-	-	-	-	-	10.12	
P ₂	-	-	-	9.46	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9.62	-	
M ₁	12.54	-	-	11.30	12.85	11.34	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
M ₂	12.34	-	-	11.16	-	11.76	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
M ₃	-	12.27	-	-	-	-	-	-	-	10.86	-	-	-	-	-	11.49	11.36	
左側 I ₁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
I ₂	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
C	-	-	-	-	8.89	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9.13	-	-	
P ₁	-	-	-	9.19	10.26	-	-	9.56	-	-	-	-	-	-	-	-	9.99	
P ₂	-	-	-	9.57	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
M ₁	12.45	-	-	11.37	12.45	11.41	-	-	-	-	-	11.40	-	-	-	-	-	
M ₂	-	12.18	11.49	10.94	11.82	11.02	-	11.21	11.90	-	11.90	-	-	-	-	-	-	
M ₃	-	12.32	-	11.23	-	-	-	12.03	10.87	-	-	-	-	12.12	-	-	11.60	
下顎右側 I ₁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
I ₂	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6.19	-	-	-	-	-	-	-	
C	-	-	-	-	7.55	-	-	7.55	-	-	-	-	-	-	8.15	-	-	
P ₁	-	-	-	-	8.58	-	-	8.21	-	-	-	-	-	-	8.83	-	-	
P ₂	-	-	-	-	8.52	-	7.26	-	-	-	-	-	-	8.12	-	-	-	
M ₁	-	-	-	-	11.30	-	-	10.06	-	-	-	-	-	10.57	11.75	-	12.71	
M ₂	-	-	10.98	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10.54	-	-	10.87	
M ₃	-	-	-	-	10.32	-	-	11.54	-	9.16	-	-	10.41	-	-	-	-	
左側 I ₁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
I ₂	-	-	-	-	-	-	-	7.67	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
C	8.88	-	-	-	7.77	-	-	7.97	-	-	-	-	-	-	7.78	-	-	
P ₁	-	-	8.15	-	8.18	-	7.01	8.41	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
P ₂	-	-	-	-	8.63	-	7.72	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
M ₁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
M ₂	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11.35	-	-	11.41	
M ₃	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9.59	9.81	-	-	-	10.61	-	-	10.29



53-2-A (女性)・下顎骨



53-2-A (女性)・頭蓋



53-2-B (男性)・左大腿骨



52四肢骨 I (男性)

山鹿市立博物館調査報告書第5集

湯の口横穴群(Ⅰ)

昭和61年3月31日

編集 山鹿市立博物館
〒861-05熊本県山鹿市大字鍋田2085

発行 山鹿市教育委員会
〒861-05熊本県山鹿市掘明町1026-2

印刷 下田印刷

『湯の口横穴群(Ⅰ)』 山鹿市立博物館調査報告書 第5集 山鹿市教育委員会 1986年
 菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(1)

頁	行・図番	誤	正
8	17 行	第2図に示したものでは現地の状況を…	第3図に示したものでは現地の状況を…
8	32 行	この列の直下に60-B号横穴1基が、	この列の直下に61-B号横穴1基が、
9・10		(地図中)津袋塚古墳	(地図中)津袋大塚古墳
12	15 行	遺物(図版1-6、第6図)	遺物(図版11-6、第6図)
21	13 行	61- 6号横穴を挟んで存在する。	61-B号横穴を挟んで存在する。
25	9 行	須恵器片が出土した。	須恵器片が出土した(第21図)。
38	16 行	埋土中より鉄鏃片が1 点出土した。	埋土中より鉄鏃片が1 点出土した(第45図)。
40	13 行	図化したのは1点だけである。	図化したのは1点だけである(第50図)。
46	20 行	玄室は長方形で、	玄室は長方形のプランで、
46	28 行	横穴内通路に、鉄器(9) 1点が出土した	横穴内通路に、鉄器(20) 1点が出土した
48	20 行	土師器(図版13-4~12第60図10~18)	土師器(図版13-4~12第60図10~19)
55	1 行	128号横穴(第67図)	128号横穴
55	5 行	遺物2点とも須恵器である。	遺物2点とも須恵器である(第67図)。
61	72 図	(スケール 1/300) 数値0、5、10cm	(スケール 1/600) 数値0、10、20cm
63	1 行	132号横穴(図版8-2~3第75図)	132号横穴(第75図)
66	6 行	鉄鏃(図版15-1~6	鉄鏃(図版15-1~7
67	15 行	茎と切失の一部を欠くが、	茎と切先の一部を欠くが、
68	7 行	3は広根斧箭式で見は撥形で、	3は広根斧箭式で身は撥形で、
76	第96 図	(図の遺物番号記載漏れ)	左の図が4、右が5
79	10 行	このうち2~9までは小型で	このうち3~10は小型で
80	23 行	鉄器(第103図2-4)	鉄器(図版16-15~17 第103図2-4)
87	8 行	横穴群の実瀬調査の実施を行うこと	横穴群の実測調査の実施を行うこと
89	23 行	録穴群全体から見れば、	横穴群全体から見れば、
90	11 行	「津袋大塚東側1号棺出土人骨研究報告書」	『津袋大塚東側1号石棺出土人骨研究報告書』

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市立博物館調査報告第5集 湯の口横穴群(I)』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成 17 年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名:山鹿市立博物館調査報告第5集 湯の口横穴群(I)

菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(1)

発行:山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話: 0968-43-1651

URL:<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日:2025 年6月 26 日